

令和 2 年度
ニッカウヰスキー(株)北海道工場
建造物調査報告書



令和 3 年 3 月

北海道 余市町教育委員会
特定非営利活動法人 歴史的地域資産研究機構

はじめに

本報告書は、余市町から委託された「近代和風建築等総合調査にかかる調査票作成業務（ニッカウキスキー(株)）」の報告書である。委託期間は、2020(令和2)年5月15日から2021(令和3)年1月15日である。

本委託業務は、余市町内に於ける近代和風建築物等の記録票作成業務であるが、特にニッカウキスキー(株)北海道工場内の、町指定文化財、登録有形文化財を含む主要な歴史的建造物20件に関して、北海道工場所蔵の旧図面110点や写真記録のほか、本社が所蔵する稟議書など、従来縦覧できなかった文献資料などについても可能な限り目を通し、構内主要歴史的建造物の現状や沿革のほか、建築的、歴史的価値の評価を行うことを目的として報告書を作成した。

業務は、特定非営利活動法人歴史的地域資産研究機構の角幸博（代表理事・北海道大学名誉教授）・小林孝二（技術専門員）・東田秀美（理事）の3名が担当した。

いうまでもなく、ニッカウキスキー(株)は、創設者竹鶴政孝(1894-1979)によって、1934(昭和9)年大日本果汁株式会社として成立し、1940(昭和15)年には、ニッカウキスキー、ニッカブランデーが発売され、以降工場施設の拡充が展開されてきた。

同工場の史的価値については、1)地域の歴史を伝える、2)創建当初の産業施設群の景観をよく維持している、3)工場施設の設計図書類が保存されているという3点があげられるが、本調査を通じて、改めて、現在も稼働し続けている北海道工場内で、明記されたデザインコードはないものの、正門前広場から中央通りの景観を維持しつつ、工場内施設の外観意匠の統一を意識的に継続してきた姿勢が明らかとなり、建造物の意匠のみならず、製品製造過程を視覚的に捉えることのできる施設群が良質な状態で維持されてきたことは、ともすると合理的なサイクルで再整備されがちな産業施設群にあって、非常に貴重な存在といえることができる。

本報告書作成にあたり、ニッカウキスキー株式会社、同北海道工場のほか、余市町教育委員会社会教育課、株式会社シン技術コンサル、元有限会社本間組建工の多大なご協力をいただいた。記して深謝いたします。

本報告書を通じて、同工場の史的価値を考察する上での基本的な資料として、またニッカウキスキー(株)北海道工場のさらなる魅力向上や余市町の文化観光施策に少しでも資することができれば望外の喜びである。

特定非営利活動法人歴史的地域資産研究機構 代表理事
角 幸博（北海道大学名誉教授）

令和 2 年度
近代和風建築等総合調査にかかる調査票作成業務
(ニッカウキスキー(株)) 報告書

目 次

はじめに

第 1 章	ニッカウキスキー(株)の沿革と北海道工場の変遷	1
1-1	ニッカウキスキー 前史	1
1-2	「大日本果汁株式会社」創設から「ニッカウキスキー株式会社」へ	1
1-3	ニッカウキスキー(株)北海道工場施設の変遷	4
1-3-1	創設期の北海道工場	4
1-3-2	1935(昭和 10)年頃の北海道工場	5
1-3-3	1942(昭和 17)年頃の北海道工場	6
1-3-4	1955(昭和 30)年中頃の北海道工場	7
1-3-5	1955(昭和 30)年中頃の北海道工場	8
1-3-6	1970(昭和 45)年の北海道工場	9
1-3-7	ニッカウキスキー(株)北海道工場 配置図	10
第 2 章	ニッカウキスキー(株)北海道工場に残る歴史的建造物	12
2-1	事務所棟(登録有形文化財)	12
2-1-1	建築当初の事務所棟	12
2-1-2	事務所棟(正門棟)の変遷	12
2-1-3	事務所棟(北棟)の変遷	14
2-1-4	事務所棟(南棟)の変遷	14
2-1-5	耐震工事に伴う事務所棟の改修	15
2-1-6	事務所棟の現在	16
2-2	工場(蒸溜工場 B・C 棟)(登録有形文化財)	27
2-3	貯蔵庫(蒸溜液受タンク室)(登録有形文化財)	31
2-4	展示室・混和室(リキュール棟)(登録有形文化財)	34
2-5	第一乾燥塔(登録有形文化財)	37
2-6	第二乾燥塔(登録有形文化財)	43
2-7	旧研究室兼居宅(現リタハウス)(登録有形文化財)	47
2-8	旧竹鶴邸(登録有形文化財)	55
2-9	旧大日本果汁株式会社余市工場創立事務所(旧社長室・会長室)(余市町指定有形文化財)	65
2-10	第一貯蔵庫(登録有形文化財)	69
2-11	第二貯蔵庫	73
2-12	第三貯蔵庫	78
2-13	機械工場(工務係室)	83

2-14	麦芽倉庫・フレコン室	87
2-15	現場事務所（旧給食室）	90
2-16	連続蒸溜工場	94
2-17	醱酵室・濾過室	97
2-18	製樽工場	100
2-19	アーチ壁	105
2-20	石造裏門	108
2-21	調査記録票	110
第3章	ニッカウキスキー(株)北海道工場の歴史的建造物の評価	154
資料	ニッカウキスキー(株)北海道工場所蔵 古図面名称一覧	164
	奥山儀八郎 版画	168
	参考文献一覧	170

例 言

本報告書内の現況写真は、特に記載のないものは、株式会社シン技術コンサルからの提供である。なお、写真キャプションの後ろの*印は、特定非営利活動法人歴史的地域資産研究機構撮影写真である。

報告書内の現況図面は、株式会社シン技術コンサルからの提供である。

協力者

ニッカウキスキー株式会社

人事部長 福山久氏

生産管理部エンジニアリンググループリーダー担当部長 井上博彦氏

同北海道工場 総務部長 高橋智英氏

同 工場長 岩武公明氏

同 総務部 村田和彦氏

余市町教育委員会社会教育課

課長 浅野敏昭氏

文化財係長 小川康和氏

元有限会社本間組建工

差波毅彦氏

差波珠美氏

本報告書の担当は、以下の通り。

角 幸博（はじめに、2-5～2-12、第3章、校正、編集、監修）

小林孝二（第1章、2-1～2-4、2-13～2-21、校正）

東田秀美（表紙、目次、校正、編集、全体調整）

第1章 ニッカウキスキー(株)の沿革と北海道工場の変遷

1-1 ニッカウキスキー 前史

ニッカウキスキーの歴史を概観するにあたっては、その創業者であり、「日本のウイスキーの父」とも呼ばれる竹鶴政孝の生い立ちを欠かすことはできない。

竹鶴政孝は、1894(明治27)年、広島県賀茂郡竹原町(現在の竹原市)で酒造業を営む竹鶴敬次郎の三男として生まれた。後年、父の酒造りに臨む真摯な姿勢に政孝が強い影響を受けたともいわれている。

1913(大正2)年、大阪高等工業学校(現在の大阪大学工学部)醸造科へ進学。1916(大正5)年春、摂津酒造入社。2年後の1918(大正7)年には社命によりウイスキー製造法研究のため、スコットランドへ渡りグラスゴー大学で学ぶ。翌年にはウイスキー蒸溜所で実習を始め、1920(大正9)年1月、生涯の伴侶となるリタ("Rita" Jessie Roberta Cowan)と結婚。同年秋、日本へ帰国。

摂津酒造は、政孝の成果を生かし国産ウイスキー製造を企画していたが、第一次世界大戦後の恐慌の影響を受け、資金調達が困難となり実現できなかったといわれる。1922(大正11)年、政孝、摂津酒造を退社。

1923(大正12)年、国産ウイスキーの製造を計画していた寿屋へ入社。1925(大正14)年にウイスキー蒸溜窯などの調査のためにスコットランドを視察。1929(昭和4)年には国産初の「サントリーウイスキー白札」が発売された。

1934(昭和9)年春、竹鶴政孝は寿屋を退社し、同年夏、発起人8人とともに「大日本果汁株式会社」を創立。竹鶴政孝は専務取締役就任。

1-2 「大日本果汁株式会社」創設から「ニッカウキスキー株式会社」へ

1934(昭和9)年7月、大日本果汁株式会社が設立され、本店を東京に置くとともに、北海道余市郡余市町黒川町に工場用地を取得し、ただちに製汁工場、壺詰工場、汁液貯蔵庫、原料倉庫、包装資材倉、事務所、社宅などの建設を開始した。

大日本果汁株式会社は「大日本果汁」の名が示すように、当初は「果実ヲ压榨シ希釈セスシテ飲用ニ供スル果実汁ノ製造販売並ニ其付帯事業」を事業目的とし、翌年には「ニッカ林檎果汁」を発売しているが、同年、事業目的に「酒精含有飲料ブランデー・ウイスキーの製造販売」他を加え、翌年2月にはブランデー蒸溜用ポットスチルを設置。本社を余市工場に移転するとともに、酒精含有飲料の製造免許を取得する。

1939(昭和14)年、ウイスキーの醸造を開始。1940(昭和15)年冬には蒸溜機1基を増設し、同年6月、ニッカウキスキー第一号となる「ニッカウキスキー」と「ニッカブランデー」を発売した。

1943(昭和18)年、竹鶴政孝は社長に就任。1945(昭和20)年秋には余市農業会による林檎果汁の製造開始に伴い、林檎果汁類の製造を終了。1952(昭和27)年、社名を「大日本果汁株式会社」から「ニッカウキスキー株式会社」に変更した。

1961(昭和36)年、竹鶴リタ夫人逝去。1970(昭和45)年に竹鶴政孝は会長に就任。1979(昭和54)年、創業者であり会長を務めていた竹鶴政孝逝去。

1980(昭和55)年、余市工場(蒸溜所)に所在する創業時の本社事務所(詳細後述)が

余市町文化財に指定。2003（平成 15）年、2004（平成 16）年、北海道工場、「北海道遺産」に選定。2005（平成 17）年、北海道工場内の施設 9 棟（詳細後述）が国の登録有形文化財となった。

表 1-1 竹鶴政孝とニッカウヰスキー㈱北海道工場の沿革

西暦	和暦	月	調査対象 建造物No.	出来事
1894	明治 27	6		竹鶴政孝、広島県竹原町の醸造家、竹鶴敬次郎の三男として生まれる
1913	大正 2	4		竹鶴政孝、大阪高等工業学校（現大阪大学）醸造科へ入学
1916	大正 5	3		竹鶴政孝、摂津酒造入社
1918	大正 7	12		竹鶴政孝、ウヰスキー製造法研究のためスコットランド、グラスゴーへ
1919	大正 8	4		竹鶴政孝、蒸溜所での実習開始
1920	大正 9	1		竹鶴政孝、リタ（ジェシー・ロベール・カウン）と結婚
	大正 9	11		竹鶴政孝、リタ夫人と共に帰国
1922	大正 11			竹鶴政孝、摂津酒造退社
1923	大正 12	6		竹鶴政孝、寿屋入社
1925	大正 14	6		竹鶴政孝、ウヰスキー蒸溜窯等調査のためスコットランド視察
1931	昭和 6 頃		7	但馬八十次郎として、後の研究室建設、1942(昭和 17)年固定資産編入
1934	昭和 9	3		竹鶴政孝、寿屋退社
	昭和 9	7		大日本果汁株式会社設立、本社東京、竹鶴政孝専務取締役就任
	昭和 9 頃		9	旧事務所建設、1935（昭和 10）年固定資産編入
1935	昭和 10	4		「ニッカ林檎果汁」発売
	昭和 10 頃		2	旧蒸溜工場 B・C 棟
	昭和 10 頃		3・8	旧貯蔵庫（現蒸溜受タンク室）建設、1936（昭和 11）年固定資産編入・旧竹鶴邸建設
1936	昭和 11	7		北海道余市町に本社移転、東京営業所開設
	昭和 11	8		酒精含有飲料の製造免許下付される
1937	昭和 12	3		「甘味林檎汁」発売
1938	昭和 13	9		「アップルワイン」出荷開始
1939	昭和 14 頃		4	旧リキュール工場建設、1940（昭和 15）年固定資産編入
	昭和 14 頃		10	第一貯蔵庫建設、1940（昭和 15）年固定資産編入

1940	昭和 15	6		「ニッカウキスキー」、「ニッカブランデー」発売
	昭和 15	10		海軍監督工場に指定
	昭和 15 頃		5	第一乾燥塔（旧製粉工場、旧第二乾燥室、旧第六倉庫）建設、1941（昭和 16）年固定資産編入
	昭和 15 頃		6	第二乾燥塔（旧第五倉庫、旧第一乾燥室、旧債四倉庫）建設
1942	昭和 17 頃		1	事務所棟（正門、旧表事務所、旧玄関新倉庫、旧ブドー工場、変電室）建設、1943（昭和 18）年固定資産編入
	昭和 17 頃		20	裏門石積塀
	昭和 17 頃		11	第二貯蔵庫建設、1946（昭和 21）年固定資産編入
	昭和 17 頃		12	第三貯蔵庫建設、1946（昭和 21）年固定資産編入
1943	昭和 18	11		竹鶴政孝、社長に就任
1944	昭和 19	11		陸軍監督工場に指定
1945	昭和 20	9		林檎果汁類の製造終了
1946	昭和 21 頃			旧竹鶴邸、山田町に移築
1949	昭和 24 頃		6	連続蒸溜工場建設、1958（昭和 33）年固定資産編入
	昭和 24 頃		4	麦芽倉庫・フレコン室
	昭和 24 頃		19	アーチ壁
1952	昭和 27	4		東京都に本社移転
	昭和 27	8		ニッカウキスキー(株)に商号変更
1957	昭和 32		15	旧給食場建設、1957（昭和 32）年固定資産編入
1959	昭和 34		13	旧機械修理工場建設、1959（昭和 34）年固定資産編入
1960	昭和 35		17	発酵室・濾過室建設、1960（昭和 35）年固定資産編入
1961	昭和 36	1		竹鶴リタ夫人逝去
1964	昭和 39	9	18	製樽工場建設
1970	昭和 45	5		竹鶴政孝、会長に就任
1979	昭和 54	8		竹鶴政会長、逝去
1980	昭和 55	2		創業時の本社事務所、余市町文化財に指定
2002	平成 14	12		竹鶴政孝旧自邸を北海道工場内に再移築
2003	平成 15	4		北海道工場、「自然環境功労者」として環境大臣賞受賞
2004	平成 16	10		北海道工場、北海道遺産に選定
2005	平成 17	2		北海道工場の施設 9 棟、国の登録有形文化財に

1-3 ニッカウキスキー(株)北海道工場施設の変遷

先述しているようにニッカウキスキー(株)北海道工場は、1934(昭和9)年7月、大日本果汁株式会社として設立され、本店を東京に置くとともに、北海道余市郡余市町黒川町に工場用地を取得し、ただちに工場施設の建設を開始した。

ニッカウキスキー(株)北海道工場には110点に及ぶ同工場に関わる建物設計図、配置図等が所蔵されている。この内、北海道工場全体の変遷を知る事の出来る工場建物の配置図として、創業時の1934(昭和9)年頃から高度経済成長期に当たる1970(昭和45)年までの資料が10数点存在する。ここではこれらの資料の中から、ほぼ制作年代を判定できる資料¹を抽出し古写真等の資料とともに、創設期から昭和40年代中頃までの北海道工場の変遷を概観してみたい。

1-3-1 創設期の北海道工場

北海道工場所蔵資料『大日本果汁株式会社余市工場敷地及各建物配列圖』No.26は、北海道工場草創期の工場配置を示す図と考えられ、現存する事務所(町指定文化財)北側に工場、壕詰工場倉、第一倉庫、第二倉庫が並び、東側には専務社宅、研究所。東側の現事務所棟付近には合宿所、社宅などが並び、事務所の南側には当初は所有地外ではあるが但馬倉庫が確認できる。

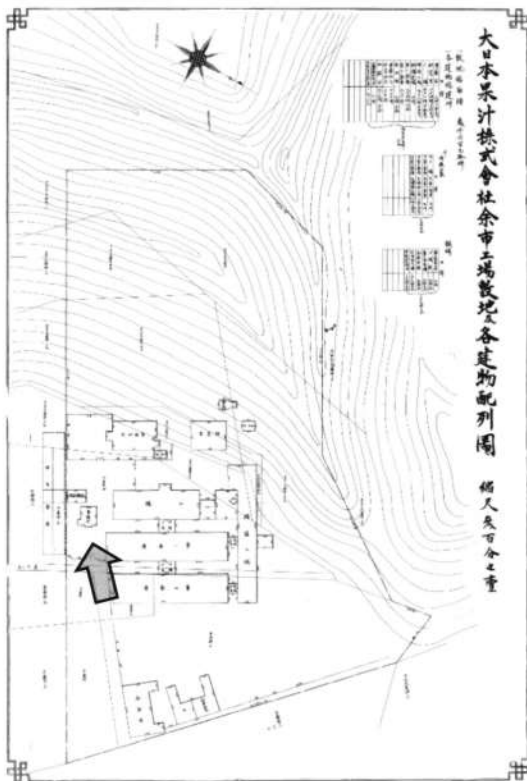


図 1-3-1 創業当時の北海道工場(矢印位置が右の写真) 写真 1-3-1 創業間もない頃の正門付近

¹ ニッカウキスキー(株)北海道工場所蔵 稟議書中の建築・施設関係資料約100件、固定資産台帳、確認申請書類を合わせて検討し、北海道工場所蔵資料110点中の工場配置図から配置図作成年代をほぼ特定でき、かつ工場変遷の画期と考えられる図面を6点選定し、その変遷を考察した。

1-3-2 1935(昭和10)年頃の北海道工場

北海道工場所蔵資料『工場敷地及建物配列圖』No.3は、1935(昭和10)年頃の工場配置図とされる。

創業時には第二倉庫までであったが、その東側に第三倉庫から第七倉庫までが建ち、特に第四と第五、第六と第七倉庫の間にそれぞれ「乾燥室」が確認できること、醸造工場(後の蒸溜工場)と通路で接続する貯蔵庫、「リタハウス」が存在する。また西奥側の沼地・中島に橋を架け中島倉庫が建設されている。特に「乾燥室」については従来、1940(昭和15)年頃の建設とされて来たが、乾燥塔の建設は創業後のごく初期の可能性も考えられる。

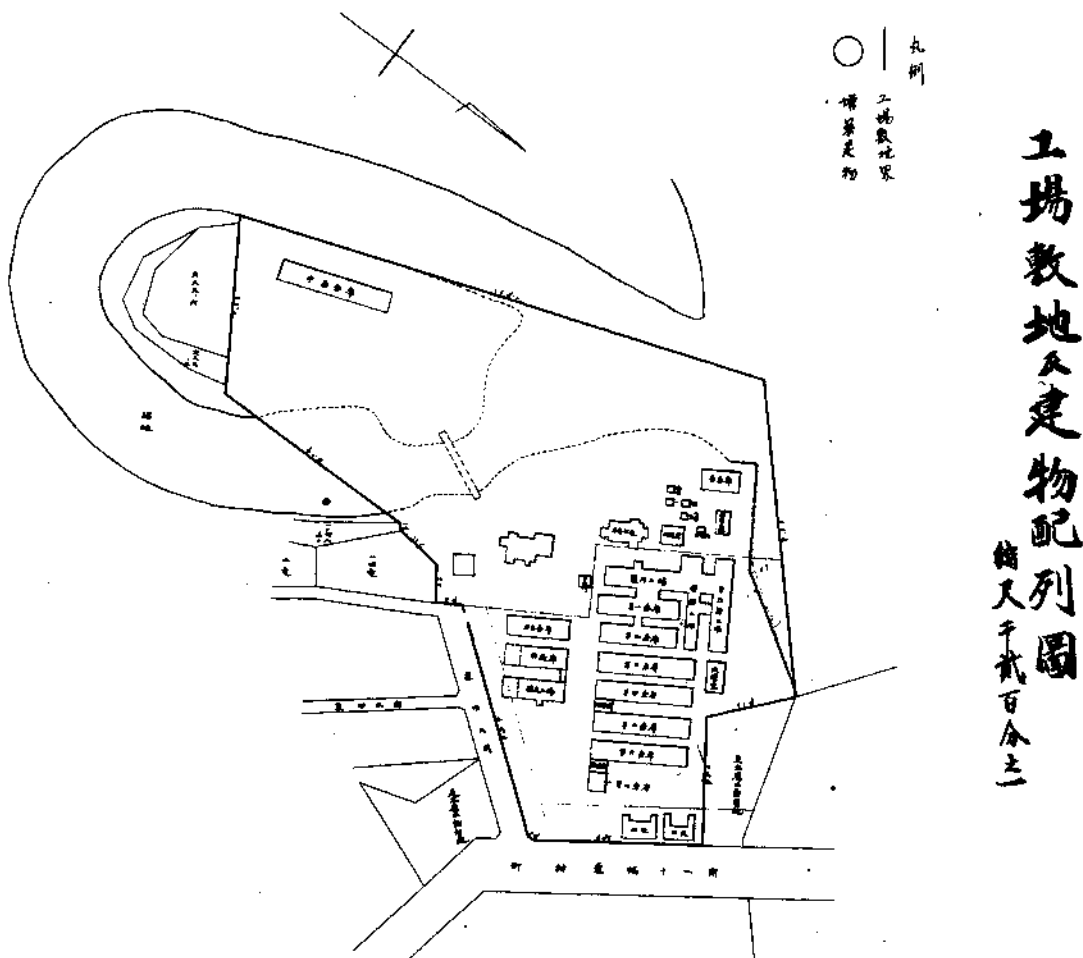


図 1-3-2 1935(昭和10)年頃の北海道工場

1-3-3 1942(昭和17)年頃の北海道工場

北海道工場所蔵資料『大日本果汁株式会社工場敷地及配列圖』No.5は1942(昭和17)年以降の工場配置図とされる。

本図の大きな特徴は、事務所棟(正門棟、北棟、南棟、2章で詳述)が完成し、事務所棟(南棟)のほぼ中央部分に既設の「醸造工場」(現蒸溜工場)が食い込む形で接続している点あげられる。また、西奥側に「修繕工場」が確認できるが、その規模は間口3.5間、奥行4.5間で、現存する機械工場(間口4.5間、奥行6間)に比べて小規模で、現存建物とは異なる施設と考えられる。

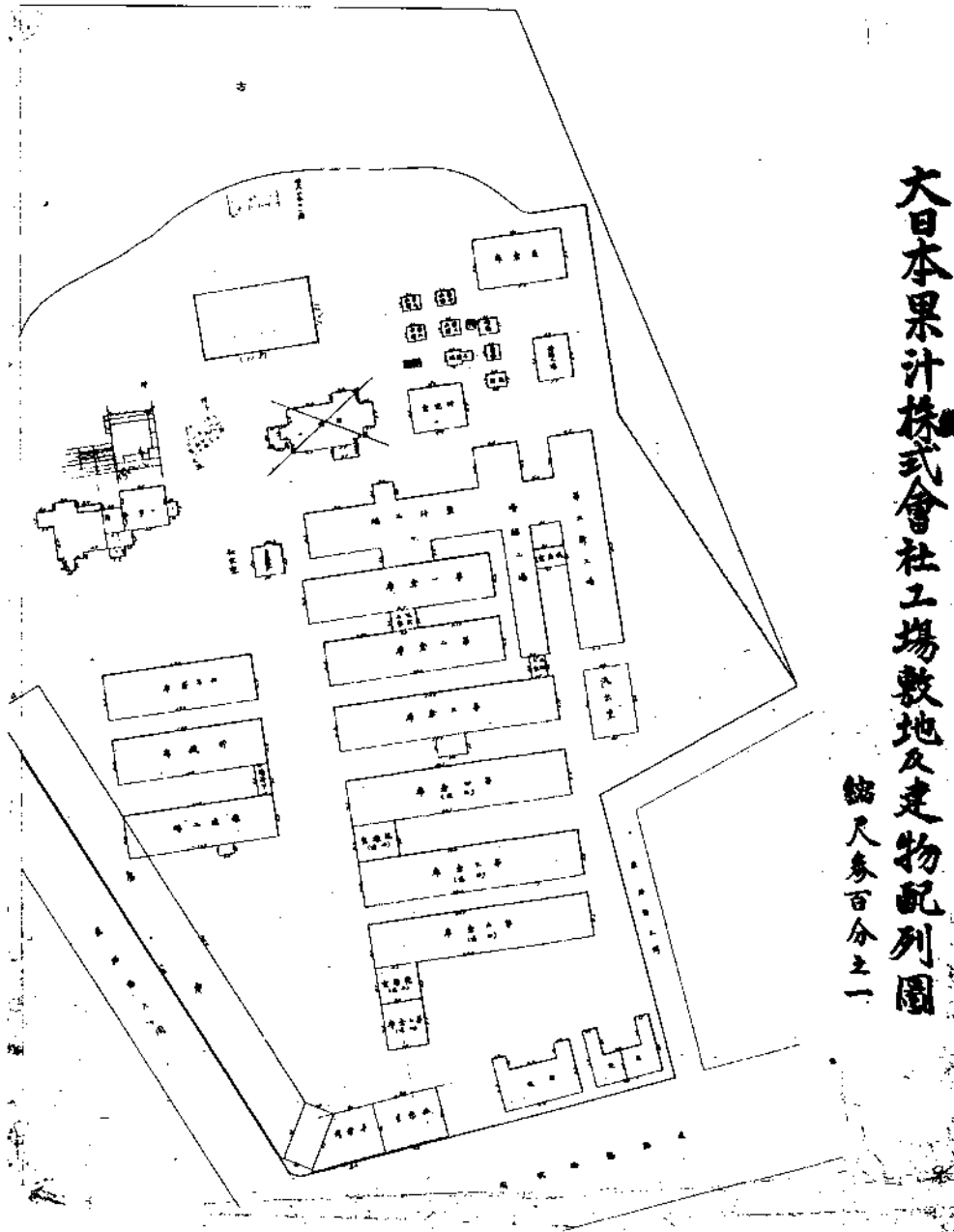


図 1-3-3 1942(昭和17)年頃の北海道工場

1-3-4 1944(昭和19)年頃の北海道工場

北海道工場所蔵資料『工場敷地及建物配列圖』No.1は、1944(昭和19)年頃の工場配置図とされる。

本図の大きな特徴として南西部奥の沼地・中島の北西側を埋め立て造成し、第一中島倉庫、第二中島倉庫を建設している点があげられる。

さらには、醸造工場と接続する貯蔵庫も事務所棟(南棟・当初はブドー工場)に増築接続している点があげられる。

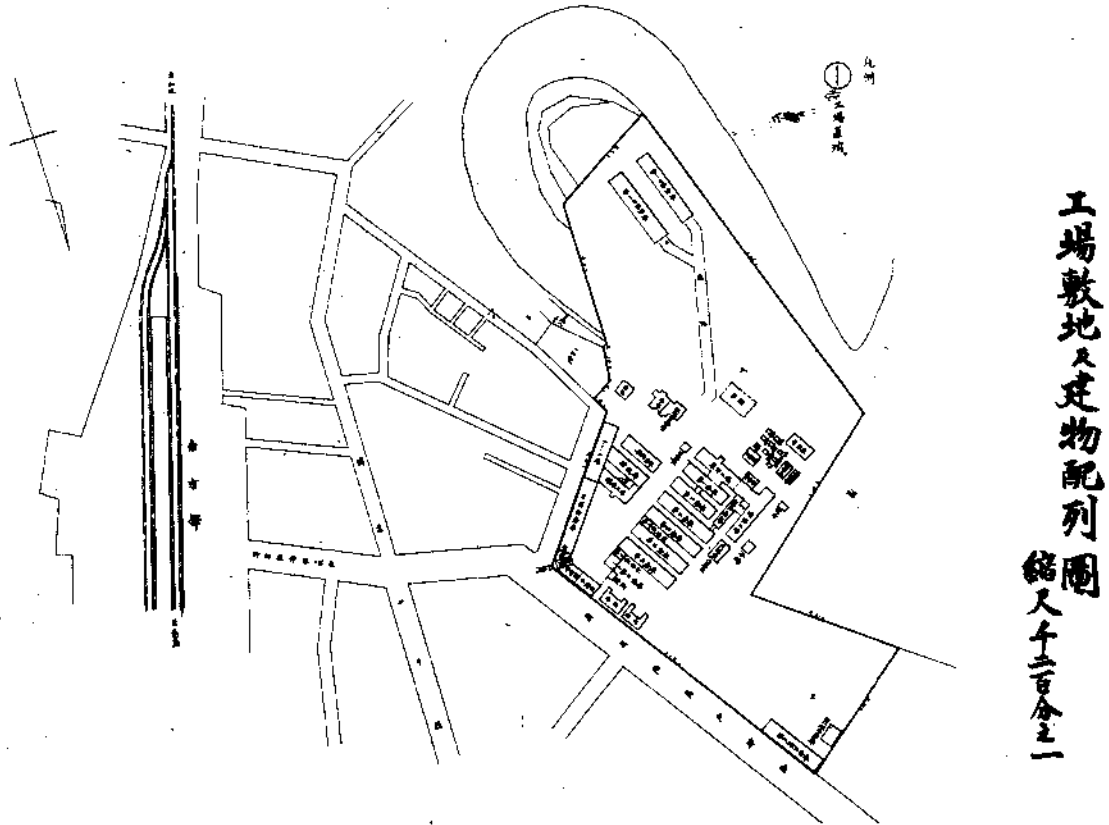


図 1-3-4 1944(昭和19)年頃の北海道工場

1-3-5 1955(昭和30)年中頃の北海道工場

北海道工場所蔵資料『工場敷地及建物配列並ニ附近見取圖』No.22 は、昭和30年代中頃の工場配置図とされる。

本図の大きな特徴として沼地・中島のさらなる埋め立て造成拡大と倉庫の建設（第六貯蔵庫まで拡大）があげられる。

さらに、「醗酵室」、「連続蒸溜工場」の設置、旧ブドー工場」から「混和室」へ、「醸造工場」から「蒸溜工場」へ、「原料倉庫」から「リキュール工場」への変更も確認でき、特に「醗酵室」、「連続蒸溜工場」の建設時期を確認できる上でも貴重である。

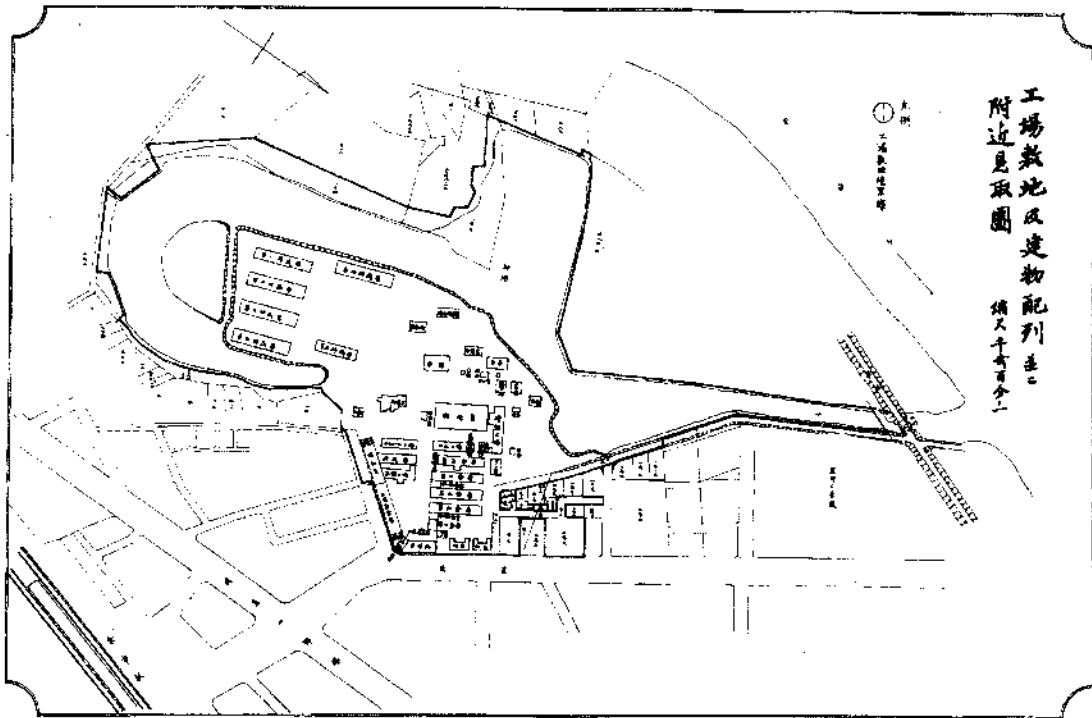


図 1-3-5 1955(昭和30)年代中頃の北海道工場

1-3-6 1970(昭和45)年の北海道工場

北海道工場所蔵資料『工場建物配図』No.98は唯一、作図年の記入がある配置図で、作図年は1970(昭和45)年11月である。

本図の特徴は、西奥の造成を拡大し、貯蔵庫もさらに拡大していることがあげられ、残された北西側の池沼に橋を架け、製樽工場などを建設していることが確認できる。

また、事務所棟南棟の施設配置も現在とほぼ同一となるなど、現在のニッカウヰスキー(株)北海道工場の工場配置の基本的構成が、昭和40年代中ごろに成立したことが伺える。

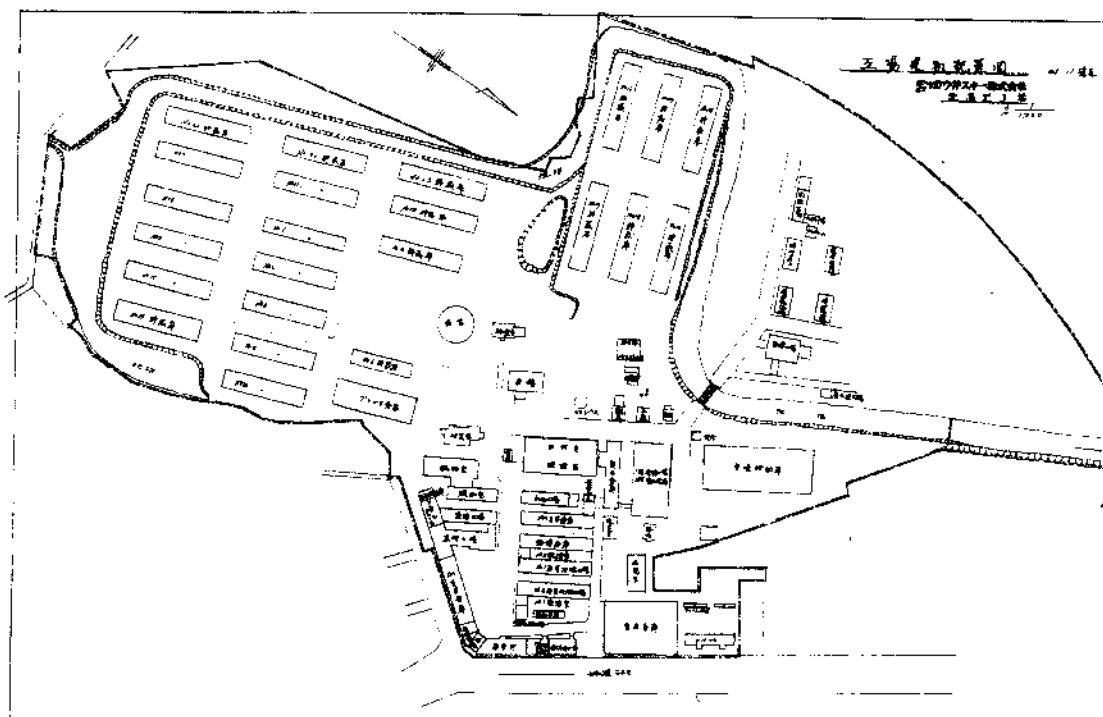
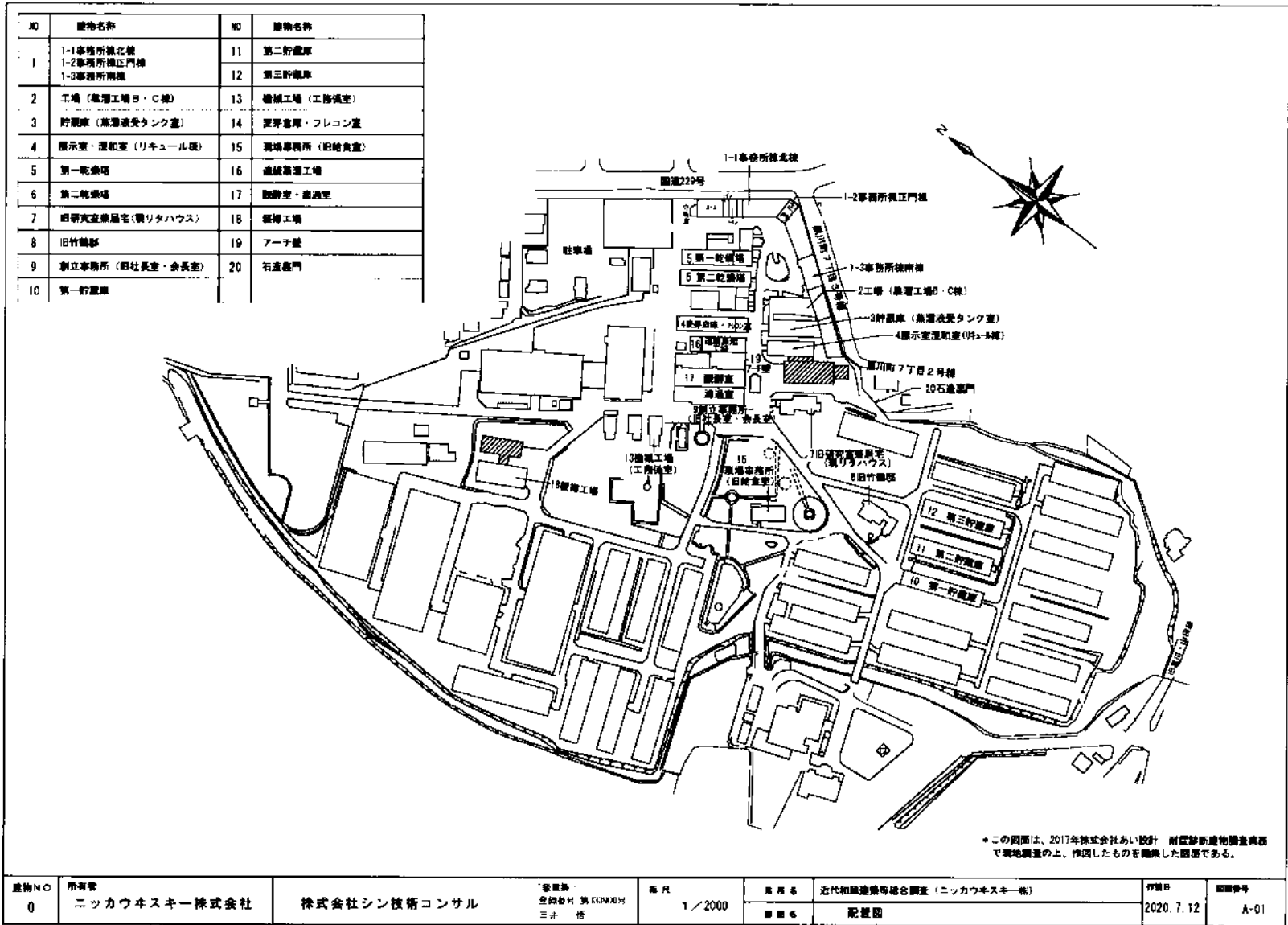


図 1-3-6 1970(昭和45)年の北海道工場

1970(昭和45)年以後の変遷過程を見ると、工場敷地内の北西側に残った池沼を埋め立て大型の所蔵庫を増設するとともに、新たに西奥側に敷地を拡張し、工場見学者用の施設を整え今日に至っている。

ニッカウヰスキー(株)北海道工場は、用地選定にあたって創業者竹鶴政孝の意図を反映して余市川近傍が選ばれ、結果として敷地内に蛇行する旧河川の名残としての池沼を広く含むこととなった。このことはウヰスキー醸造に適した条件を満足するものであると同時に、北海道工場の変遷は事業の拡大に伴う敷地の拡張とともに、池沼の埋め立てという困難な用地確保の歴史でもあったということが出来る。

1-3-7 ニッカウキスキー(株)北海道工場 配置図



第2章 ニッカウキスキー(株)北海道工場に残る歴史的建造物

2-1 事務所棟(登録有形文化財)

2-1-1 建築当初の事務所棟

事務所棟はニッカウキスキー(株)北海道工場の正面(東側)に位置し、巾6m(外形寸法)ほどの正門を中心に左(南側)右(北側)に連続する長大な組積造・木骨石造の建物で、ニッカウキスキー(株)北海道工場を象徴する建物とすることができる。

事務所棟は正門を中心に南北に広がる長大な建物で、増改築、機能・用途の変化も多岐にわたるため、本項では便宜的に正門・貴賓室棟を「正門棟」、正門右側(北側)を「北棟」、同じく左側(南側)を「南棟」と区分して記述を進める。

ニッカウキスキー(株)北海道工場所蔵資料²には、事務所棟に関連する設計図20点ほどや配置図も多数存在し、事務所棟の変遷を知ることができる有力な資料が含まれている。

当初の事務所棟全体の規模を知る資料としては、『葡萄酒工場材料倉庫、守衛室、事務所及休憩室設計圖』No.14(図2-1-1)及『倉庫増築設計圖』No.10の2点がある。この内No.14は全体の平面図及び断面詳細図を描き、No.10は平面図及び小屋組伏図を描いている。

両資料の平面図に注目すると、平面形態・規模はほぼ同一であるが、内部間仕切りの書き込みに若干の相違が認められる。No.10では北棟の全長は長辺で「15^k2」(15.2間)³の仕切りが正門端から桁行「8^k2」の位置で事務所と休憩室に仕切られているが、No.14の図面では間仕切りが2間ほど正門側へ移動している。

南棟を見ると、桁行全長は長辺で50.2間。前者の図面では正門に接する三角平面状の隅角部を守衛室とし、南側に桁行26.4間ほどの材料倉庫、さらに隔壁を介して桁行23.8間のブドー工場を配置している。一方、後者の図面では守衛室部分は正門端から桁行10.2間ほどで隔壁を設け、以南の空間を桁行40間ほどの一室としている。

両図に作図年の記入は無いが、他の資料や現状の観察調査⁴を合わせて検討すると、No.14の設計図を基本として建設されたものと考えられる。

2-1-2 事務所棟(正門棟)の変遷

現状の正門・貴賓室と北海道工場所蔵資料中の図面から正門棟の変遷過程について検討する。

階上に貴賓室を持つ正門棟は、北海道工場ばかりでなくニッカウキスキー(株)を象徴す

² ニッカウキスキー(株)北海道工場には110枚に及ぶ工場施設に関する設計図・配置図が保管されている。これらの資料を引用するにあたっては、煩雑を避けるため以下、北海道工場資料とし、末尾に別表に示す仮番号を付す。

³ 全長「15^k2」の表記は通常の尺貫法表記に従えば15間2尺の簡略表記と理解すべきだが、当該事務所棟は不整形な敷地境界に沿って建設したことを反映して、初めに敷地内側の全長を整数間で決めた(北棟12間、南棟47間)結果、敷地境界側に端数が生じたものと考えられる。従って、ブドー工場の桁行「23^k8」は24間2尺の誤記ではなく、23.8間を表現していると考えられる。

⁴ 北海道工場所蔵の稟議書「倉庫増築請負額」(1942(昭和17)年4月16日)には、「道庁指示ニ依り設計変更として防火壁設置建坪200坪毎ニ必要ナルタメ(石厚1尺2寸巾1尺長さ3尺)」とあること、北海道工場資料『倉庫増築設計圖 防火壁詳細図』No.12には防火壁の側面・断面図が描かれ正門の壁厚と同じ壁厚1尺2寸の書き込みが確認できること、No.14設計図とほぼ同位置の現状石炭庫南壁に防火壁が確認できること、などから推定する。

る建物といえる。外観的には凝灰岩を積み上げた重厚な石造建築で（2階床組・小屋組は木造）、1階の大きなアーチとヨーロッパ中世の城郭に見られるような屋上の狭間胸壁（Battlements）が強い印象を与える建物である。

正門棟の立面を描く資料として図面5点が確認できる。これらはいずれも北海道工場所蔵資料中の設計図で、『無題』No.11（図2-1-3）、『大日本果汁株式会社工場正面建物設計圖 縮尺四十分乃一 背面姿図』No.15、『倉庫増築設計圖 出来形正面図 縮尺四十分ノ一』No.17、『出来形正面図 縮尺四十分ノ一』No.31、『無題』No.33（図2-1-4）がある。これらの図面は屋上の狭間胸壁を描くもの3点、狭間胸壁を持たず、アーチの直上にペディメントを描くもの2点に大きく分けられ、後者の2点は共に西面（工場内側）の立面を描いたものと思われる。『出来形正面圖 縮尺四十分ノ一』No.31（図2-1-5）は5図中最も軒高が高く、1階アーチ上のペディメントも均整の取れた意匠で、2階は窓台・アーチ状の額縁を持った開き窓を2連配置し全体として整った意匠である。一方、『倉庫増築設計圖 出来形正面図 縮尺四十分ノ一』No.17はアーチ上のペディメント登笠石の勾配が緩く、2階も同様のペディメント・額縁付縦長の上げ下げ窓を2連配置しているが全体に均整を損なっている印象を受ける。

屋上に狭間胸壁を持った現状建物の基本となったと思われる3図の内訳は、正面（東面）を描くもの1点、西面（工場内側）を描くもの2点である。現状の正門意匠との相違点を挙げると、正面を描く図No.11ではアーチの側柱上部に迫持石が描かれず、現状の2階窓が縦長の2連窓2組であるのに対して2連窓1組である。西面を描く図No.33（図2-1-4）ではNo.11と同様にアーチに迫持石・キーストーンが描かれず、2階窓はアーチ状の窓枠内に2本の円柱状（エンタシス付）のマリオンを立て「ディオクレティアヌス窓（浴場窓）」風に描かれるが、いずれも現状の意匠とは異なっている。北海道工場所蔵資料『大日本果汁株式会社工場正面建物設計圖 縮尺四十分乃一 背面姿図』No.15ではアーチに迫持石は描かれるがキーストーンは描かれず、2階窓枠は『無題』No.33と類似するが、上部を格子状欄間風意匠とするなど、5点の資料を通して設計時に種々の検討が行われた跡が読み取れる。

現存する正門棟は壁体を凝灰岩で積み上げた石造建築（2階床組・小屋組は木造、2階床高4.8m、最高高9.45m）であるが、北海道工場所蔵資料中には木造軸組を検討したと思われる図が残され『倉庫増築設計圖中の軸建小屋組姿図』No.69（図2-1-6）、『倉庫設計圖増築設計図中の軸建小屋組断面図』No.71（図2-1-8）、北海道工場所蔵の稟議書などから当初設計は木骨石造で計画されていたことが解る⁵。特に『倉庫増築設計圖』No.71では、北棟・南棟に接する両壁面の軸組外壁の頂部にコーニスを廻した石積と思われる描写が確認できる。

現状の正門・貴賓室の外観は、正面・西面共にアーチ両側に石柱を建て、柱頭に迫持石を据え、迫石をアーチ状に積み上げ、頂点にひときわ大きな駒形のキーストーンを置く。2階窓正面側は外側に縦長の片開窓4か所、内側引違窓。西側窓は図No.33の意匠を残しつつ

⁵ 前記、註3の稟議書「倉庫増築請負額」には、道庁指示ニ依り設計変更として防火壁設置のほか、「正面玄関二階建木骨石造ヲ本石造ニ変更（石厚5寸巾1尺ガ石厚1尺2寸巾1尺2寸トナル）」とあり、さらに当初、正門部分のみを基礎杭打と設計していたものを道庁係官指示により、「地盤軟弱ナルニ付全部ニワタリ杭打施工ノコトニ決定」とあり。正門は当初、木骨石造で計画されていたことが解る。本石造への変更指示は、正門の石厚が防火壁と同じであることを考慮すると、北棟と南棟の防火区画の役割を考慮したとみなされたことが考えられる。

つ、外壁に連続する石積みのマリオンを立て、外側窓は欄間付上げ下げ窓、内側引き違い窓としていて(写真 2-1-1)、1962(昭和 37)年当時は、外側窓は上げ下げ窓であったと推定できる。

以上のように正門棟は、北海道工場所蔵資料中例外的に外観設計図・スケッチが多数残る建物で、北棟・南棟を含めて創建当初の「ニッカの顔づくり」に腐心した様子が伺えると同時に、その後の増改築、耐震改修にあたっては当初の方針を維持する指針になったものと考えられる。

2-1-3 事務所棟(北棟)の変遷

前記したように『葡萄酒工場材料倉庫、守衛室、事務所及休憩室設計図』No.14(図 2-1-1)によると当初北棟の規模は、幅 3 間(5.45m:壁芯)の正門棟の右端(北側)から桁行 15.2 間(約 27.6m)、梁間 5 間(約 9.1m)で、正門側から事務所と休憩室が近似の規模で配置される。現在の建物は桁行 53m ほどで、当初建物のほぼ倍の規模となっている。

北海道工場所蔵資料中の『事務所増築設計図』No.64(図 2-1-9)によれば、1963(昭和 38)年、一期目として当初の北棟の北端に桁行 4 間(約 7.27m)、梁間 5 間(約 9.1m)を増築する(写真 2-1-6・9)。増築建物の間取りは西側(工場敷地側)に巾 1 間(約 1.8m)の廊下を通し、外部の既設便所に渡り廊下を設けるとともに、それぞれ桁行 2 間(約 3.6m)幅の更衣室と倉庫を設ける。

増築部分の断面図及び平面図を検討すると、構造は既設建物に倣うことを基本とし、軒高 3.3m、最高高約 6m。小屋組は木造キングポストトラスとしているが、外壁は東面(国道 229 側)一面を凝灰岩積とし、西面(工場内側)、北面(妻面)はモルタル仕上げとしている。一方、現状建物の一期増築部分を見ると、資料 No.64 に描かれる外壁面・屋根に突出して描かれる防火壁は確認できず、西面(工場内側)外壁も当初建物に倣う意匠の窓台・楣付の窓・凝灰岩積壁となっている⁶。

次いで、1968(昭和 43)年には一期増築部分の北端に桁行 10 間半(約 19.2m)、梁間 5 間(約 9.1m)の二期増築を実施する(写真 2-1-7・10)。二期目の増築では、外部便所と渡廊下の撤去、一期増築部分の更衣室を男女別の 2 室に区画、倉庫を撤去、新たに出入口を設置している。さらに一期増築部分に食い込む形で男女別便所・小会議室を設け、新たにホールを増設する。増築部分の断面図及び平面図を検討すると構造は当初建物に倣うことを基本としていることが伺え、軸組・外壁は木骨石造(凝灰岩積)であるが、小屋組は大梁・東立ての和小屋としている。

以上のように事務所棟北棟は 2 回にわたる増築と内部間仕切りの変更を行っているが、基本的に当初建物の構造・外観意匠を踏襲し、創建時の形態を維持しているといえる。

2-1-4 事務所棟(南棟)の変遷

⁶ 当初妻壁と一期増築側の壁の間に防火壁を設ける設計となっているが、現状建物からは確認できない。西面外壁の仕様については、1968(昭和 43)年の二期増築にあたって、既存便所及び渡り廊下と付随する出入口の撤去が行われたことから、一期工事から二期工事までの数年間は暫定的に設計図 No.64 にある外部仕上げであった可能性がある。同様に妻壁も二期工事を想定して、仮設的に外部モルタル塗り仕上げとしていた可能性も同時に考えられる。

南棟（来館者棟・蒸溜 A 棟・アルコールタンク室・倉庫）の変遷について考察する。北海道工場所蔵資料No.14 によれば、正門左端（南側）から順に桁行 3.2 間（約 5.8m）の守衛室、同 23・2 間（約 42.2m）の材料倉庫、23.8 間（約 43.2m）のブドー工場が並び、総延長 50.2 間（約 91.2m）、梁間 5 間（約 9.1m）の規模となっている。

現在の建物は見学者棟（受付・見学者待合室・トイレ等）から蒸溜 A 棟・アルコールタンク室・倉庫までの桁行実測値は約 91.1m（50.11 間）で設計図No.14 にほぼ一致する。従って蒸溜 A 棟部分は改築（詳細は後述）されているものの、南棟は当初の平面規模のまま現存しているものと考えられる。さらに『倉庫増築圖』No.10 の南棟左端には現状の三角形平面の小規模の増築を示すと考えられる書き込みも確認できる。

1961（昭和 36）年、蒸溜器 2 基の増設に伴い、北海道工場所蔵資料No.14（図 2-1-1）で示す材料倉庫とブドー倉庫を画す防火壁以南の桁行 11 間（約 19.8m）を蒸溜棟に改築する。改築にあたっては蒸溜器の大型化に伴い、建物の主体構造を鉄骨リベット接合、外壁を鉄筋コンクリートとし、階高を当初建物のほぼ 2 倍とするが、外壁の凝灰岩積や開口部廻りは当初の木骨石造建築の意匠を踏襲している。

蒸溜 A 棟以南についてもアルコールタンク室・倉庫に改造されるが、当該部分については建築当初の木骨石造（凝灰岩積）、小屋組キングポストトラスは温存されている。

2-1-5 耐震工事に伴う事務所棟の改修

2007（平成 19）年から 2012（平成 24）年までに、事務所棟全体の大規模な耐震改修工事が行われ、当初の構造、外観意匠を維持することを前提としつつ、構造補強、内部間仕切りや内装などの変更が行われている。以下、時系列で耐震改修の概要を整理する。

耐震改修は 2007（平成 19）年、正門と正門 2 階貴賓室の改修から行われた。階上に貴賓室を持つ正門は、先述したように北海道工場ばかりでなくニッカウキスキー（株）を象徴する建物である。

耐震改修においても当初の構造や意匠を維持することを基本とし、組積造の重量に耐えられるよう地盤改良を行った上、鉄筋コンクリート基礎を新設し、1 階正門部分については当初の凝灰岩積柱型を一部撤去し鉄筋コンクリート柱を新設後、凝灰岩貼として修復している。2 階貴賓室は 1 階正門と同様に鉄筋コンクリート柱を増設し、内装を当初の仕様で復旧している。

南棟の耐震改修・内部改修は 2009（平成 21）年から 2010（平成 22）年に実施され、2009（平成 21）年には当初の守衛室の間仕切壁は南側に 3.6m（2 間）程拡張され、守衛室の他に受付宿直室、給湯室などに細分化する。さらに隣接する当初の材料倉庫部分のほぼ半分を休憩室、見学者待合室などに改装し、同時に耐震改修を行っている。

次いで 2010（平成 22）年には材料倉庫の残余部分を見学者用のトイレ、更衣室及び石炭庫（南に隣接する蒸溜棟で使用する燃料貯蔵庫）に改造し、同時に耐震改修を行っている。

耐震改修の内容は、外壁四周の室内側に耐震補強を目的とする炭素繊維シート張り、当初基礎の内側及び梁間方向の要所に基礎（地中梁）を新設し、外周に鉄骨柱を建て、当初の木造キングポストトラスの陸梁下端に鉄骨梁を架け、鉄骨梁上面と当初の陸梁間の隙間にスペーサを挿入し既存の小屋組を補強している。見学者待合室は小屋組現しとして当初の小屋組み構造と鉄骨補強を見ることが出来る。床はコンクリートスラブを新設し、ピニ

ルシート張に改装する。

北棟の耐震改修・内部改修は2011(平成23)年から2012(平成24)年に実施され、基本的に南棟と同様な仕様で、外壁内側の炭素繊維シート張補強、基礎(地中梁)、鉄骨柱・梁による耐震補強を行っている。北棟の耐震改修にあたっては正門棟および南棟と同様に、当初構造・意匠を極力温存した上で耐震補強構造物を付加する手法で工事が行われ、当初の遺構が良好に保存されている。

2-1-6 事務所棟の現在

先述してきたように、事務所棟は正門を挟んで北棟が桁行15.2間、梁間5間。南棟が50.2間、梁間5間の規模で1942(昭和17)年頃竣工した⁷。この内、南棟は現蒸溜A棟部分を1961(昭和36)年に当初の2倍ほどの階高に改築しているが、平面規模はほぼ当初のままである。一方北棟は2階の増築を経てほぼ当初の倍の規模になり、現在の事務所棟は正門を中心に北・南棟がほぼ同規模の均整が取れた形態になっている。

北海道工場所蔵資料、『倉庫増築設計圖』No.69中の「軸建小屋組姿図」(図2-1-6)の北端・南端に注目すると両端共に寄棟屋根として描かれる。一方、現状の南端を検討すると倉庫部分の妻側屋根は当初寄棟屋根を倉庫部分の一部増築に伴い屋根形状を改変したことが確認できる。

南端の寄棟屋根や北海道工場所蔵資料を検討すると、当初の屋根は南北両端共に寄棟屋根であったことが推定できる(写真2-1-2)。南棟・北棟の平屋部分屋根はカラー鉄板葺、5寸勾配。軒高は3.3mほどである。

棟上の越屋根に注目すると、北海道工場所蔵資料No.69・71(図2-1-2)では本屋の棟筋に越屋根の棟位置を合わせた切妻屋根とし、北棟11間、南棟13間に越屋根(切妻屋根で、棟高は本屋棟頂部から約2.4m)を載せる設計となっているが、現状は(図2-1-9)南北棟共に長さ10間、棟高2.4mほどの越屋根を載せ、南棟については以降、棟高の低い越屋根(5寸勾配)を連続して載せる。現状の棟高の越屋根は図No.69・71とは異なり、越屋根の棟筋を内側(西側)に2尺ほど寄せて西側に窓を開き、東側は本屋に急こう配の屋根(矩勾配)を葺き下ろしている。また、図No.70では軒高の低い越屋根が描かれ、現状南棟の越屋根の形式にほぼ一致する。

以上のように事務所棟の現状越屋根の建築経緯・変遷については不明確な点が多いが、南棟の軒高の低い越屋根については資料No.70と一致する点が多く写真資料(写真2-1-1・3・4)からも創建当初に設けられたものと考えられる(排煙窓への改造は近年)。一方、正門の両翼から延びる棟高の越屋根については小屋組材料や金具の観察からは比較的近年の改修と考えられる。

次に、外壁を中心とする外部意匠に注目する。正門棟については、先述したように当初

⁷ 前記、稟議書「倉庫増築請負額」(1942(昭和17)年4月16日)によれば、事務所棟全体の着工が1942(昭和17)年4月以降であること、稟議書「玄関新倉庫内事務所及貴賓室工事変更見積書」(1943(昭和18)年10月18日)によれば、当該稟議書の起案時点で建物はすでに竣工していたことが解る。解釈は分かれるところでもあるが、稟議書中の「工事変更」「設計変更」の内容は、主に内装、什器類の変更に限られることから、建物全体の竣工は1942(昭和17)年中と考えられる。

設計にあたっては綿密な検討が行われたことが伺えるが、1955(昭和30)年に屋上陸屋根にカラー鉄板による緩勾配屋根を設置し、暖炉の煙突を撤去している以外、他に創建後の大きな改造痕跡は確認できず、耐震改修を経ているものの当初の姿を良好に維持しているものと考えられる。

北棟については2度の増築に伴う内部間仕切・機能変化に伴う外観の変更、正門2階貴賓室へのエントランス廻り以外は先述したように内部間仕切、内装は増築、耐震改修時にほぼ全面的に変更していることが確認できる。繰り返しになるが創建時北端の寄棟屋根は増築の結果現状は切妻屋根(北端妻面に守衛室・通用口を設けることによる雪処理も一因かもしれない)。西面外観については、凝灰岩積の事務室出入口、女子便所前廊下出入口、ホール北端の出入口が新設。増築時、特に一期増築工事部分の窓配置の破調が指摘できる。

南棟は耐震改修時に内部間仕切・用途・内装共に変更されている部分が多い。外観西面については主に用途の変更に合わせて見学者待合室2か所、手洗いエリア1か所に出入口を設けているのが、当初からの変更点である。蒸溜棟A棟の改築部分は大規模ではあるが意匠的には後述する蒸溜棟B・C棟と統一が図られ、違和感は抑えられている。東面についても、蒸溜棟の改築は行われているものの当初の凝灰岩積や窓の鉄扉も温存され、良好に保存されている。

延床面積は1,418.87㎡。内訳は、北棟：471.02㎡、正門棟：70.05㎡、見学者棟：427.90㎡、蒸溜167.98㎡、工場：(アルコールタンク室及エッセン室)：202.04㎡である。

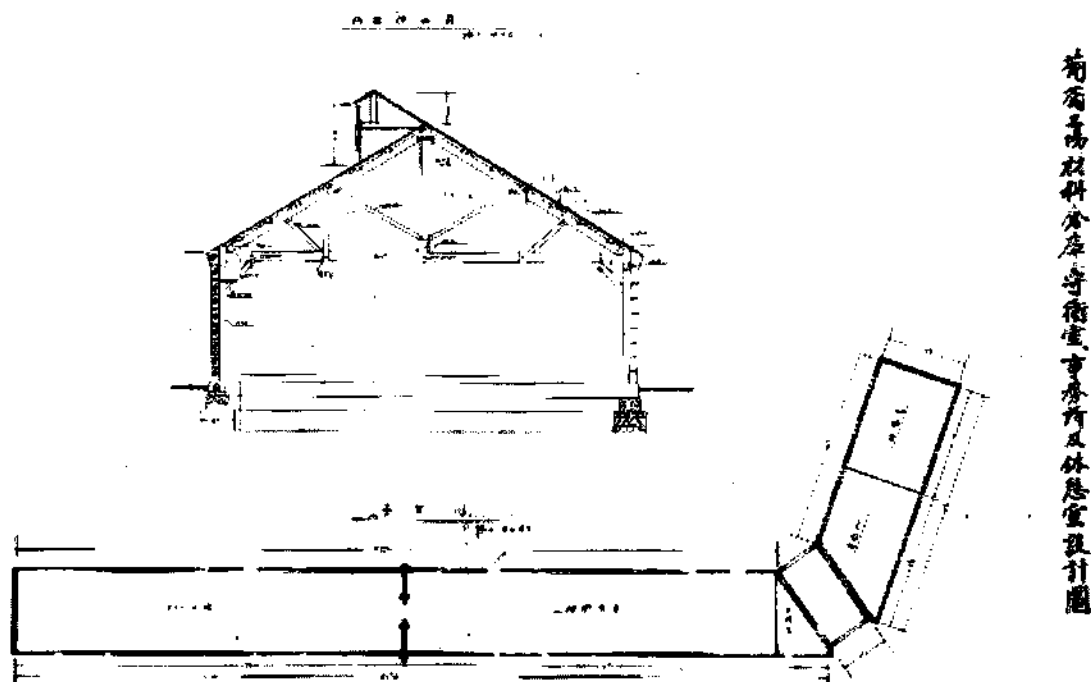


図 2-1-1 『葡萄工場材料倉庫守衛室事務所及休憩室設計圖』 No.14

倉庫增築設計圖

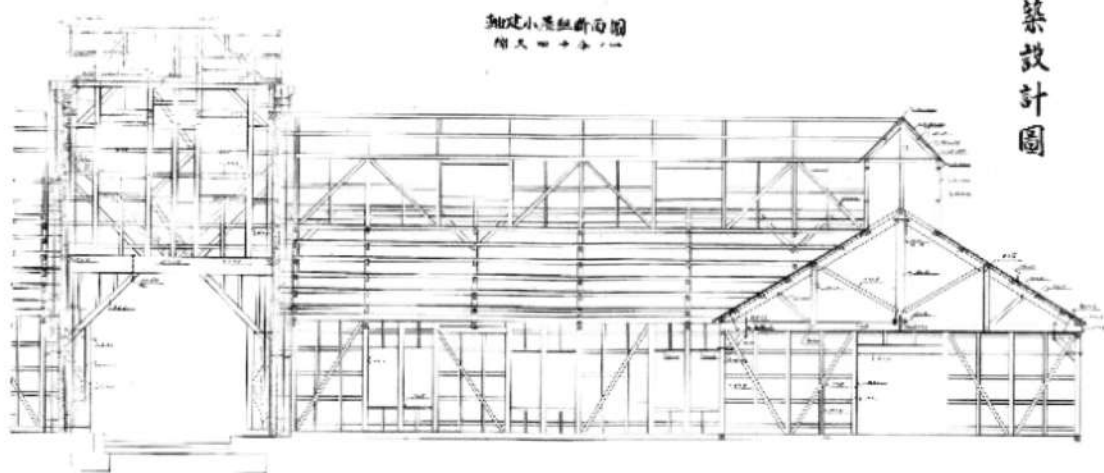


圖 2-1-2 『倉庫增築設計圖』 No.71 正門木骨石造

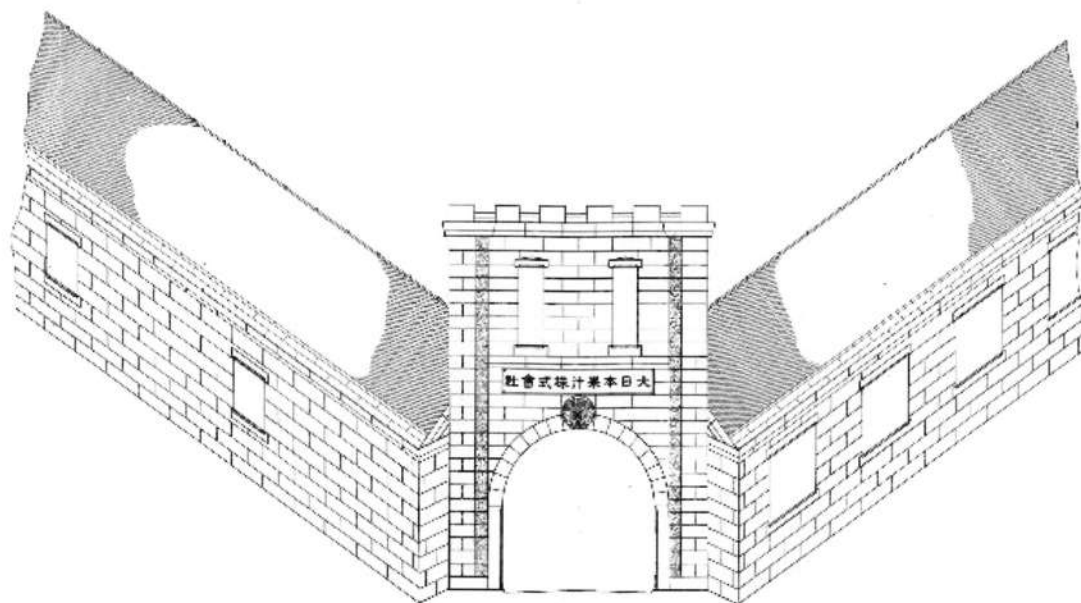


圖 2-1-3 『無題』 No.11

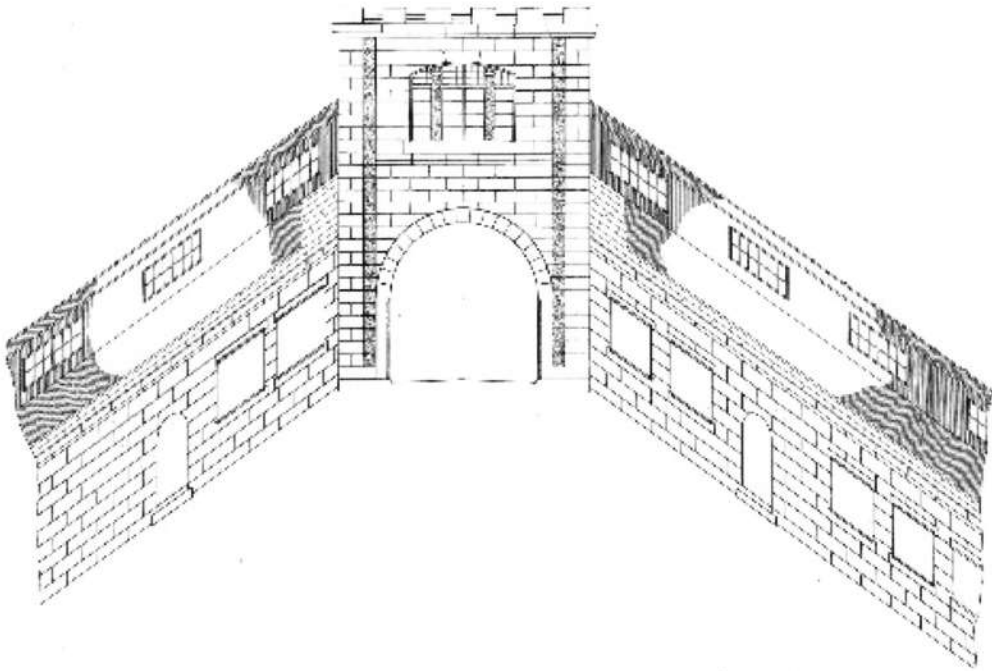


図 2-1-4 『無題』 No.33 北・南棟の越屋根は低い 2 階上下窓

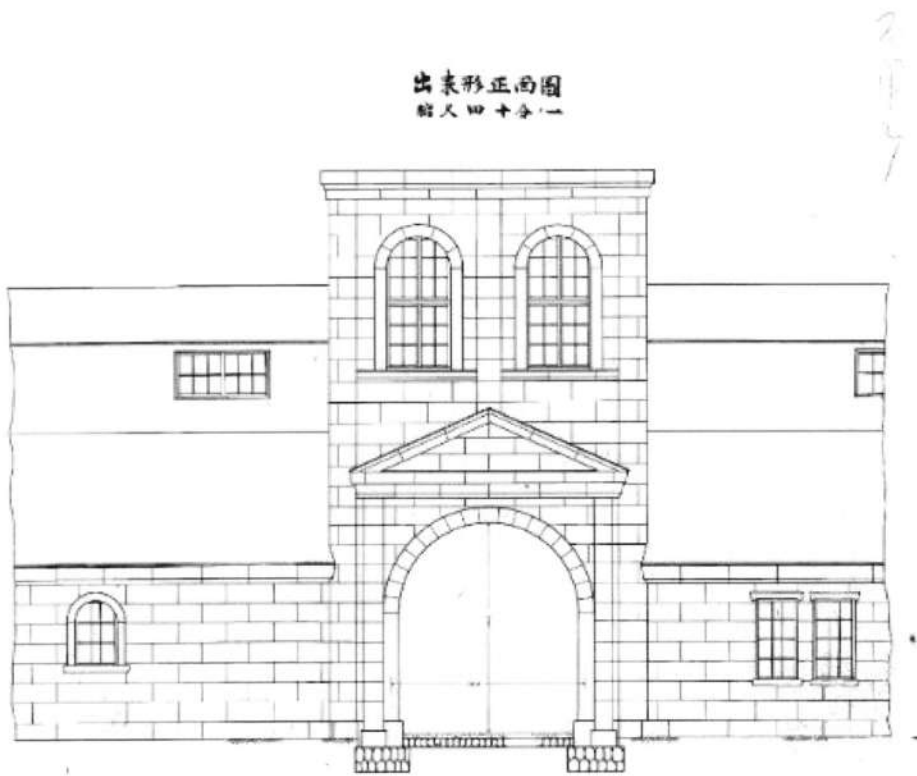


図 2-1-5 『出来形正面圖』 検討案の 1

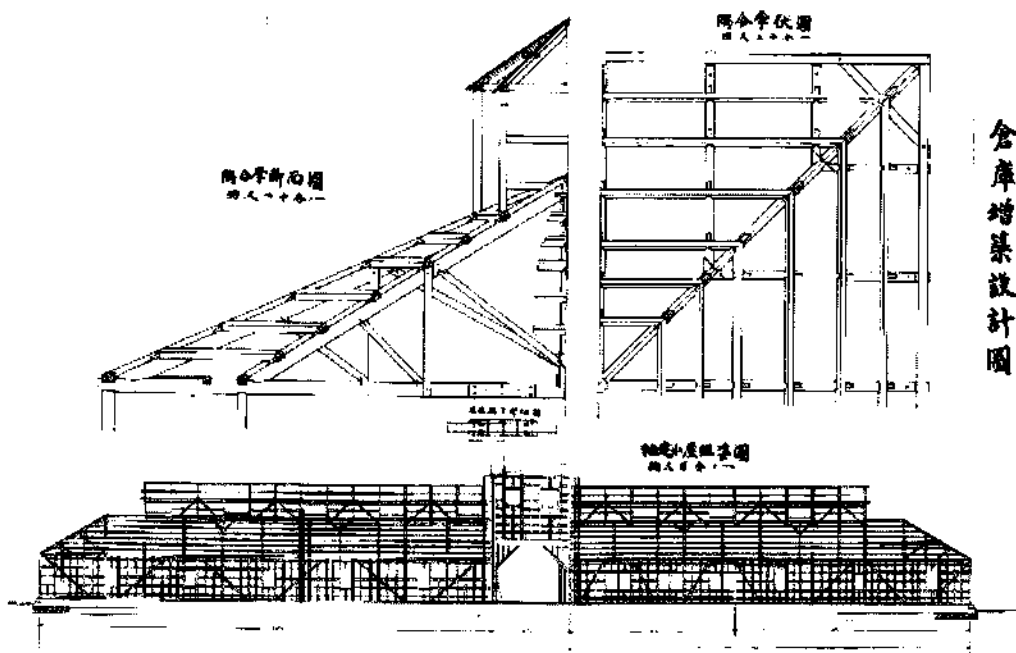


圖 2-1-6 『倉庫增築設計圖』 No.69 寄棟屋根案

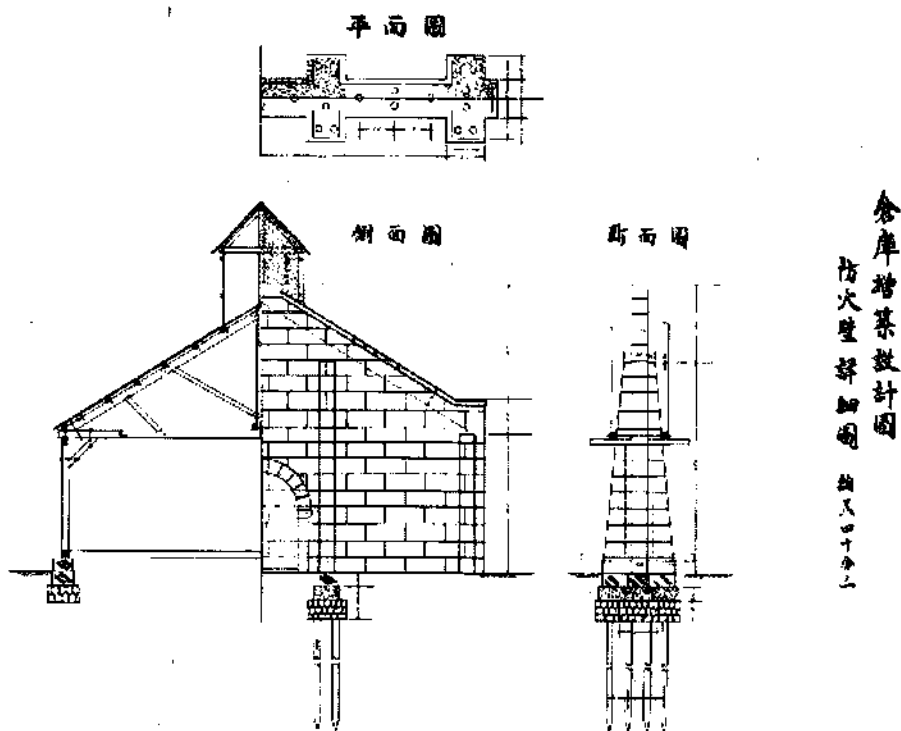


圖 2-1-7 『倉庫增築設計圖 防火壁詳細圖』 No.12

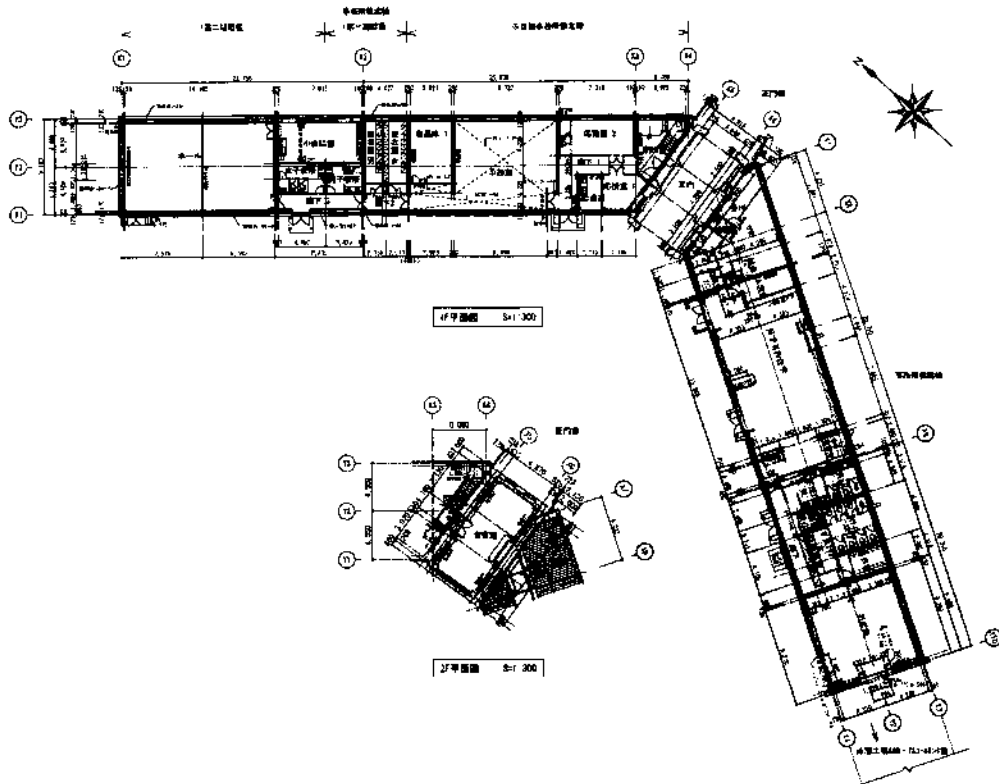


図 2-1-8 事務所棟 平面図 (株式会社シン技術コンサル提供)

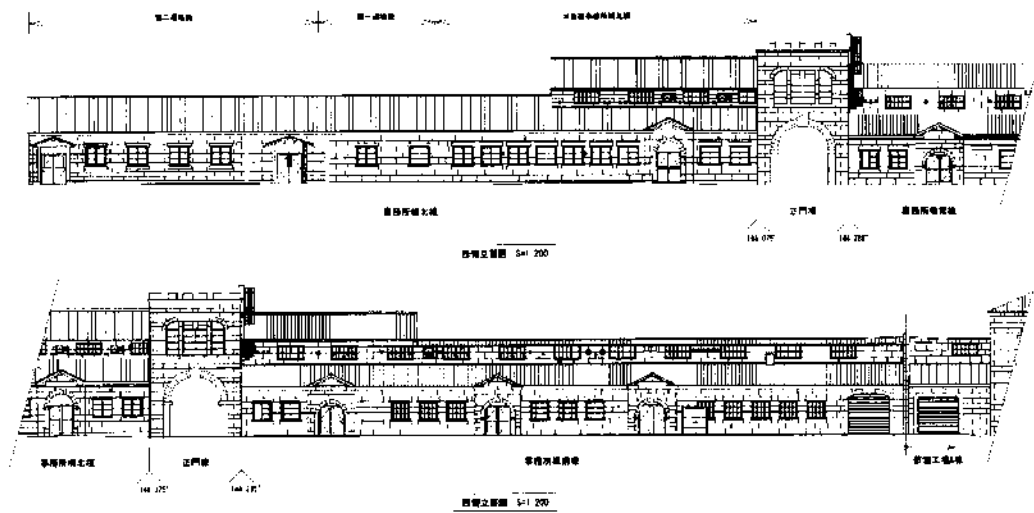


図 2-1-9 事務所棟 立面図 西面 (株式会社シン技術コンサル提供)

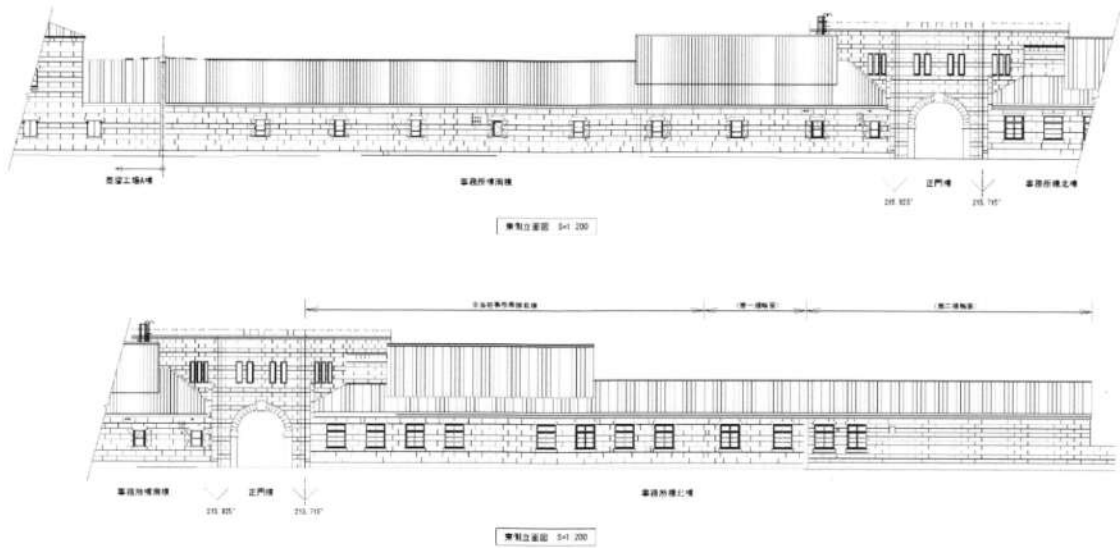


図 2-1-10 事務所棟 立面図 東面 (株式会社シン技術コンサル提供)

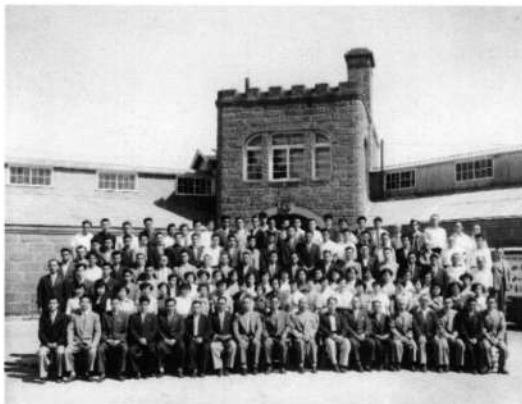


写真 2-1-1 1954(昭和 29)年創立 20 年記念



写真 2-1-2 1955(昭和 30)年代前半の北海道工場全景
事務所棟南北端の寄棟屋根 同越屋根形状がわかる



写真 2-1-3 1955(昭和 30)年代
越屋根波板鉄板 4 貴賓室開窓



写真 2-1-4 1962(昭和 37)年
越屋根モルタル塗 貴賓室上下窓



写真 2-1-5 正面外観写真*



写真 2-1-6 北棟西面一期増築接続面
目地・石寸法の乱れあり*



写真 2-1-7 北棟西面二期増築接続面(右の柱型が増築面)*



写真 2-1-8 北棟北端壁*



写真 2-1-9 北棟一期増築接続面(東面)*



写真 2-1-10 北棟二期増築接続面柱型(東面)*

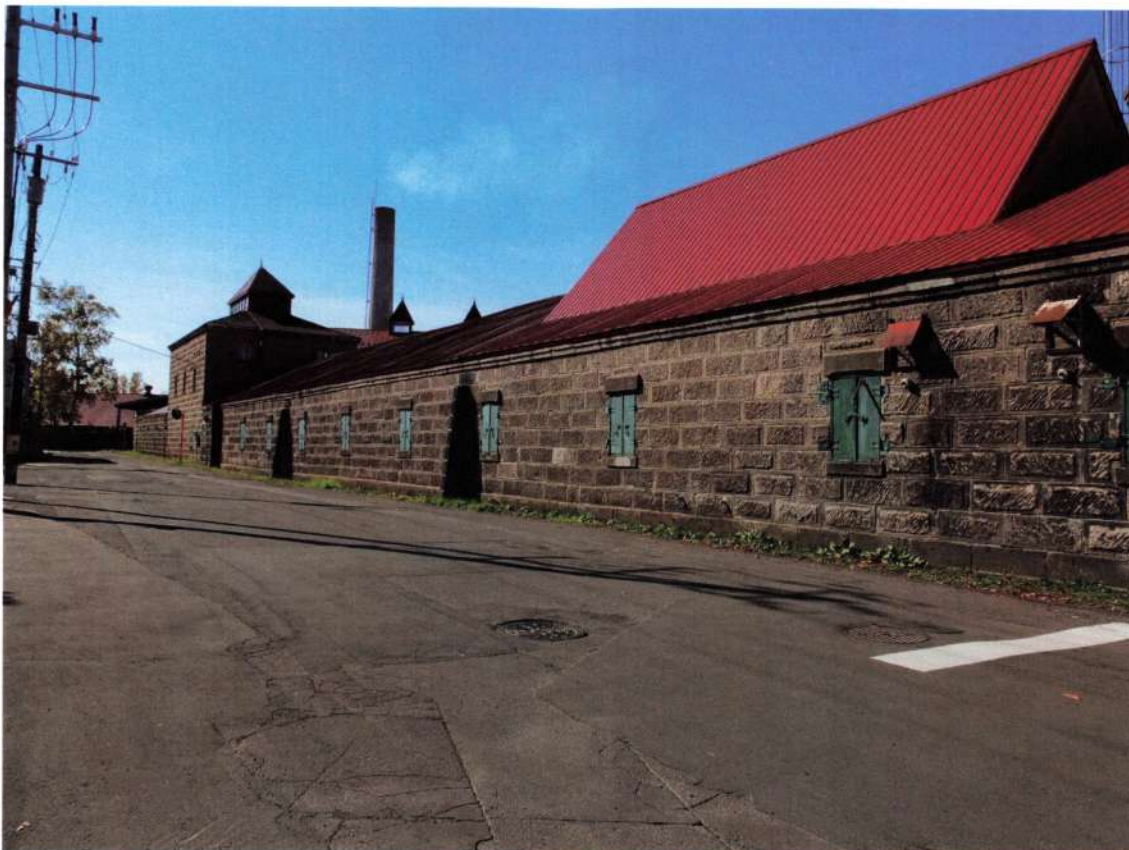


写真 2-1-11 南棟東面の全景 手前から見学者待合室・トイレ廻り・石炭庫・蒸溜 A 棟・アルコールタンク室*



写真 2-1-12 石炭庫と蒸溜 A 棟接続部分*



写真 2-1-13 正門棟屋上(当初は陸屋根当初右中に暖炉煙突)*



写真 2-1-14 南棟越屋根壁面 モルタル石積様目地仕上*



写真 2-1-15 北棟 西面



写真 2-1-16 南棟 西面



写真 2-1-17 貴賓室 階段室



写真 2-1-18 北棟 事務室



写真 2-1-19 南棟 見学者棟



写真 2-1-20 蒸溜 A 棟



写真 2-1-21 アルコールタンク室



写真 2-1-22 貴賓室



写真 2-1-23 貴賓室

2-2 工場（蒸溜工場B・C棟）（登録有形文化財）

ニッカウヰスキー(株)北海道工場の歴史を象徴する蒸溜器（ポットスチル）を設置する蒸溜工場施設で、当初の建物は平屋の木骨石造構造で1935(昭和10)年頃に建築された。

北海道工場所蔵資料に『蒸餾工場及貯蔵庫設計圖』No.32(図2-2-1)と題する設計図が残る。この図によると当初の蒸溜棟は間口（梁間）4間半(図面表記：4^k5^o、約8.18m)、奥行（桁行・短辺）13.2間(約24m)、木骨石造（凝灰岩積）、小屋組キングポストトラスの建物で、東面やや右寄りに間口19尺、奥行9尺の出入口を付け、西面の長さ3間(約5.45m)の通路で隣接する貯蔵庫（現蒸溜液受タンク室）と接続していたことがわかる⁸。

北海道工場所蔵資料『工場建物平面圖 縮尺参百分之一』No.4は、昭和30年代初めの工場配置図と考えられ、昭和30年代初めに使用していた各建物ごとの構造、階数、規模、高さ、内外装の概要が記されている。図中、蒸溜工場は石造二階建、建坪七三坪五七五、高サ三、〇米、二階四坪五(15㎡弱)と表記されるが、隣接し当初の構造を残すアルコールタンク室等と同程度の軒高であることや写真資料(写真1-2-1)から先述した出入部分4.5坪ほどだけが2階建で、工場自体は事務所棟南棟と同様の平屋であったと考えられる。

現在の蒸溜工場B・C棟はC棟が1964(昭和39)年、B棟が1966(昭和41)年に改築された建物で、両棟共に軸組・小屋組は鉄骨造リベット接合、外壁は鉄筋コンクリート凝灰岩張としている（蒸溜液受タンク室側の外壁は鉄筋コンクリートモルタル仕上げ）。

改築は、現在の蒸溜工場C棟・B棟に先立って事務所棟南棟の南端部に設けられていた旧ブドー工場・混和室の一部を1961(昭和36)年に改築し（2-1事務所棟で詳述）蒸溜器2基を設置した後に、蒸溜器の大型化に伴い当初建築の蒸溜工場の2倍を超える階高（軒高8.2m）で改築された。

C棟は1964(昭和39)年の改築、寄棟屋根の頂部に明り取り屋根を設け、外壁は当初建物の外観を踏襲して凝灰岩張とし、アーチを持った戸口と窓台・楣を持った窓を設けている。

B棟は1966(昭和41)年の改築、蒸溜A棟とC棟をつなぐ形で切妻屋根を架け、屋根の頂部に明り取り屋根を設けている。外壁・窓はC棟と統一した凝灰岩張で窓台・楣を持った窓を設けている。

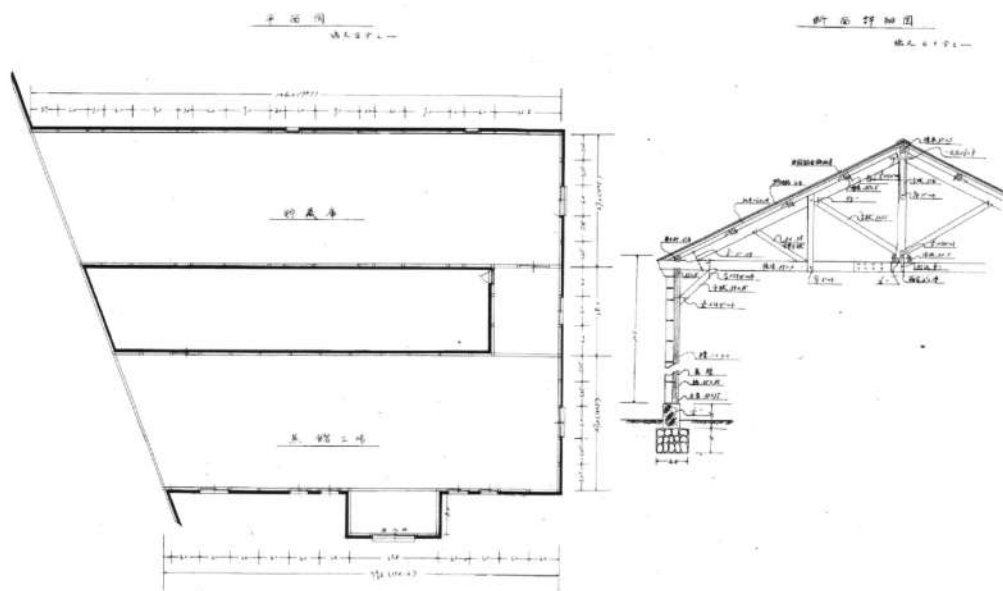
内部には5基の蒸溜器が設置され（他に蒸溜A棟に2基設置）この内最奥部には創設当初のものとされる小型の蒸溜器が残る。

蒸溜工場はニッカウヰスキー(株)北海道工場におけるウヰスキーづくりの中核施設であり、当初の外観意匠を尊重し見学者棟や蒸溜液受タンク室との統一性を保ち、対面する乾燥塔などを含めて工場敷地内の統一的な景観を形成している建物である。

屋根は切妻屋根、カラー鉄板葺、延床面積は、269.12㎡である。

⁸ 事務所棟と同様に梁間4間半を4k5、桁行13間1尺2寸を79.2尺(13k2)と表記している。

⁹ 1935(昭和10)年頃制作と推定できる、北海道工場所蔵資料『工場敷地及建物配列圖』No.3には、後に建設される事務所棟南棟との隣接部分に南棟との接続を想定したと思われる破線の書き込みがある。



蒸溜工場及貯蔵庫設計圖

図 2-2-1 『蒸溜工場及貯蔵庫設計圖』 No.32

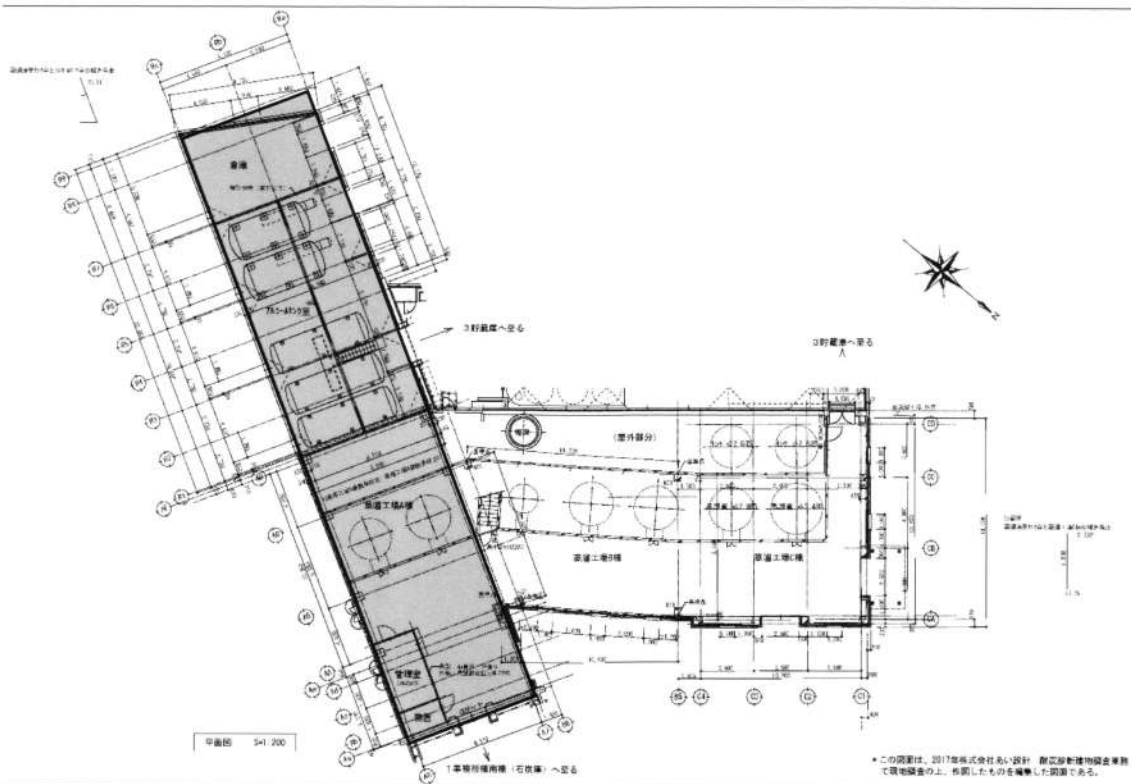
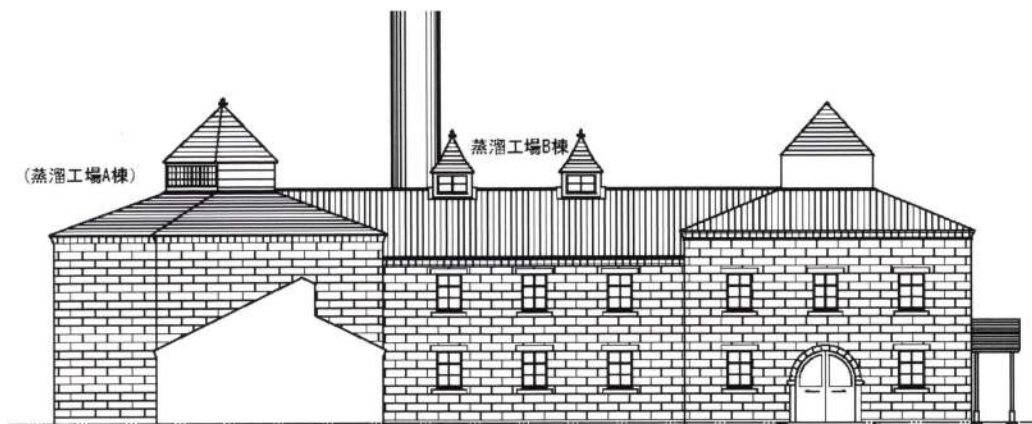


図 2-2-2 蒸溜工場 B棟 C棟平面図

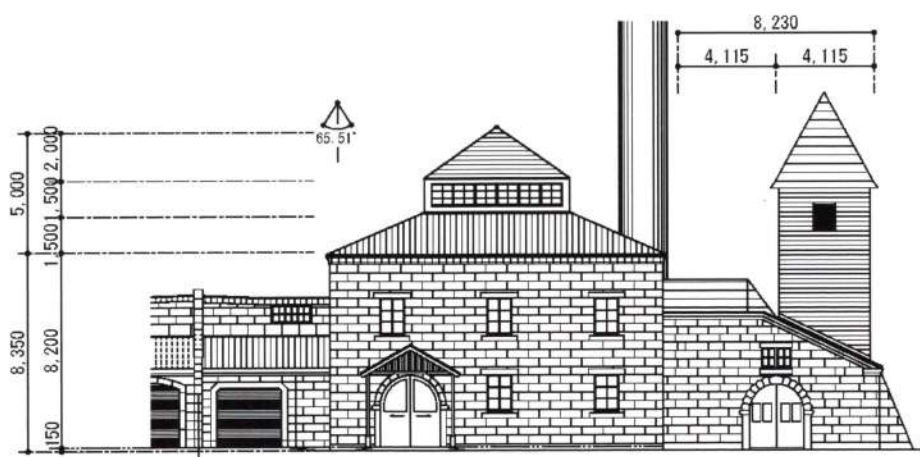
(灰色部分は、事務所棟・南棟の蒸溜 A 棟・アルコールタンク室・倉庫)
 (株式会社シン技術コンサル提供)



東側立面図

事務所棟南棟 (石炭庫)

蒸溜工場C棟



蒸溜工場C棟高寸法

蒸溜工場C棟

蒸溜液受貯室

北側立面図

図 2-2-3 蒸溜工場 B 棟 C 棟立面図 (株式会社シン技術コンサル提供)



写真 2-2-1 正面右手奥蒸溜工場
出入り部分 2 階建



写真 2-2-2 創業当時の蒸溜器
蒸溜工場北隅から撮影?



写真 2-2-3 蒸溜工場内部



写真 2-2-4 蒸溜工場内部



写真 2-2-5 蒸溜器を点検中の竹鶴政孝



写真 2-2-6 蒸溜工場北面 右は貯蔵庫



写真 2-2-7 蒸溜工場北西隅 左手事務所南棟



写真 2-2-8 蒸溜工場内部



写真 2-2-9 蒸溜工場内部



写真 2-2-10 蒸溜工場内部

2-3 貯蔵庫（蒸溜液受タンク室）（登録有形文化財）

当初の貯蔵庫は1935（昭和10）年頃の創建。北海道工場所蔵資料『蒸溜工場及貯蔵庫設計圖』No.32（図2-3-2）によると、貯蔵庫は蒸溜工場（B・C棟）において述べたように、当初は長さ3間（5.45m）ほどの通路で東側に隣接する蒸溜工場と接続していた。

前記資料によれば、当初の規模は間口（梁間）4^k5（4.5間約8.18m）¹⁰、奥行（桁行）17^k7（17間4尺2寸、約32m）ほどの木骨石造（凝灰岩積）、軒高約3m、最高高約5.5m、小屋組キングポストトラスの建物で、現存建物の平面規模にほぼ一致し、軸組・小屋組構造も当初設計図に一致する。

1966（昭和41）年、建物内部に面積24㎡、軒高8.2mほどの塔屋を設置し、蒸溜棟からの配管を覆う屋根や換気塔なども設置している。同時に木造軸組・小屋組の補強、床のコンクリート土間への改修も行われているが当初の構造や形態を良好に残している。

奥山儀八郎版画「創立事務所から正門を望む 北海道余市ニッカ工場 昭和18年7月」（図2-3-1）によれば、当初建物の北面は、対面する麦芽倉庫・仕込工場の南面外壁と同様に2棟の壁面が連続して一体となった凝灰岩積の意匠だったことがわかり、正門から続く通路周辺景観の統一を強く意識していたことがうかがえる。屋根は切妻屋根（5寸勾配）、寄棟屋根、カラー鉄板葺。延床面積は、250.01㎡である。

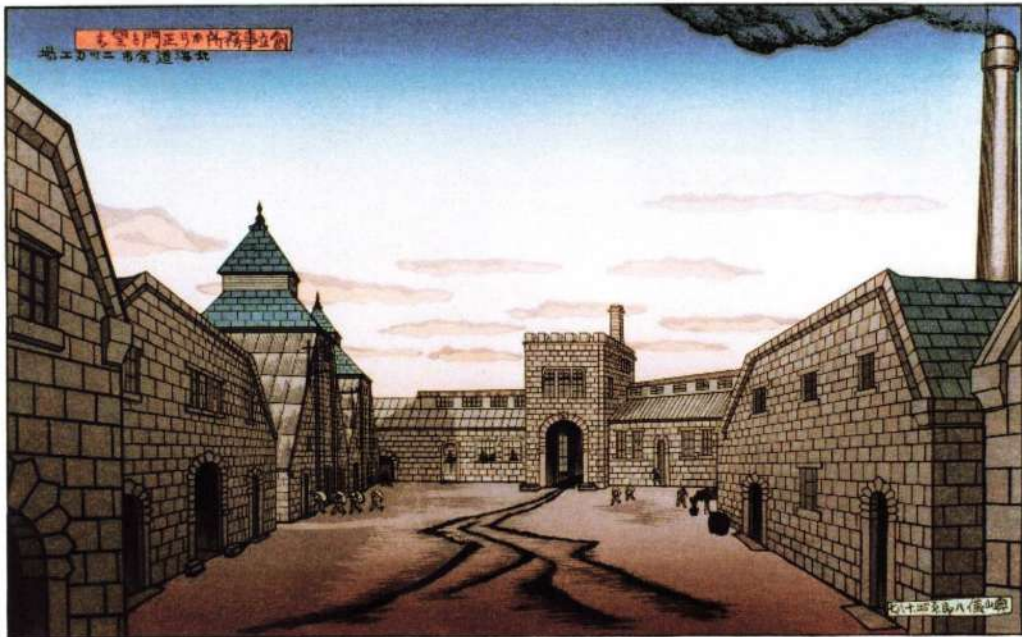


図2-3-1 奥山儀八郎版画「創立事務所から正門を望む 北海道余市ニッカ工場 昭和18年7月」

¹⁰ 事務所南棟、蒸溜工場と同様な事情による異例な寸法表記

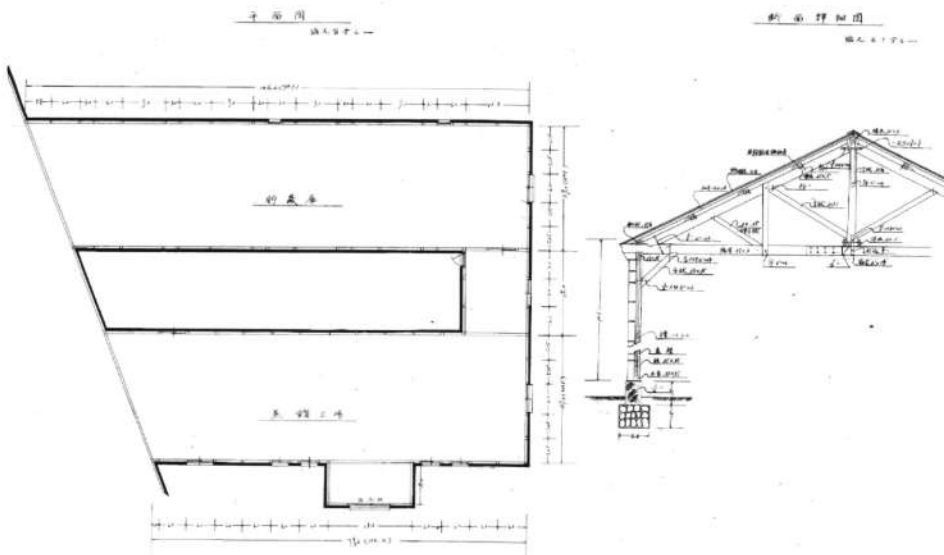


図 2-3-2 『蒸餾工場及貯蔵庫設計圖』 No.32

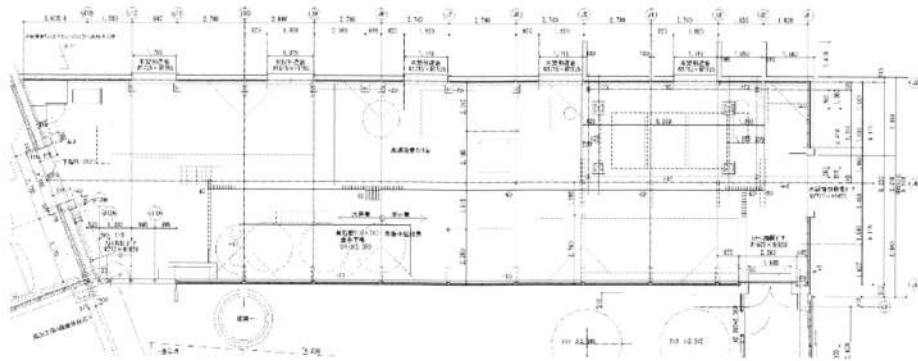


図 2-3-3 貯蔵庫(蒸溜受タンク室)平面図 (株式会社シン技術コンサル提供)

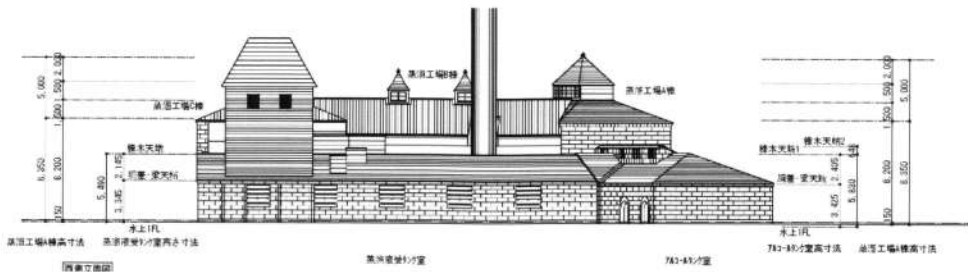


図 2-3-4 貯蔵庫(蒸溜受タンク室)立面図 (株式会社シン技術コンサル提供)

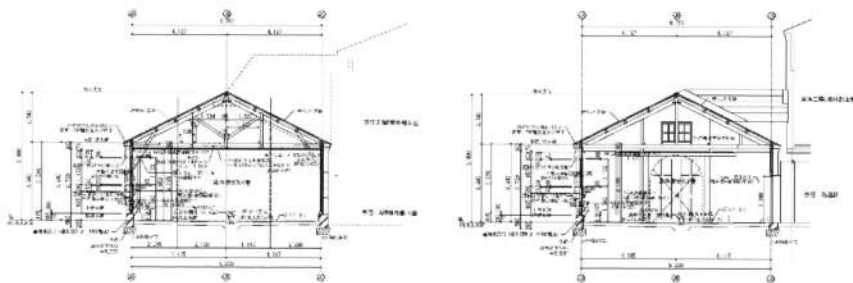


図 2-3-5 貯蔵庫(蒸溜受タンク室)断面図 (株式会社シン技術コンサル提供)



写真 2-3-1 北面外観 左蒸溜工場



写真 2-3-2 西面外観



写真 2-3-3 貯蔵庫 内部



写真 2-3-4 貯蔵庫 内部

2-4 展示室・混和室（リキュール棟）（登録有形文化財）

間口（梁間）4間半(8.25m)、奥行（桁行）15間(27.2m)ほどの規模で、当初はリキュール棟として1939(昭和14)年頃建設された。木骨石造（凝灰岩積）、小屋組キングポストトラスで、軒高3.2m、最高高5.4m。切妻屋根(5寸勾配)の棟筋に明り取りの越屋根を設けている。内部は北側のほぼ半分を見学者用の展示室に改造しているが、南側は混和室の機能を維持している。

軒蛇腹（コーニス）は他の木骨石造建築と同様に妻壁に折り曲げて止める「コーニス・リターン」を用い、北海道工場内の木骨石造建築に共通する意匠である。

妻面の開口は、南面については改造されているが、北面には当初のアーチが残り、開口部は胸高まで石柱を両側に建て、上部に幅広の迫受石（springer）を置き、その上に駒形の迫石をアーチ状に積み上げる形式で、頂点部分に幅広の要石（キーストーン）を置いていることが他の事例とは異なる特徴としてあげられる。

1967(昭和42)年、当初建物の西側に鉄骨造の混和工場を増築しているが、当初建物については内部の改造は行われているものの、構造・外観は創建時の姿を良好に残している。屋根は切妻屋根、カラー鉄板葺、延床面積は、225.36㎡である。

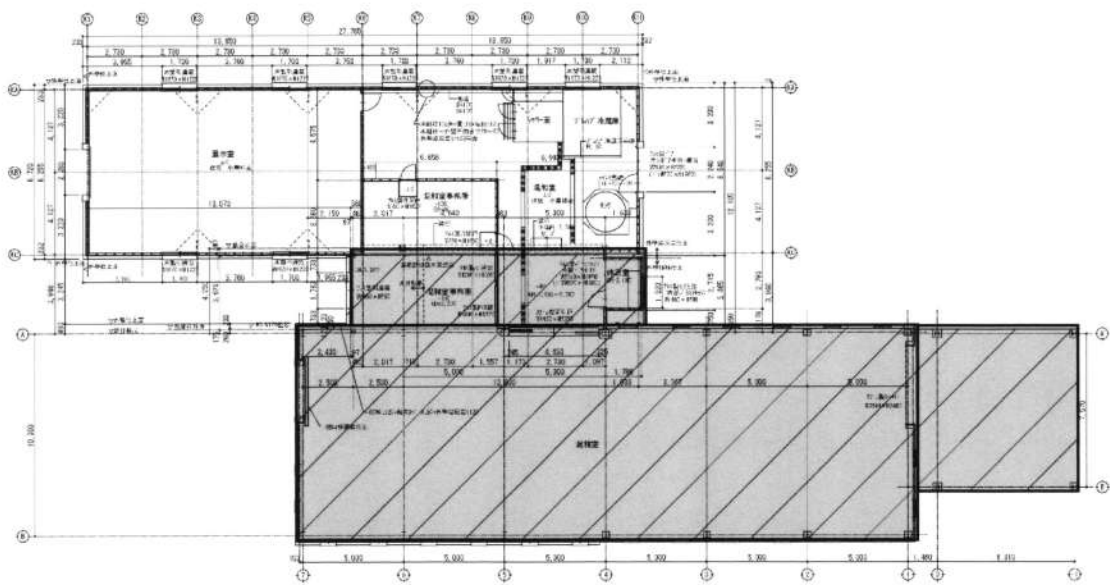


図 2-4-1 展示室・混和室(リキュール棟) 平面図 (株式会社シン技術コンサル提供) (網掛けは対象外)

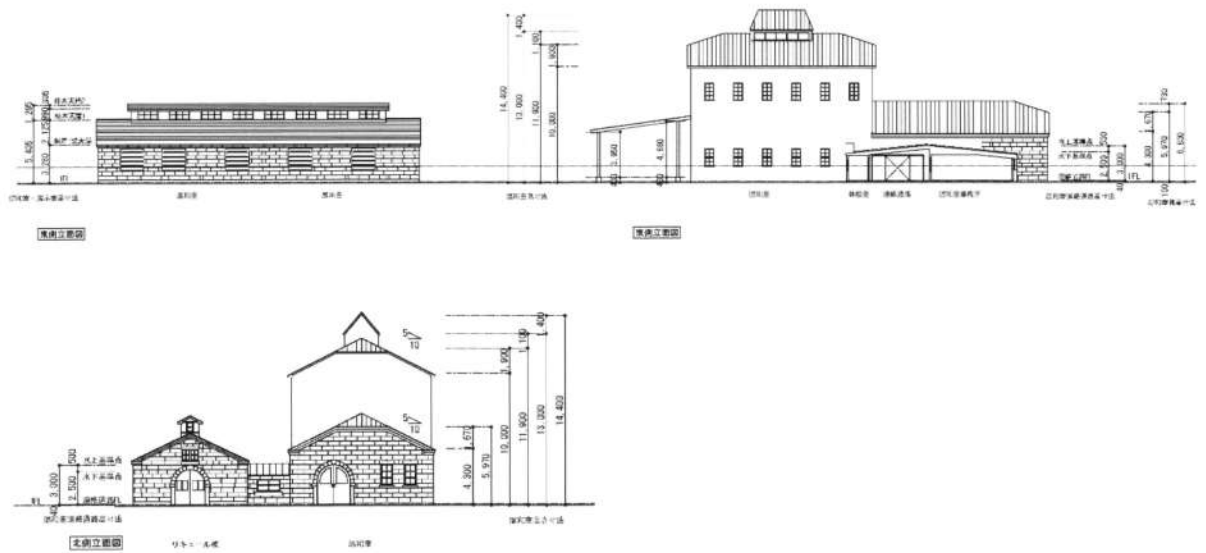


図 2-4-2 展示室・混和室(リキュール棟) 立面図 (株式会社シン技術コンサル提供)

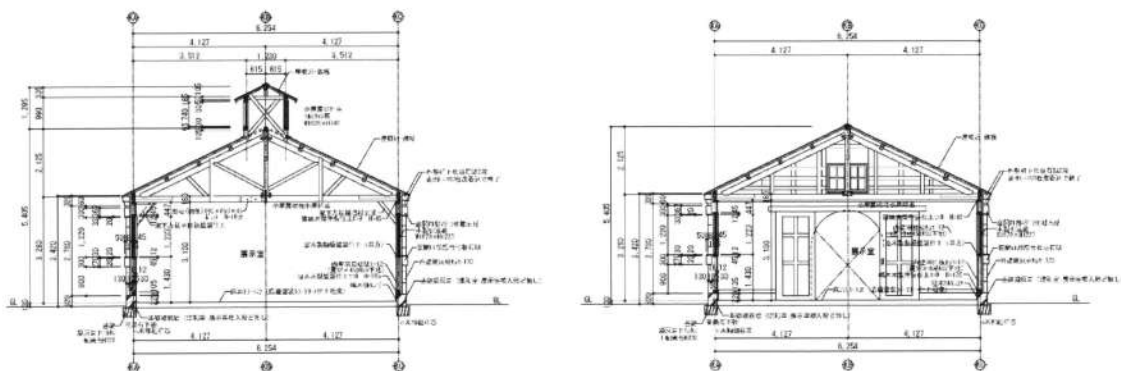


図 2-4-3 展示室・混和室(リキュール棟) 断面図 (株式会社シン技術コンサル提供)



写真 2-4-1 展示室・混和室 北面



写真 2-4-2 展示室・混和室 西面



写真 2-4-3 展示室・混和室 南面

2-5 第一乾燥塔（登録有形文化財）

正門に近い通称第一乾燥塔は、控え柱をみせる乾燥塔を中心に、左右に30度勾配で大屋根を葺き下ろしており、乾燥室の大屋根中央に立ち上がる換気塔がシンボルともなっている。

石造の一体の建物のように見えるが、実際には、間口3間、奥行4間の中央石造建物（旧第二乾燥塔、39.67㎡）と向かって右側（東側）間口4.5間、奥行4間の木骨石造平家の書庫（旧製粉工場、59.50㎡）と左側（西側）間口4.5間、奥行22間の木骨石造の第2製品倉庫（旧第六倉庫、327.27㎡）がL形に接続した3棟の建物で構成されている（図2-5-1～3）。

竣工は1940（昭和15）年頃で、1941（昭和16）年3月1日に旧固定資産台帳に記載がある。設計は、工営部技師の土岐喬（1939（昭和14）～1958（昭和33）年在職）、施工は工営部と考えられるが、詳細は不明である。また、奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー大麦乾燥工場右と蒸溜工場左 北海道余市町 昭和18年7月」の版画が残されている。

設計旧図として、『倉庫増築及乾燥室新築設計圖』No.18や『乾燥室設計圖』No.19が北海道工場に遺されており、乾燥塔や倉庫の断面や構造を知ることができる（図2-5-6～7）。『乾燥室設計圖』の「断面詳細図」によれば、乾燥室上部のキングポストトラスの小屋材寸法は、合掌3.5×5（単位は寸、以下略）、陸梁3.5×6、真束6×6、方杖3×3.5、母屋3×5、猫木（転び止）1.6×1.8、垂木1.6×1.6、火打梁3.5×5、野地板6×0.4、上部換気塔の部材寸法は、垂木1.6×1.6、桁3.5×3.5、淀1×3.5、鼻隠1×4、野地板厚4分とある（写真2-5-11～12）。

中央棟中央に要石を見せるアーチ開口とし、左右の棟の開口は要石を強調しないアーチ開口としているが、アーチを支える迫り元柱に緑色凝灰岩（笏谷石か）を採用している。壁材に使用されている石材は、やや黄色味を帯びた凝灰岩であるが、北面には種々の色味の石材が使用されている（写真2-5-4）。

中央棟は、両端に幅2尺（実測値：680mm）、奥行1尺（実測値：290mm）ほどの控柱を立ち上げ、左右両棟との分節をはかっている（図2-5-3、写真2-5-1）。第二乾燥塔と同じく、固定資産編入日は1941（昭和16）年3月1日であるので、竣工は1940（昭和15）年頃と考えられる。

旧第六倉庫は、前面奥行4間分のうち南側2間分を階段室、北側2間分を書庫2（59.50㎡）に、また書庫2の北側を奥行18間の第2製品倉庫（267.77㎡）に改変されている。階段室の鉄骨階段は、乾燥塔2階の乾燥室に通じている。階段室上部の平面寸法で3400×1720mmの煙突（換気塔）は1969（昭和44）前には増設されている¹¹（写真2-5-3～5、写真2-5-15～16）。

現書庫は、製粉工場、第1麦芽倉庫などの改称を経て現在に至り、木骨石造平家で小屋組はトラス構造。床は土間コンクリートである（写真2-5-2、写真2-5-6～8）。

第一乾燥塔は、第二乾燥室、第1麦芽乾燥室と改称を経て現名称となっており、当初設計図では3間四方であるが、実施段階で3×4間に変更となったものと考えられる。乾燥塔の内部は、大きなかまどのような構造で、ピート（泥炭）で大麦をいぶしながら乾燥させ、大麦麦芽（モルト）が作られる。1階は乾燥釜が設置され、2階は麦芽乾燥室として使用さ

¹¹ ニッカウキスキー（株）北海道工場OB寺沢三郎氏（1948（昭和23）年入社）による

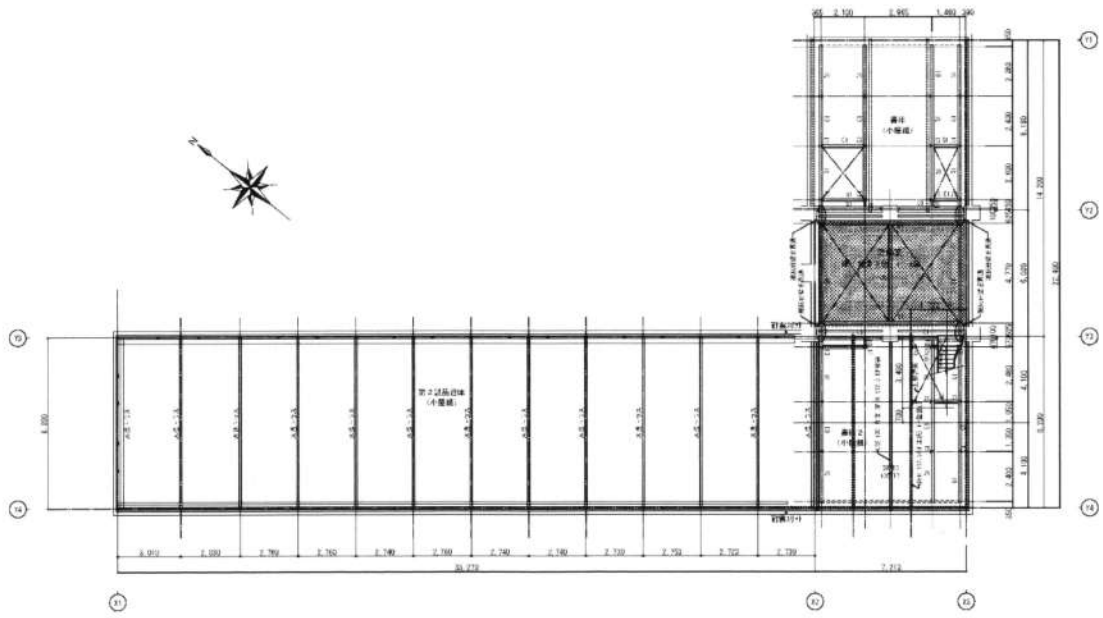


図 2-5-3 第一乾燥塔 2 階平面図-(株式会社シン技術コンサル提供)

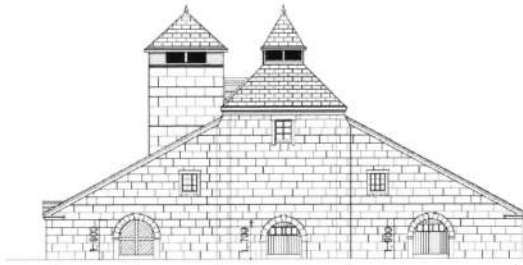


図 2-5-4 第一乾燥塔 南側正面図

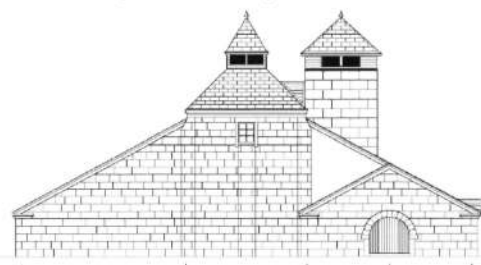


図 2-5-5 第一乾燥塔 北側正面図
(いずれも株式会社シン技術コンサル提供)

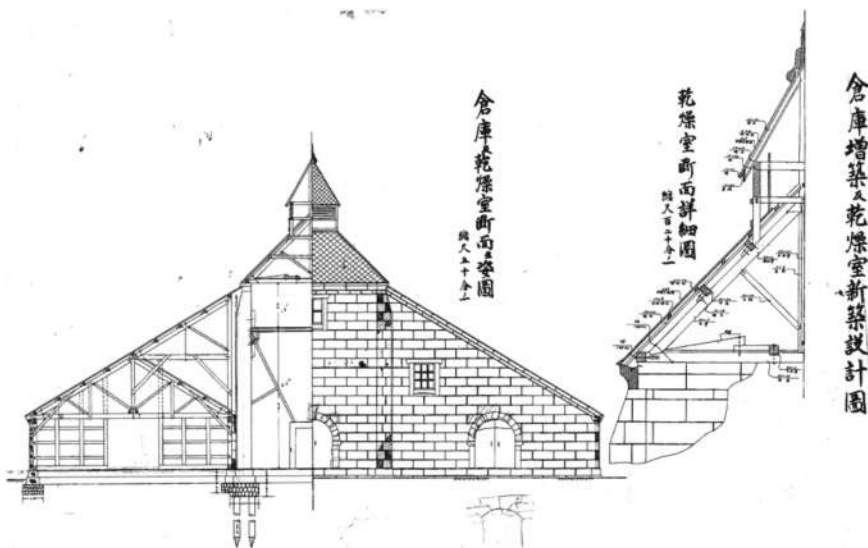


図 2-5-6 第一乾燥塔 (『倉庫増築及乾燥室新築設計圖』No.18)

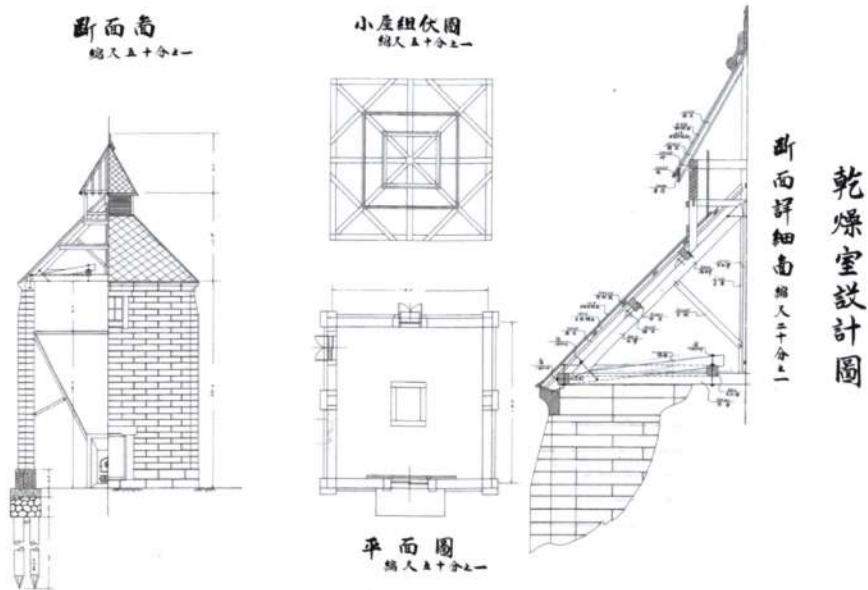


图 2-5-7 第一干燥塔 (『干燥室設計圖』No.19)



写真 2-5-1 第一干燥塔 南侧正面



写真 2-5-2 第一干燥塔 东南外觀(書庫)



写真 2-5-3 第一干燥塔 西侧外觀(第2製品倉庫)



写真 2-5-4 第一干燥塔 北侧外觀(手前第2製品倉庫)



写真 2-5-5 第2製品倉庫 北西側外観



写真 2-5-6 書庫 内観(西面を望む)



写真 2-5-7 書庫 内観(木造トラスと耐震鉄骨フレーム)



写真 2-5-8 書庫 内観(北東面を望む)



写真 2-5-9 第一乾燥塔 1階



写真 2-5-10 第一乾燥塔 2階乾燥室



写真 2-5-11 第一乾燥塔 上部換気塔



写真 2-5-12 第一乾燥塔 換気塔小屋組



写真 2-5-13 第一乾燥塔 階段室



写真 2-5-14 第一乾燥塔 階段室上部

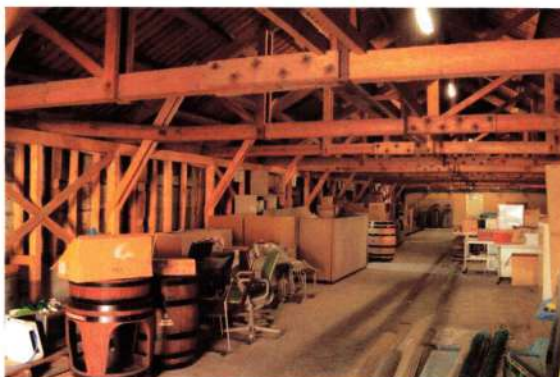


写真 2-5-15 第2製品倉庫内観(北面を望む)

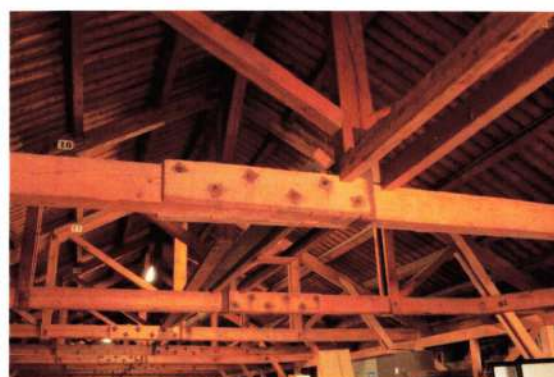


写真 2-5-16 第2製品倉庫 木造トラス

2-6 第二乾燥塔（登録有形文化財）

第二乾燥塔も第一乾燥塔と同様に、3棟の建物から構成され、第1乾燥塔側から、第3製品倉庫、第2乾燥室、資材倉庫が逆L字形に並んでいる（図2-6-2）。換気塔を掲げる中央棟の左右に約30度勾配で屋根を葺き下ろし、正面右は第3製品倉庫、左は資材倉庫である（図2-6-3）。

竣工は1940（昭和15）年頃で、1941（昭和16）年3月1日に旧固定資産台帳に記載がある。設計は、工営部技師の土岐喬（1939（昭和14）～1958（33）年在職）、施工は工営部と考えられるが、詳細は不明である。また、奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー大麦乾燥工場右と蒸溜工場左 北海道余市町 昭和18年7月」の作品（図2-6-1）が残されている。

中央棟中央に要石を見せるアーチ開口とし、左右の棟の開口は要石を強調しないアーチ開口とするが、アーチを支える迫り元柱に緑色凝灰岩（笏谷石か）を採用している。壁体で使用されている石材は第一乾燥塔と同じく、やや黄色味を帯びた凝灰岩である。中央棟は、両端に幅2尺、奥行1尺ほどの控柱を立ち上げ、左右両棟との分節をはかっている（写真2-6-2）。

第2乾燥室は、前述の第1乾燥室と同様の仕様で建設されており、乾燥室上部はキングポストラス、その上部に換気塔を立ち上げる（図2-6-6、写真2-6-8～9）。

第一乾燥塔の項でも述べたように、『乾燥室設計図』の「断面詳細図」（図2-5-6～7参照）によれば、乾燥室上部のキングポストラスの小屋材寸法は、合掌3.5×5（単位は寸、以下略）、陸梁3.5×6、真束6×6、方杖3×3.5、母屋3×5、猫木（転び止）1.6×1.8、垂木1.6×1.6、火打梁3.5×5、野地板6×0.4、上部換気塔の部材寸法は、垂木1.6×1.6、桁3.5×3.5、淀1×3.5、鼻隠1×4、野地板厚4分とある。

第二乾燥塔（旧第一乾燥室）は、当初は間口4.5間、奥行22間の2棟の木骨石造平家建倉庫（旧第四、第五倉庫）に挟まれるように立ち上がっていた（写真2-6-1）。現在は、旧第一乾燥室は第2麦芽乾燥室を経て、第2乾燥室（3×4間、12坪、39.67㎡）（写真2-6-6～9）、旧第五倉庫は、第一原麦処理工場の改称を経て、第3製品倉庫（4.5×22間、99坪、327.27㎡）と改称されている。

また旧第四倉庫は洋樽倉庫を経て、現在は前面4間のみを遺して資材倉庫（59.50㎡）に変更されている（写真2-6-4、写真2-6-10～12）。改修時期は明らかでないが、1975（昭和50）年にボイラー室が新築される際には、旧第四倉庫の奥行18間分はすでに解体されている（ボイラー室新築設計図による）。第3製品倉庫は、木造トラス小屋組、西面内壁に当初仕様である鉄板張り内壁が遺存する（図2-6-5、写真2-6-3、5、13～15）。また2014（平成24）年に第一乾燥塔と同様に、前面約4間部分を中心に耐震改修工事が施されている（図2-6-2）。

第一乾燥塔とともに、昭和10年代後半の工場の趣を現在によく伝えており、本工場施設のランドマークとしてシンボリックな存在でもあり、さらに製品製造ラインの重要な役割を担う施設として貴重である。



写真 2-6-1 昭和 30 年代の第一・第二乾燥塔

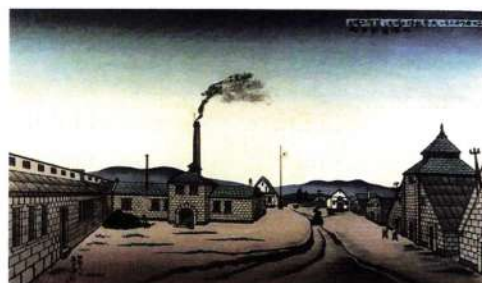


図 2-6-1 奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー大麦乾燥工場右と蒸溜工場左 北海道余市町 昭和 18 年 7 月」
(いずれもニッカウキスキー(株)北海道工場所蔵)

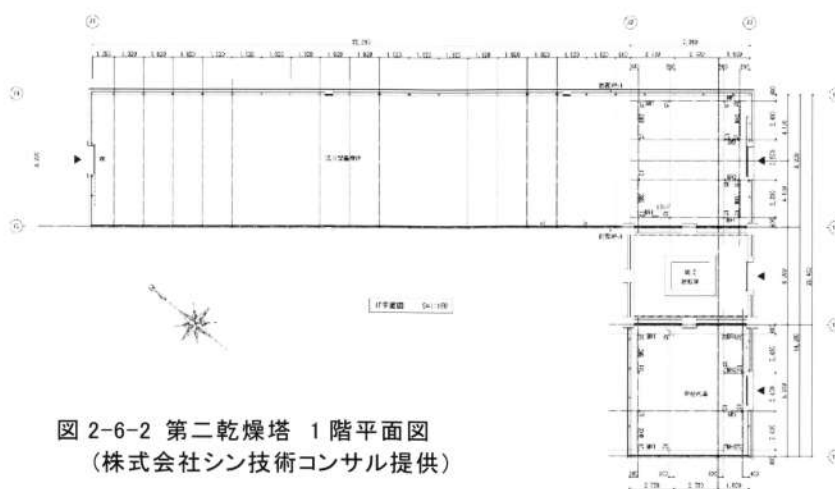


図 2-6-2 第二乾燥塔 1 階平面図
(株式会社シン技術コンサル提供)

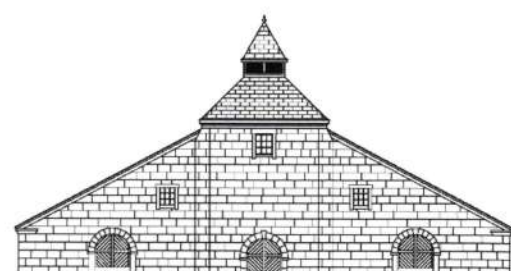


図 2-6-3 第二乾燥塔 南側正面図

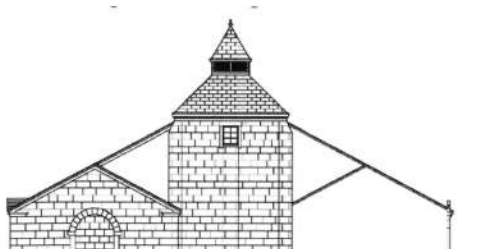


図 2-6-4 第二乾燥塔 北側立面図
(いずれも株式会社シン技術コンサル提供)

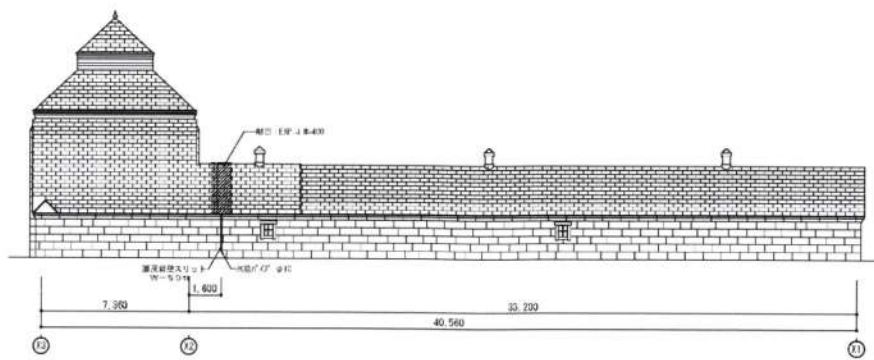


図 2-6-5 第二乾燥塔 東側立面図(第 3 製品倉庫)(株式会社シン技術コンサル提供)

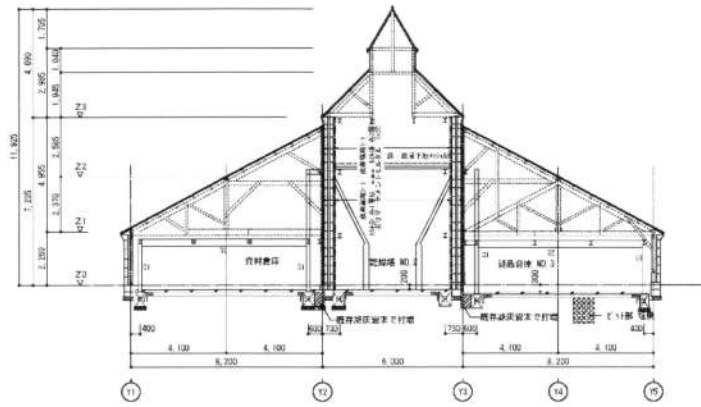


図 2-6-6 第二乾燥塔 断面図 (株式会社シン技術コンサル提供)



写真 2-6-2 第二乾燥塔 南側正面



写真 2-6-3 第二乾燥塔 東側外観
(第 3 製品倉庫外観)



写真 2-6-4 第二乾燥塔 西側外観(資材倉庫)



写真 2-6-5 第 3 製品倉庫 北東側外観



写真 2-6-6 第二乾燥塔 中央棟 2 階乾燥室



写真 2-6-7 第二乾燥塔 中央棟換気塔



写真 2-6-8 第二乾燥塔 中央棟上部小屋組



写真 2-6-9 第二乾燥塔 中央棟換気塔詳細



写真 2-6-10 資材倉庫 東面内観



写真 2-6-11 資材倉庫 小屋組



写真 2-6-12 資材倉庫 上部(東面をのぞむ)



写真 2-6-13 第3製品倉庫 北西面内観



写真 2-6-14 第3製品倉庫 北東面内観



写真 2-6-15 第3製品倉庫 南側内観

2-7 旧研究室兼居宅（現リタハウス）（登録有形文化財）

旧研究室兼居宅は、1931(昭和 6)年ころ建設といわれる旧但馬八十次邸を購入したもので、1942(昭和 17)年 3 月 1 日固定資産に編入されている。

但馬八十次の祖父文蔵は、1887(明治 20)年ころに醤油醸造業を興し、また酒造業も開始した人物であった¹²。その後、八十次の父八十蔵が家業を相続し、1909(明治 42)年に余市酒造業者の団結をはかり余市酒造株式会社に合併している¹³。八十次は、余市川と登川との合流点にあたる黒川町の広大な湿地を、1920(大正 9)年頃から埋め立て工事を開始し¹⁴、またウイスキー工場を誘致した人物でもあった¹⁵。

研究室は、北西側(以下北側)に正面玄関(写真 2-7-2)をみせ、東西方向に棟を走らせる 2 階建て切妻屋根の北棟と南北方向に棟を走らせる二段腰折れ屋根の南棟が接続し(図 2-7-3、写真 2-7-6)、南棟の両側に腰折れの屋根窓と小振りな差掛け屋根窓(東面)をみせ、北棟の西側に差し掛け屋根をかける(写真 2-7-3)。屋根はいずれの棟も金属板一文字葺としている。

基礎周りは、北棟、南棟とも玉石張とし、1 階部分はモルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)、2 階はモルタル刷毛引き仕上げとしている。1 階腰部分のモルタル仕上げの質感が掃き付け仕上げと異なっているのは、後の改修と考えられる。1955(昭和 30)年以降作成と考えられる『工場建物平面図』No. 4 には、「外部鉄網モルタル仕上」(図 2-7-4)とある。

北面玄関ポーチは、北棟平側面 4 間幅の東側に寄せて配し、平石張りの土台上の黄色味を帯びたモルタル洗い出し仕上げの独立柱(柱間 1.5 間)に支持された半切妻屋根で白く塗装された妻部にブラケットと桁を見せている。

欄間と両袖ガラス嵌め殺し開口で囲まれた内開きの両開き戸を入ると、天井高 3,385mm のホール 1 で、南側奥のホール 2 に階段 4 段で連結し、床高で 785mm 高くなっている。ホール 2 の天井高は 2,600mm である。ホール 1 の西側に木造角柱 2 本、北側壁から 1.5 間、西側柱列から 2 間の位置に角柱を立てている。いずれの角柱も、床から 785mm の高さまで基壇風にし、基壇上の白い角柱にはいずれも隅切りを施している(写真 2-7-7、9)。

ホール 1 西側の欄間付ガラス建具 8 枚は腰高でホール 2 の床面に合致する高さで建て込まれており、また西側柱列で分割される 4 尺幅の空間の天井は、井桁の押さえ棧を見せるホール天井とは異なり、化粧垂木天井であり、当初はこの部分が縁側であったと考えられる(写真 2-7-8、10)。

旧但馬家購入後、北棟部分は大幅に改造されたようで、最初経理事務所として、次にウイスキー製造工程の研究、ブレンド、成分分析などを行う研究室として使用され、1984(昭和 59)年から 1997(平成 9)年まで竹鶴資料館として利用され、同年 8 月から 2007(平成 19)年 9 月までリタハウスとして利用された¹⁶。

¹² 余市町教育会『余市町郷土史』1933(昭和 8)年

¹³ 西野精「余市町の酒造り」(『ひびけ 1985.10.21 第 16 号』)

¹⁴ 創立時の事務所(町指定文化財)の教育委員会作成紹介文

¹⁵ 前掲「余市町の酒造り」

¹⁶ ニッカウキスキー(株)北海道工場総務部 村田和彦氏による

『工場建物平面圖』では、居宅部分と研究室部分とは明確に分割されており、現在の北棟と南棟ホール2部分までを研究室として使用された(図2-7-4)。

ホール2の西面に欄間付き4枚建て開口(2,180×2,351mm)とし、欄間及び窓建具とも、中央2枚を引き分けとしている(写真2-7-12)。ホール2の東面には北側片開き窓と引き違い窓を建て込むが、引き違い窓を囲むように1.5間幅で額縁が廻る(写真2-7-13)。『工場建物平面圖』には、この部分に幅1.5間、奥行1間の突出部が記載されており、また旧写真(写真2-7-1)によれば、この部分に居宅用玄関が写っており、玄関部室内側建具の額縁痕跡と考えられる。

ホール2南側の欄間付き両開きガラス戸奥は、ティールームとして一時利用(1997(平成9)年8月～2007(平成19)年9月)されたダイニングルームで、天井高2,600mm。西面北側は2間幅で欄間付きガラス戸4枚建てとし、南側は1,500mm西側に張り出し、南側1.5間幅の出窓(奥行420mm)の内外に引き違い4枚建てガラス窓を建て込み、張り出し部の南面いっぱい欄間付き引き分け窓としている(写真2-7-13、16)。

ダイニングルームの東側南面のドア奥は、便所に改装されているが、その西側物置は、南西隅に出窓を張り出し、天井には中心飾りも遺存し、当初は質の高い室内として使用されたものと考えられる(写真2-7-17～18)。

「昭和39年2月15日 No.北231」¹⁷⁾の稟議書には、「研究室拡張の件」があり、「研究室は現在でも研究員(4名)に対し実験台等狭隘であります。研究分野の拡大及4月以向(ママ)人員増と共に現在の設備では応じ切れず。幸い後部建物が空き家となっておりますので、修理の上之を利用致し度く。工事は出来るだけ工場修繕費を以って賄ひ度く存じますが」とあり、工事予算書に改修部を記した1階間取図(図2-7-5)が添えられている。この間取図によれば、現ダイニングルーム部分は、3室に分割され、中央に円形ペチカが設けられていたが、間仕切りとともに撤去され、北側を「調合試験室」、南側「研究員室」、現倉庫部分は「試験場保管室」との記載があり、また北棟の研究室部分は、ホール1部分を「実験室」、ホール2を「機器分析室」と記載されている(図2-7-5)。地下に依存するれんが造の円形基部は、住宅時代の円形ペチカの基礎部分と考えられる(写真2-7-35～36)。

ホール2の東側に位置する直通階段室(写真2-7-19、23、29)から2階ホール(旧「會議室」¹⁸⁾)に連絡するが、2階階段室西面の横棧四枚入り腰付ガラス戸を入ると、北側に収納棚を造りつけた前室で、南側主室と丸太梁で分節されている。天井高2,600mmのホール主室には中央東西に二つの中心飾り(直径780mm)を見せ、西側に欄間付き横棧三枚の引き違い窓を三連建て込む出窓を設け、出窓南側に二連の嵌め殺し窓を建て込んでいる。出窓の室内側に柱型(220～230×160～170mm)を2本立て、出窓の窓台高さは床から455mm。主室及び前室の漆喰天井には壁境に蛇腹を廻し、壁は木摺り下地の上に漆喰塗り仕上げとし、高さ210mmの幅木を廻す(写真2-7-20～22)。

ホール西側から南に続く中廊下(写真2-7-24)を挟んで、西側に更衣室と浴室を配し、浴室は腰部に白タイルを貼り、天井とタイル貼りの壁は漆喰仕上げとしている(写真2-7-25)。天井中央には黄色く塗られた四角形の換気口を配している(写真2-7-27)。中廊下東側

¹⁷⁾ ニッカウキスキー株式会社所蔵

¹⁸⁾ 『工場建物平面圖』No.4(ニッカウキスキー(株)北海道工場所蔵)による

の細い廊下南端部の便所跡は、タイル床で腰部に白タイルを貼り、天井は木目を見せる折上げ天井として、折上げ部に換気口を設けるなどの工夫も見られる(写真 2-7-26、28)。

ダイニングルーム東側に地下に降りる階段と、出窓付きの現倉庫を介して2階に通じる階段室が配置される(写真 2-7-30)。階段を昇ると、3尺幅の廊下を挟んで北側寝室1(2間×2間)、南側寝室2(2間×2間)である。両室とも、西側に幅1間奥行2尺の出窓(屋根窓)とし、外側は両袖嵌め殺しの引き分け窓、内側は欄間付き引き違い4枚建てガラス窓とする。

寝室1(写真 2-7-31~32)は、北側に幅9尺奥行3尺の押入、東側中央に幅4尺奥行3尺の棚を備え、南側中央1間幅に板戸を建て込む出入口とし、壁は真壁構造の漆喰仕上げ、天井は南北方向に棹を入れた棹縁天井とする。天井高は2,650mm。

寝室2(写真 2-7-33~34)は、北側中央に1間幅に板戸を建て込む出入口、西側に3尺四方の押入、西面に寝室1と同仕様の出窓、南側に幅4尺、奥行2尺の床、南面中央に幅1間、奥行1尺の出窓とし、外側両袖嵌め殺し引き分け窓、内側欄間付き引き違い4枚建てガラス窓とする。壁は真壁構造の漆喰仕上げ、天井は南北方向に棹を入れた棹縁天井で、天井高は2,700mm。

現在の建築面積は209.03㎡、1階床面積204.06㎡、2階床面積126.08㎡、延床面積は330.15㎡である。

多くの改修を受けている建物であるが、黒川町の広大な湿地を1920(大正9)年ころから埋め立て工事を開始し、またウイスキー工場を現在地に誘致したといわれる但馬八十次の旧邸を引き継ぐ建物で、工場構内の施設の建設以前から存在する建物であり、さらに本工場の製品の質の向上や開発を支えてきた研究室という重要な役割を担った貴重な存在といえることができる。

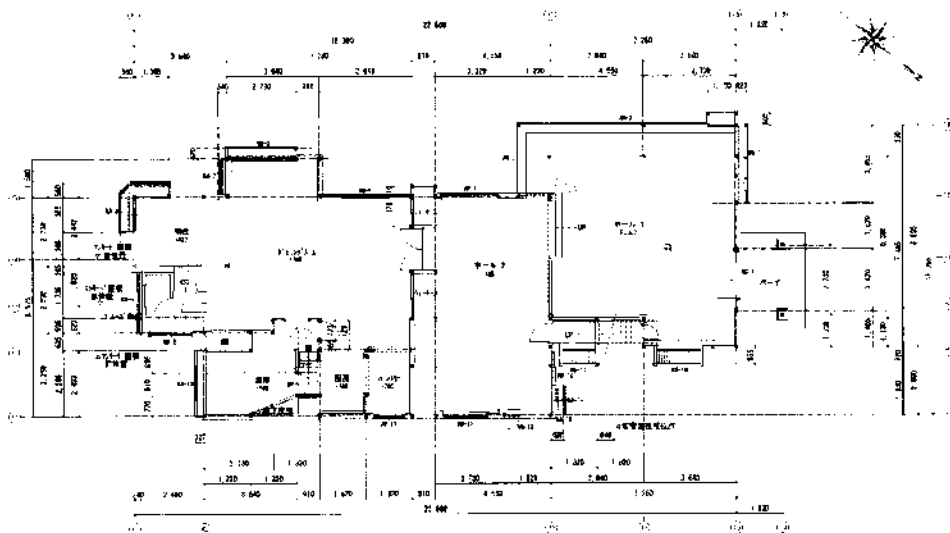


図 2-7-1 研究室 1 階平面図 (株式会社シン技術コンサル提供)



写真 2-7-1 研究室前集合写真(左手に住宅部
への玄関が見られる)
(ニッカウキスキー(株)北海道工場所蔵)



写真 2-7-2 研究室 北側外観



写真 2-7-3 研究室 北東側外観



写真 2-7-4 研究室 南東側外観



写真 2-7-5 研究室 南西側外観



写真 2-7-6 研究室 西側外観



写真 2-7-7 ホール 1 北東側



写真 2-7-8 ホール 1 南西側



写真 2-7-9 ホール 1 北西側*



写真 2-7-10 ホール 1 西側天井*



写真 2-7-11 ホール 2 南西側*



写真 2-7-12 ホール 2 東側



写真 2-7-13 ダイニングルーム 北西側



写真 2-7-14 ダイニングルーム 南東側



写真 2-7-15 ダイニングルーム北東側*



写真 2-7-16 ダイニングルーム南西窓*



写真 2-7-17 物置南西窓*



写真 2-7-18 物置中心飾り*



写真 2-7-19 北棟階段室



写真 2-7-20 2階ホール(旧会議室) 南西側



写真 2-7-21 2階ホール 北東側



写真 2-7-22 2階ホール・前室 東側



写真 2-7-23 2階階段室窓*



写真 2-7-24
2階中廊下(右手脱衣室)



写真 2-7-25 浴室
南東側



写真 2-7-26
2階便所 南東側



写真 2-7-27 浴室換気口*



写真 2-7-28 便所天井*



写真 2-7-29 北棟階段室*



写真 2-7-30 南棟階段室*



写真 2-7-31 2階寝室1 北西側



写真 2-7-32 2階寝室1 南東側



写真 2-7-33 2階寝室2 南西側



写真 2-7-34 2階寝室2 北東側



写真 2-7-35 地下に残る円形ペチカ基部 *



写真 2-7-36 地下のペチカ痕跡 *

2-8 旧竹鶴邸（登録有形文化財）

旧専務社宅として1934(昭和9)年ころ建築されたもので、1946(昭和21)年ころに山田町389番地に移築された。南側玄関棟と北側母屋とを渡り廊下でつないでいるが、建築当初からの母屋を山田町に移築後、母屋部分の再構成と玄関棟の増築が実施されたと思われる。

専務社宅に関する直接の資料は残らないが、『大日本果汁株式会社余市工場敷地及各建物配列圖』No.26(ニッカウキスキー(株)北海道工場所蔵)記載の「専務社宅」によれば、「千六十八番地ノ四十二」の敷地内に板塀で囲まれた住宅で、北東側の門扉から敷地内に入り、南東側に2.5×1間の玄関を突出させたほぼ矩形(4.5×7間)の母屋で、32坪(105.78㎡)の住宅であった(図2-8-1~2)。稟議書によれば、1942(昭和17)年に専務住宅の南側に事務所部分14坪24が増築され、1943(昭和18)年には塀の改修工事が実施され、その時点での住宅敷地は26.5×26.5間で、東から南側は石造塀の上に源氏塀、西から北側は木造源氏塀とし、一部北東隅部分を高さ8.5尺の石造防火壁としていた(稟議書92)。その後、塀は取り払われ、増改築が実施されたようで、『大日本果汁株式会社余市工場建物圖』No.23には住宅平面の積算図が記載され、62.18坪の規模であったことと、その後の『大日本果汁株式会社工場敷地及各建物配列圖』No.5(ニッカウキスキー(株)北海道工場所蔵)に記載の「住宅」に×が記されており、この規模の状態で工場構内から山田町に移築されたものと考えられる(図2-8-3、写真2-8-1)。

1994(平成6)年に有限会社本間組建工により、移築復元工事業務で図面が作成され、2002(平成14)年8月から11月末にかけて、阿部建設株式会社によって現在地に解体・再移築された(主に木工事は本間組建工が担当)。主要構造材は新材にとって替われ、2階内部は復元されなかったものの、山田町時代の姿を内外ともに忠実に踏襲し、内部の建具や調度品なども移築前の状況に極力復元され、創設者竹鶴政孝、リタ夫妻の西欧風日常生活を伝える遺構として貴重である。

母屋の南北軸と東西軸でおよそ10度母屋寄りに振って配置された玄関棟は、正面側に幅1.5間、奥行1間の木骨石造の風除室を突出させる(図2-8-4、写真2-8-2~3)。玄関棟主屋は矩勾配の切妻屋根の鉄板葺き、屋根頂部までの高さ6,380mm、軒桁高3,866mm、妻面中央頂部にブラケットをみせ、面中央に笠木をつけた二連の嵌め殺し窓を、背面は横長嵌め殺し窓を配し、妻壁両面はモルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)とし、外壁は下見板張りである(図2-8-5、写真2-8-8)。

玄関棟北側の母屋は、棟高7,350mm、棟中央から東西13.5尺の間口幅に8.5寸勾配の大屋根を葺き下ろし、東側6尺部分で2.5寸の緩勾配としている。二段腰折れ屋根の屋根窓の上部勾配は、6寸勾配、屋根窓左右には3寸勾配の片流れ屋根窓風意匠が見られるが、雪処理のためとも考えられるが、用途は不明である(図2-8-5)。北側便所の屋根勾配は9寸勾配。移築時に2階は復元されなかったため、西側屋根窓は外形のみの復元であるが、引き違いガラス戸や妻壁のモルタル仕上げや換気用グリルなどの旧状が復されている。

母屋の西面は、中央に引き違いベイウインドー(幅1.5間)、北側に4枚建て引き違い出窓(幅2間)、南側に4枚建て引き違い出窓(幅2間)をみせ、外壁は下見板張りペンキ塗り(写真2-8-4~5)。便所棟を突出した北面は、下見板張りの外壁上の妻面をモルタル仕上げとし、妻面中央に二連上げ下げ窓をつける。窓額縁の窓台下に縦枠に揃えた枠飾り、上部

の笠木に小さな歯飾り状装飾を縦枠位置と窓中央に飾るなどの細やかな意匠が見られる(写真 2-8-6、9)。

東面は、北から勝手口、台所窓(幅 1 間)、居間の引き違いベウインドー(幅 1 間、写真 2-8-10)が並ぶ。南側妻面の意匠も北妻面と同じであるが、西寄りに旧 2 階廊下採光用の嵌め殺し窓も外形のみ復されている(写真 2-8-7~8)。

両棟ともに、成 1,070mm、厚さ 150mm の鉄筋コンクリート造布基礎を廻し、地盤から 420mm をあらわし、650mm を地中に埋設し、厚さ 150mm、幅 1,270mm のフーチングとしている。

玄関棟風除室は、正面アーチおよび迫台柱や隅柱積石、南北両側面のアーチ小窓の縁石、軒蛇腹、土台石を緑色凝灰岩(笏谷石か)で引き締め、外壁は黄色味を帯びた凝灰岩を積み上げている(写真 2-8-11~12)。風除室の床は、黒い種石を見せる洗い出し仕上げ、腰部を人造石洗い出し仕上げとし、腰上から天井にかけては漆喰仕上げである(写真 2-8-13)。

風除室の西面に両内開き扉を建て込み、奥の板敷床の上にゴムマット敷き玄関(2.5×1 間)に続き、式台と踏込(8×3 尺)を経て、引き違い縦繁障子帯戸を建て込んだホール(2.5×3.5 間)である。引き違い帯戸上の長押に挟まれるように欄間を建て込み、上部長押上の壁は、棹縁天井意匠をそのまま折れ込む意匠を見せている。天井高は 4,800mm。欄間の上部長押は、漆喰仕上げの壁を四周している(写真 2-8-14~16)。

ホールは現在展示ホールとして利用され、東面に緞帳を嵌め込んだ額縁、その上に横長ステンドグラス窓とする。北側奥の片開き腰付ガラス戸は、母屋と連絡する渡り廊下に連絡し、南側手前の片開き腰付ガラス戸は、壁に建具のみ建て込んでいるもので、山田町時代には石倉への通路につながっていた(写真 2-8-17)。ホール西面は、中央に幅 8 尺に引き違い縦繁障子帯戸を建て込み、左右を棚および地袋付きの飾間(3.5×3 尺)とし、上部にステンドグラスの欄間としている(写真 2-8-18)。天井は東西に棹縁を渡す棹縁天井とし、幅木上の壁と矩勾配の腰折れ天井は、漆喰仕上げで、南北両面に 3 面ずつ化粧額縁をはめ込んでいる。天井高は 4,195mm。

ホール北側ガラス戸に続く渡り廊下は 1 間幅で、東面を幅 6 尺、奥行 2 尺の物入とし、上部は絵襖を入れた引き違い四枚戸の天袋、下部は引き出しと四枚板戸を建て込んだ地袋とする。西面には 1 間幅で横長の嵌め殺し窓としている。天井は竿縁天井である(写真 2-8-19~20)。

中廊下北面の一枚ガラス扉に続いて 2.5×4.5 間の居間である。東側北面に台所からの給仕口カウンターが備えられていることから、西側を居間空間、東側を食事空間として利用されたと思われる。壁、天井蛇腹、天井とも漆喰仕上げとし、天上高は 2,900mm。西面に幅 2 間、奥行 1.5 尺の出窓とし、日の字ガラス四枚建て引き違いの二重窓、東面中央に 1 間幅のベウインドーを張り出し、外側は欄間付き引き違いガラス窓、内側を目の字ガラス窓の引き違いとしている(写真 2-8-21~23)。

内開きの腰付き 1 枚ガラス扉を出ると、幅 3.5 尺の廊下(天井高 2,562mm)に続き、西側に幅 3 尺、奥行 2.5 尺の踏込への扉と寝室(2.5×3.4 間)に通じる扉、東側に台所に通じる扉が並ぶ(写真 2-8-24)。

踏込から 140mm 上がって、和室(8 畳)と和室(4 畳)の続き間で、和室(8 畳)南側に左(東)から床脇違い棚と床を構え、床と床脇境に狹くぐりを開け、床柱は径 150mm のスギ絞り丸太。西面に引き違い 4 枚建て縦繁格子障子を建て込み、長押上部 1 間幅を透かし欄間とし、

東面 1.5 間幅に引き違い 4 枚建て芭蕉布襖を、北側寝室境に引き違い芭蕉布襖 2 枚(幅 1,110mm、高さ 1,750mm)を建て込む。東面襖は、北から小便器、押入、踏込が奥行 2.5 尺、幅 3 尺で配され、踏込南側は幅 2.5 尺、奥行 6 尺の収納となっている。壁は緑色系の塗壁とし、天井は東西方向に棹をかけた杉板棹縁天井で、天井高は 2,700mm(写真 2-8-26~29)。

和室(4 畳)は、東面主室(8 畳)側の引き違い縦繁障子上の欄間に引き違い横繁障子を建て込み、西面は、腰高 190mm の位置に、内側 4 枚建てガラス窓、外側引き違い出窓(ペイウインドー)を設える。壁は暗赤色の塗壁とし、天井は南北方向に棹を渡す杉板棹縁天井で、天井高は 2,450mm(写真 2-8-30~31)。

寝室は幅 1 間奥行 3.4 間の長方形で、北側に奥行 3 尺で、東から幅 5.5 尺のアルコーブ、幅 7 尺の押入、幅 8 尺の洗面スペースを配し、床から 6 尺の位置に成 435mm の長押を廻す。幅 2 尺の袖壁で区画された洗面スペースは、黒タイル仕上げとしている(写真 2-8-34)。寝室は、幅木(高さ 200mm)上の壁、天井とも漆喰仕上げとし、西側と北側 1 間分の天井境に下り壁を設けている。西面は、幅 2 間、奥行 1.5 尺の出窓(床高 640mm)とし、内外とも、4 枚建て横三引き違いガラス戸を建て込んでいる(写真 2-8-32~33、35)。

廊下東側の台所は、2.5×1.5 間で、南側居間境にカウンターとサービス用給仕口を設け、居間側では奥行 800mm、幅 720mm のカウンター、台所側は奥行 300mm、幅 720mm のカウンターを設えている。台所東側に幅 1 間、奥行 2 尺で流し台、北側に幅 2 尺の棚、幅 3 尺の物入が並ぶ。北面東側に幅 1 間、奥行き 3 尺の物入、東側に 3×3 尺の勝手口とする。内壁は漆喰仕上げの真壁構造とし、天井も漆喰仕上げ、天井高 2,900mm(写真 2-8-36~37)。

廊下北側突き当たりには便所棟を連絡し、東側に 1×2 間の納戸、ガラス戸を建て込んだ 2 階小屋裏に通じる階段室とする(写真 2-8-25)。階段を登ると、小屋裏に通じる(図 2-8-43~45)。

移築時に復元されなかったが、移築前の間取り図(図 2-8-6)によると、階段を昇ると廊下西側に北から和室(7.5 畳)(図 2-8-38)、1×1 間の押入、北側に 1 間幅の押入 2 箇所を並べる和室(8 畳)(図 2-8-39~40)、和室(4.5 畳)(図 2-8-41~42)が並んでいた。和室(7.5 畳)の西面に床脇と床を並べ、和室(4.5 畳)の西に棚と押入を並べていた。2 階腰折れ屋根窓が復元された部分が、和室(8 畳)に当たる部分で、室内に煙突が立ち上がっていた。

玄関棟の妻面に見られるブラケットや白い窓枠と黒っぽいモルタル壁の対比などが昭和期のモダン住宅らしさを演出しており、また母屋棟は、竹鶴夫妻の居間や主人室、主婦室などの居住部分で、どの部屋も大きな窓開口を備え、小屋裏部屋採光用の腰折れ屋根窓がアクセントとなっている。

床面積は、玄関棟 45.70 m²、渡り廊下 9.36 m²、母屋棟 136.67 m²、延床面積は 191.73 m²である。

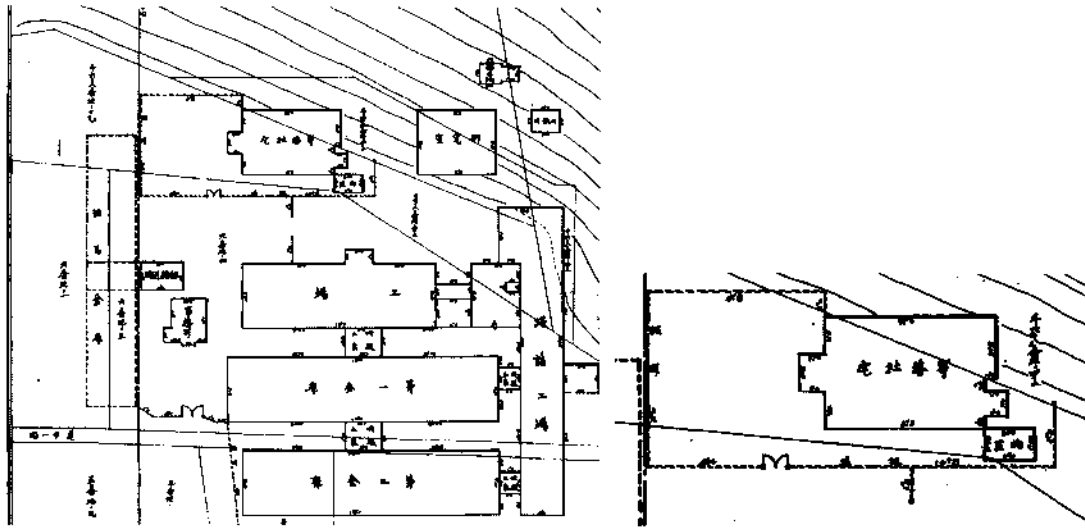


図 2-8-1 工場構内で木塀に囲まれた時代の専務社宅配置図 図 2-8-2 専務社宅 敷地図
 (いずれも『大日本果汁株式会社余市場敷地及各建物配列圖』No.26 から)

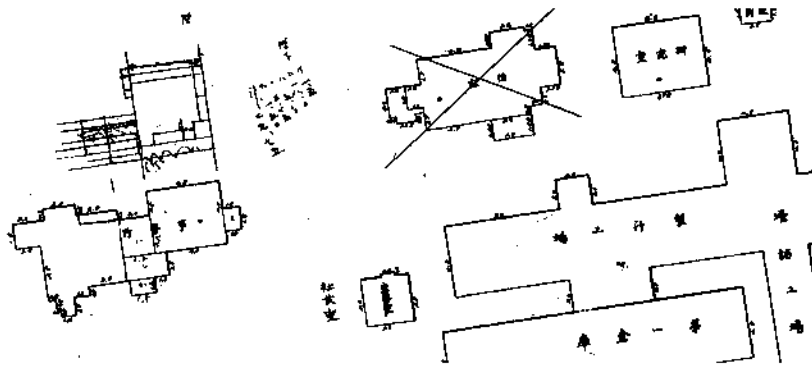


図 2-8-3 移築前の専務社宅 (『大日本果汁株式会社工場敷地及各建物配列圖』No.5 から)

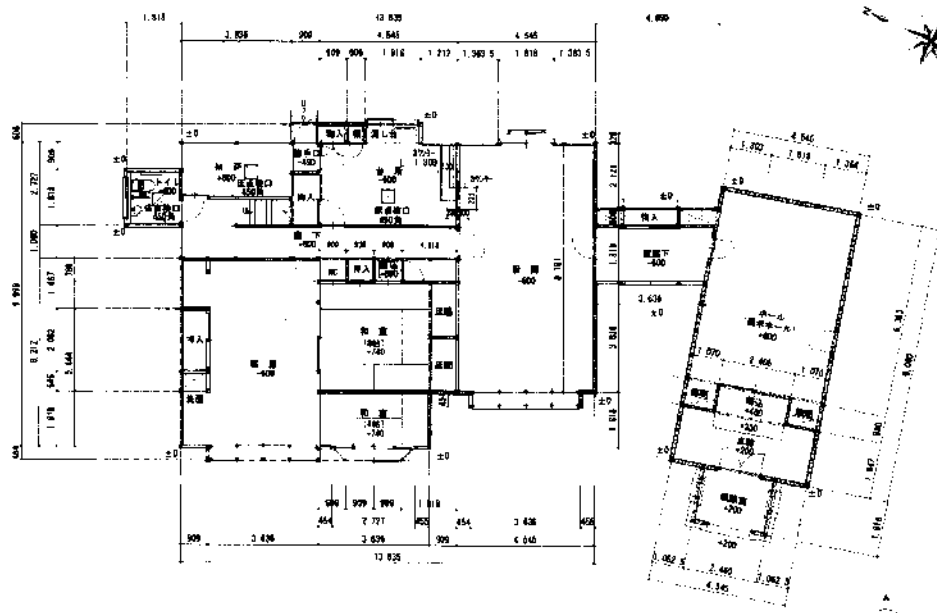


図 2-8-4 旧竹鶴邸 平面図 (株式会社シン技術コンサル提供)

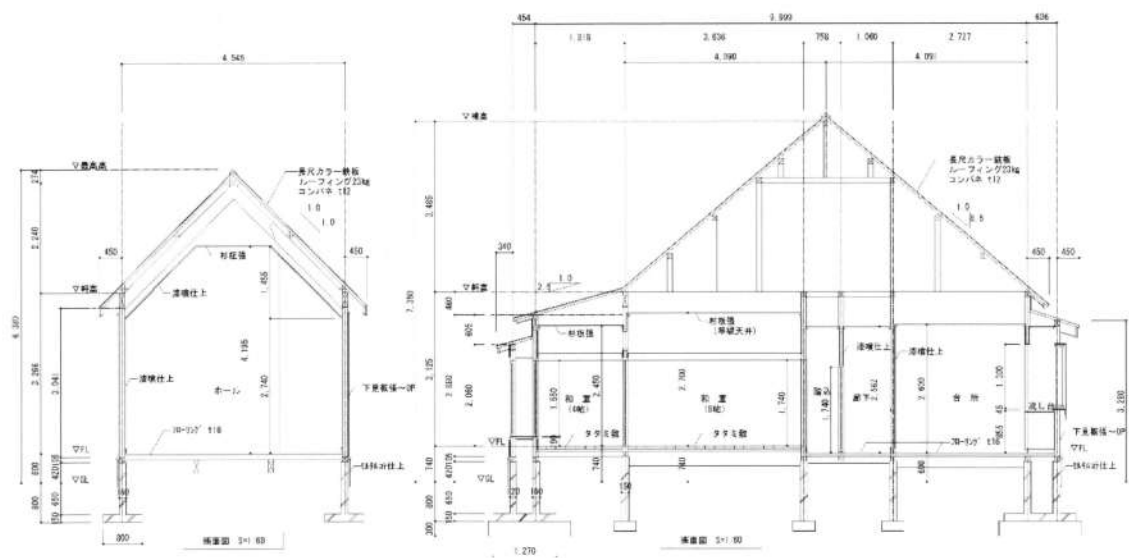


図 2-8-5 旧竹鶴邸 断面図(左:玄関棟、右:母屋棟) (株式会社シン技術コンサル提供)



写真 2-8-1 山田町移転前の竹鶴邸
(ニッカウキスキー(株)北海道工場所蔵)



写真 2-8-2 西側外観*



写真 2-8-3 玄関棟と母屋棟



写真 2-8-4 母屋棟西側外観



写真 2-8-5 移築前の母屋棟と玄関棟 (本間組建工提供)



写真 2-8-6 北側外観

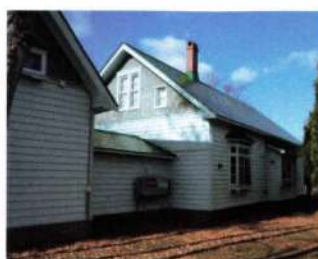


写真 2-8-7 母屋棟東側外観



写真 2-8-8 玄関棟と母屋棟東



写真 2-8-9 母屋西側妻面窓詳細
(本間組建工提供)



写真 2-8-10 母屋東側居間出窓*



写真 2-8-11 玄関棟風除室北面
(本間組建工提供)



写真 2-8-12 玄関棟風除室軸組と積石の取外し
(本間組建工提供)



写真 2-8-13 風除室内観



写真 2-8-14 風除室東側扉
(本間組建工提供)



写真 2-8-15 玄関 東面



写真 2-8-16 玄関 東側天井見あげ



写真 2-8-17 ホール 東面



写真 2-8-18 ホール 北西側内観



写真 2-8-19 渡り廊下 北側内観



写真 2-8-20 渡り廊下 南東面側内観



写真 2-8-21 居間 北西側内観(右手前台所給仕口)



写真 2-8-22 居間 北東側内観



写真 2-8-23 居間 南東側内観



写真 2-8-24 廊下 北側内観



写真 2-8-25 廊下 南側内観 (左側扉奥は小屋裏階段)



写真 2-8-26 和室 8 畳 南西側内観



写真 2-8-27 和室 8 畳 北東側内観



写真 2-8-28 和室 8 畳 南面座敷飾り*



写真 2-8-29 和室 8 畳 東面(襖奥北側小便器、南側踏込)*



写真 2-8-30 和室 4 畳 北東側内観



写真 2-8-31 和室 4 畳 南東側内観



写真 2-8-32 寝室 南西側内観



写真 2-8-33 寝室 北東側内観(左手前は洗面スペース)



写真 2-8-34 寝室 洗面スペース



写真 2-8-35 寝室 南東側内観



写真 2-8-36 台所 南東側内観 (正面右は給仕口)



写真 2-8-37 台所 北西側内観 (右は勝手)

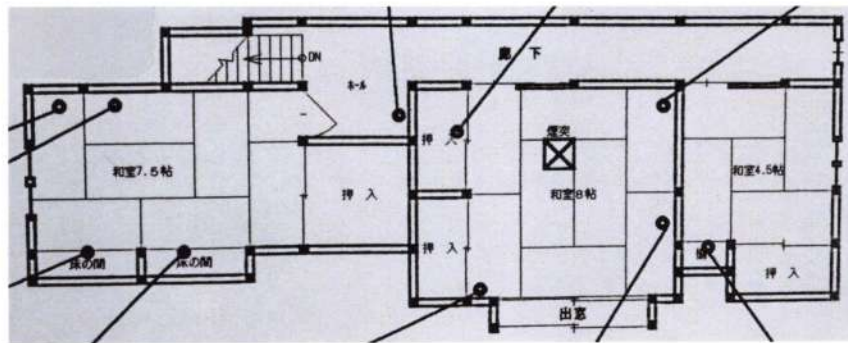


図 2-8-6 移築前の2階平面(本間組建工提供 以下@記号は同社提供)



写真 2-8-38 移築前2階 和室7.5畳@



写真 2-8-39 移築前2階 和室8畳西面@



写真 2-8-40 移築前2階 和室8畳北西面@



写真 2-8-41 移築前 2 階和室 4.5 畳 西面押入と棚@



写真 2-8-42 2 階和室 4.5 畳 南側窓@



写真 2-8-43 小屋裏
南西側内観@



写真 2-8-44 小屋裏
南側内観@



写真 2-8-45 小屋裏
北側内観*

2-9 旧大日本果汁株式会社余市工場創立事務所（旧社長室・会長室）（余市町指定有形文化財）

正門に対面するように位置する小さな建物で、会社創設時の1934(昭和9)年7月ころ竣工の旧事務所である。1935(昭和10)年3月に旧固定資産台帳に編入されている。

竣工当初は、3×3間の正方形平面の西側に1.2×4.8尺を突出した9.16坪の木造平家の事務所(図2-5-2)を、1945(昭和20)年代には西側に2間拡張する計画が行われた(図2-5-3~4)。創建時事務所の設計図(図2-5-1)では、突出部は、3×4尺とあるので、実施時に変更があったのかもしれない。創建時当初の旧事務所は、中央正面に切妻屋根の玄関小庇をみせ、左右の縦長窓は田の字ガラス建具を入れた上げ下げ窓であった。外壁は、防腐剤を塗ったようなやや黒味がかかった木造下見板張り、妻壁はモルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)で、破風板、窓枠や額縁、玄関の欄間付き建具や建具枠は白く塗装されて、ツートンカラーを強調した外観であった(写真2-5-1~3)。

1955(昭和30)年以降作成と考えられる図面(図2-5-5)には「木造平家建 建坪 一六坪 小屋組西洋合掌 床板張り 高さ三・五米 内部シックイ壁仕上 外部腰石積其ノ他モルタル仕上 家根亜鉛引鋼板葺」(工場建物圖)とあるので、この時期に平面の拡張や、腰部分の石積みと上部のモルタル仕上げの改修や、玄関ポーチの重厚な意匠への変更がなされたと思われる(写真2-5-4)。1943(昭和18)年から1976(同51)年まで、社長室・会長室として利用された。

改修を受けているとはいえ、工場施設最古の記念建築物であり、1980(昭和55)年「余市の工業発達の足跡を示す文化的資産」として余市町文化財に指定された。企業内建物としては、北海道初の文化財指定でもあった。

2001(平成13)年5月14日~6月8日にかけて、阿部建設(株)によって、改修工事が施工され、木摺漆喰下地の上にラス下地の追加、床根太や床材の取替え、前室間仕切りの造作など、既存の空間を維持しつつ、観覧用の現在の姿に改修されている。

建物は、正面を北東(以下東)に向け、東側2.5間幅の中央に、風除室を突出し、本体正面左右壁面に縦長上げ下げ窓を建て込んでいる。風除室は中央にアーチを見せ、両側の迫台柱は縦溝入れ緑色系凝灰岩(笏谷石か)の角柱(高さ920mm)に柱頭部と柱礎をつけた柱(高さ1,260mm)を見せている。屋根は寄棟。切妻の大屋根は、右(北)側6.5尺、左(南)側8.5尺と偏心し、右側屋根勾配40度、左側35度である。妻壁頂部と左右破風端にブラケットを付け、破風板、ブラケット、窓枠、隅柱を白く塗装し、暗灰色のモルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)とのコントラストをつけている(写真2-5-6~7)。

南側外観は、基礎石上に4段の腰石(成340mm)を廻し、上の黄系石材1段(成250mm)と下灰色系石材3段(840mm)と、色調の異なる凝灰岩積みとする。右側の引き違い小窓は、洗面所と便所の窓、左側の縦長上げ下げ窓は会長室アルコーブの窓である(写真2-5-8)。

西側は、二つの上げ下げ窓(700×1,820mm)の中央に石積み基部(基礎上端から1,350mm)から高さおよそ6,000mmの暖炉用れんが積み煙突(425mm角)を立ち上げている(写真2-5-9~10)。妻壁及び外壁は、正面と同様モルタル塗である。

平面は、東を正面として、3×5間の矩形平面の母屋の正面側に幅7尺、奥行5.4尺の玄関を突出させ、床面積は16坪(52.89㎡)(図2-5-6)。

両開きガラス戸奥が奥行1間、幅2.5間の前室で、正面のガラス間仕切り越しに会長室を一般観覧できる(写真 2-5-11)。北西の縦長上げ下げ窓にかかる位置に設置された間仕切りの北寄りの片開き腰付きガラス戸を引いて、幅3間、奥行4間の会長室に入室する。西側正面中央に緑色系凝灰岩(笏谷石か)で縁取りされた暖炉を構え、左右に床から780mm(窓台上まで)の位置に幅700mm、高さ1,820mmの上げ下げ窓を建て込む。暖炉のアーチ高さは1,055mm、幅610mm、縁取りの緑色系凝灰岩(笏谷石か)の幅は55mmで、炉前床に幅1,060mm、奥行432mmの石板をはめる。暖炉右(北側)隅に遺存する金庫は、創業時の「大日本果汁株式会社」の社名が入っている(写真 2-5-12~13)。天井高は、3,240mm。

北面に、同じ仕様の縦長上げ下げ窓を3カ所開け(写真 2-5-16)、南側は、西から奥行0.5間、幅1間のアルコーブと奥行0.5間、幅2間のアルコーブとし、アルコーブ間の壁厚は55mm、西側1間幅に竹鶴政孝使用の机が遺存し、2間幅のアルコーブには、床から780mm(窓台上まで)の位置に幅700mm、高さ1,600mmの上げ下げ窓を建て込む。幅木は成80mm、床高430mmの腰壁を回し込み、北側東寄りの窓2カ所部分のみ窓台下まで高くする。腰壁上から天井まで漆喰仕上げとし、天井高は、会長室 3,240mm、アルコーブ部 2,670mm、前室 3,3430mmである(写真 2-5-14~15)。

前室の南側は、幅0.5間、奥行1間の手洗い、奥行1間の便所とし、床高1,180mmの位置に幅830mm、高さ460mmの引き違い窓を建て込んでいる。天井高は2,325mm。

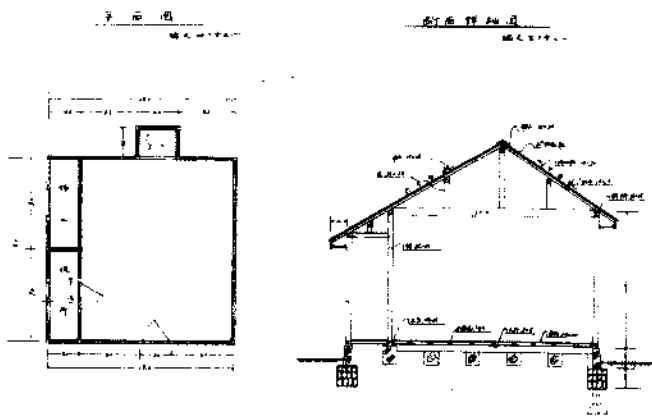


図 2-5-1 『社長室設計圖』No.9

社長室設計圖



図 2-5-2 社長室平面
(「大日本果汁株式会社工場敷地及建物配列圖」No.5)



図 2-5-3 創立時事務所平面
(「大日本果汁株式会社
余市工場敷地及建物配列圖」No.26)

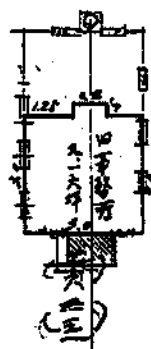


図 2-5-4 旧事務所拡張計画圖
(「大日本果汁株式会社
余市工場建物配列圖」No.23)

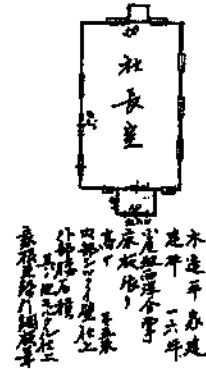


図 2-5-5 社長室平面
(「工場建物平面圖」No.4)

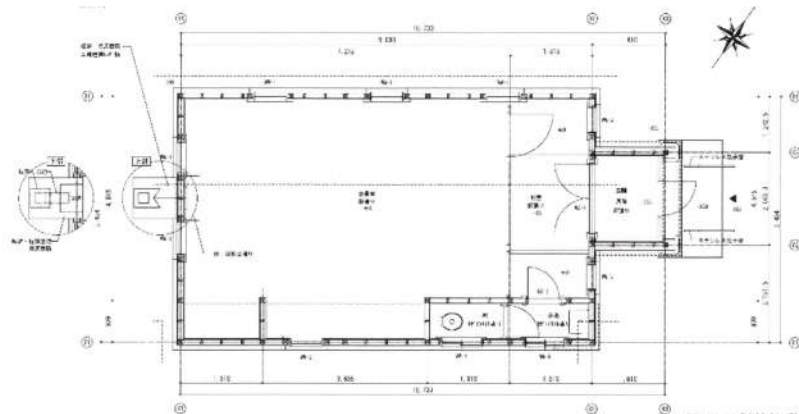


図 2-5-6 創立事務所平面図 (株式会社シン技術コンサル提供)



写真 2-5-1 創建時事務所正面
(ニッカウキスキー(株)北海道工場所蔵)



写真 2-5-2 創建時事務所南側外観
(ニッカウキスキー(株)北海道工場所蔵)



写真 2-5-3 創建時事務所正面
(ニッカウキスキー(株)北海道工場 HP より)



写真 2-5-4 改修後の社長室正面
(ニッカウキスキー(株)北海道工場所蔵)



写真 2-5-6 東側正面外観



写真 2-5-7 軒ブラケット*



写真 2-5-8 南東側外観



写真 2-5-9 南西側外観



写真 2-5-10 北西側外観



写真 2-5-11 東側内観



写真 2-5-12 西側内観



写真 2-5-13 暖炉と金庫



写真 2-5-14 南西側内観



写真 2-5-15 南東側内観



写真 2-5-16 北東側内観

2-10 第一貯蔵庫（登録有形文化財）

敷地内の原酒貯蔵庫の第1号にあたる貯蔵庫で、構内で最初の木骨石造建築として建設された。創建時は中島倉庫と呼ばれた(図 2-10-1)。以降、構内の施設には石材が採用されるようになったという。

創建時は、余市川の中州にあたる埋め立て前の中島の敷地で、貴重なウィスキー原酒を火災から守るために配置されたもので、固定資産編入日が1940(昭和15)年3月1日なので、1939(昭和14)年ころ建設と考えられる。中島周辺は、1940(昭和15)年以降に埋め立てられていった。

北側および南側外観(写真 2-10-1~2)は、6寸勾配の切妻屋根の妻面をみせ、棟高5,300mm、軒高2,190mm、中央に石造アーチの出入口(幅1,700mm、アーチ内法高2,030mm)を開け、土台石上のアーチの両寄り元柱は緑色凝灰岩(笏谷石か)(260×330mm、柱身高887mm)、柱頭を黄色系凝灰岩とし、アーチの輪石の成295mm。北面のみ、上部に凝灰岩で縁取った田の字ガラス窓を二連建て込む。ブローケンペディメント下から土台石まで凝灰岩5段を積む。ペディメント部は、凝灰岩を7段、コーニス部に一段積み、全体で13段の凝灰岩を積んでいる。

東側および西側外観(写真 2-10-3~5)は、およそ49mの長さで、土台石から軒蛇腹まで5段の凝灰岩を積み、両側面とも、凝灰岩で縁取られた採光小窓を3カ所ほぼ均等間隔で配し、田の字ガラス窓(400×560mm)を建て込んでいる。屋根は鉄板葺。

平面(図 2-10-2)は、梁間4.5間、桁行27間、建築面積121.5坪(401.65㎡)、土間床、内壁は縦羽目板張りである(写真 2-10-6~7)。内部は、ほぼ中央に板張り間仕切り壁を立て、北側の出入口付近で、幅4,900、長さ10,000mmのみアスファルト塗装に変更されている(写真 2-10-8)が、それ以外は土間床。土間床は適度な湿度が保てるように、また凝灰岩積みの外壁は、夏でも冷気が保つよう意図されている。

小屋組(図 2-10-3)はキングポストトラスで、構造材の寸法は、陸梁120×190mm、真束130×155~300mm、合掌120×190mm、棟木105×150mm、母屋90×150mm@1,000mm、鼻母屋120×120mm、方杖90×120mm、挟束45×100mm×2、野地板厚さ12mm、垂木55×60mm@455mm、敷桁120×120mm、土台150×150mm、柱150×150mm、間柱45×120mm、@606mmと実測され、床から陸梁天端まで2,335mm、棟木天端まで5,090mmである(写真 2-10-9~11)。

本建物は、原酒貯蔵庫の第1号にあたる貯蔵庫で、構内で最初の木骨石造建築として建設され、また構内の建物に採用される石材採用の端緒を開いた建物であり、構内の敷地の変遷を示す記念碑として貴重である。

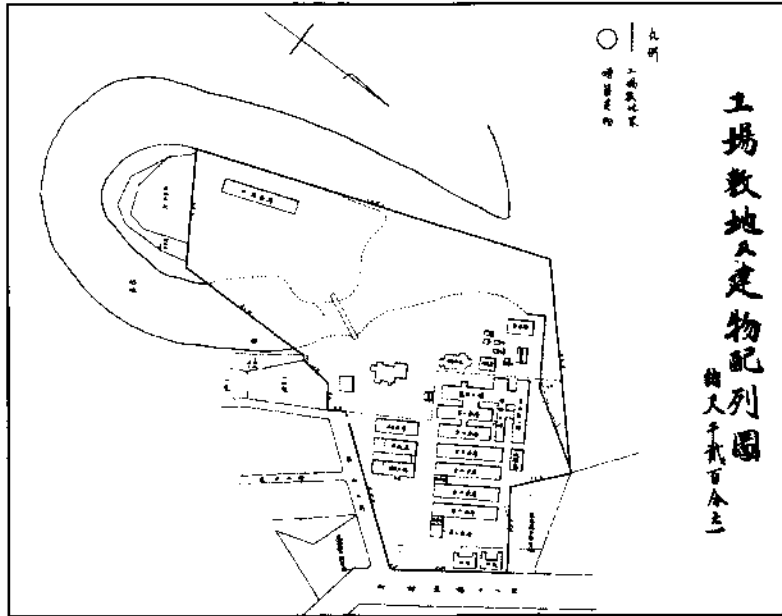


図 2-10-1 創建時の中島倉庫配置図 (ニッカウキスキー(株)北海道工場所蔵)

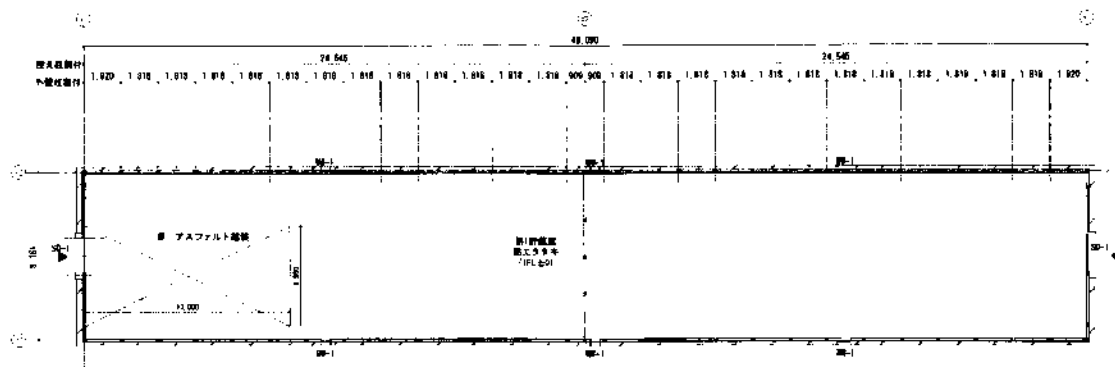


図 2-10-2 第一貯蔵庫 平面図 (株式会社シン技術コンサル提供)

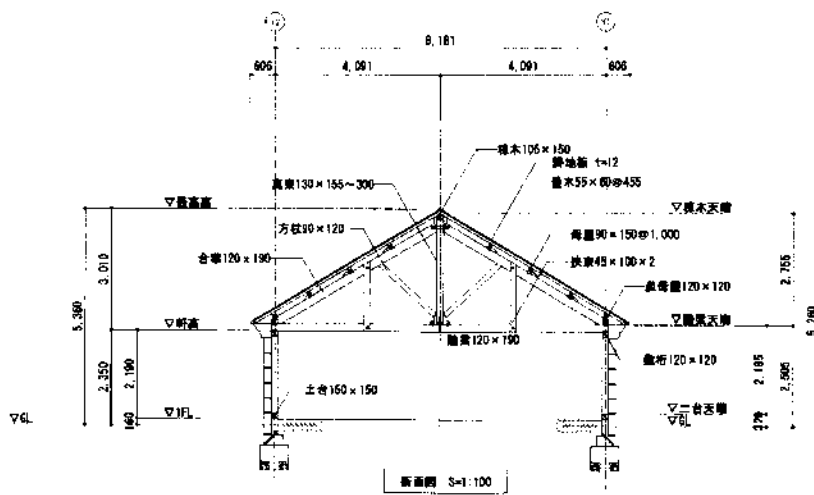


図 2-10-3 第一貯蔵庫 断面図 (株式会社シン技術コンサル提供)

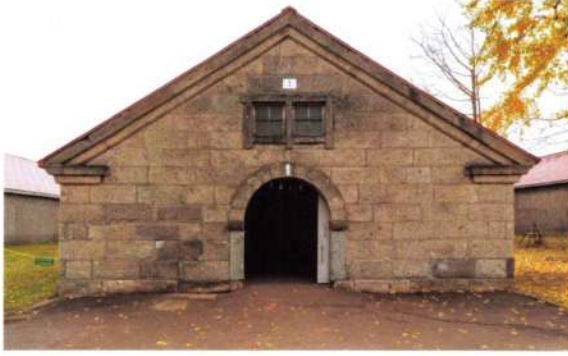


写真 2-10-1 第一貯蔵庫 北側外観



写真 2-10-2 第一貯蔵庫 南側外観



写真 2-10-3 第一貯蔵庫 北東側外観 *

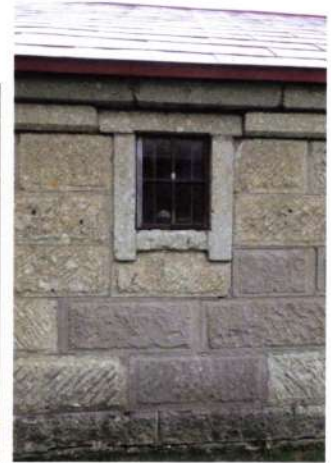


写真 2-10-4 第一貯蔵庫 側面小窓 *

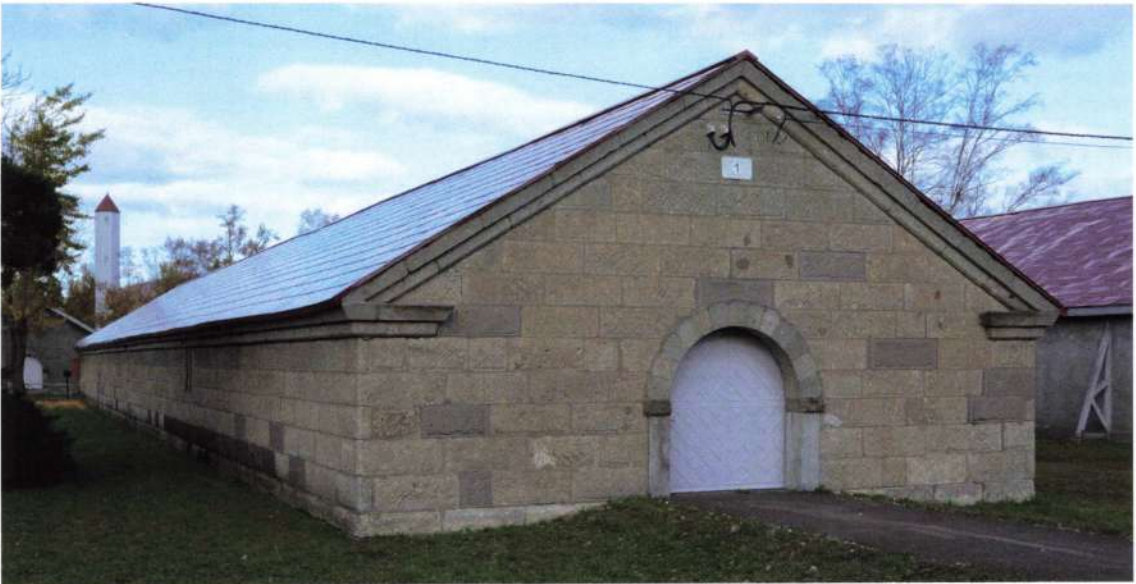


写真 2-10-5 第一貯蔵庫 南西側外観



写真 2-10-6 第一貯蔵庫 南側内観(2019年撮影)*



写真 2-10-7 第一貯蔵庫 南東側内観



写真 2-10-8 第一貯蔵庫 北側内観



写真 2-10-9 第一貯蔵庫 小屋組(キングポストラス)



写真 2-10-10 第一貯蔵庫 小屋組挟束*



写真 2-10-11 第一貯蔵庫 小屋組西側端部*



写真 2-10-12 第一貯蔵庫 西側内観*



写真 2-10-13 第一貯蔵庫 西側内壁と土台*

2-1-1 第二貯蔵庫

創建当初は、中島第二貯蔵庫と呼ばれた貯蔵庫で、切妻屋根カラー鉄板葺、木造モルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)の建物で、1946(昭和21)年3月1日旧固定資産台帳に記載があるが、1943(昭和18)年制作の奥山儀八郎の版画(図2-11-2)には描かれているので、1943(昭和18)年以前の竣工とも考えられる。ただ本版画には、1955(昭和30)年竣工の第三貯蔵庫も描かれており、版画制作年には疑問の残るところでもある。

2017(平成29)年に耐震診断調査が実施され、2018(平成30)年ころに鉄筋水平ブレースや補強金物の付加など、耐震補強工事が実施されている。

北側妻面外観(写真2-11-1)は、6寸勾配の切妻屋根の妻面をみせ、正面の石造アーチの出入口(幅1,680mm、アーチ内法高1,920mm)を開け、両側の迫り元柱を緑色凝灰岩(笏谷石か)(240×180mm、柱身高885mm)、柱頭を黄色系凝灰岩とし、柱上部を灰色凝灰岩の楔形輪石(上部幅330mm、下部幅240mm、中央高350mm、両側高260mm)で、アーチ構造とする(写真2-11-3)。棟高は6,265mm、軒高は3,240mm。

南側妻面(写真2-11-2)は、中央に楣石と両側柱で縁取られた幅2,420mm、高さ2,800mmの出入口で、シャッターを建て込んでいる。

東側および西側外観(写真2-11-4~6)は、およそ49mの長さで、東側は北から5間、8間、9間間隔で控柱3基を外壁面から底部で3尺ほど突出させ、北側控柱の南寄りに1カ所、第2~第3控柱の間に2カ所、採光用小窓を開け、田の字ガラス窓(400×560mm)を建て込んでいる。西側は、北から5間、8間、9間間隔で控柱3本を外壁面から底部で3尺突出させ、北側控柱から1間寄りに1カ所、第2~第3控柱の間に2カ所、採光用小窓を開け、田の字ガラス窓(400×560mm)を建て込んでいる。

平面(図2-11-3)は、間口5.5間、奥行27間、建築面積148.5坪(490.90㎡)、土間床、内壁は横羽目板張りである(写真2-11-7)。外観でも述べたように、東面の小窓は、北側から6間の中央、14間寄り、南側から5間寄りに3カ所開け、西面は、北側から6間寄り、中央部は西面とほぼ同じ位置の14間寄り、南側から5間の南寄りに東西で微妙に位置を違えて配置している。

小屋組はキングポストトラスで、北側から9間分までのフレームA(図2-11-4、写真2-11-8)では、構造材寸法は、陸梁140×205mm、真束145×145~290mm、合掌140×205mm、棟木105×150mm、母屋90×120mm@1,000mm、方杖110×120mm、挟束45×100mm×2、挟方杖30×115mm×2、野地板厚さ12mm、垂木70×55mm@455mm、軒桁120×120mm、敷桁120×120mm、土台120×120mm、柱120×120mm、間柱45×120mm@606mm、控柱105×105mmと実測され、床から陸梁天端まで3,1105mm、棟木天端まで6,225mmである。

南側のフレームB(図2-11-4、写真2-11-9~10)では、構造材寸法は、陸梁160×210mm、真束140×210mm、合掌160×210mm、棟木105×150mm、母屋90×150mm@1,000mm、方杖170×140mm、束150×140mm、挟方杖30×115mm×2、野地板厚さ12mm、垂木80×60mm@455mm、軒桁120×120mm、土台120×120mm、柱120×120mm、間柱45×120mm@606mm、控柱105×105mmと実測され、床から陸梁天端まで3,290mm、棟木天端まで6,225mmである。

切妻屋根の外観は、他の貯蔵庫とも共通する意匠で、外壁の特徴的なモルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)は、第一貯蔵庫などに採用された凝灰岩積みとの統一性を意識した意匠とも

考えられ、また第一、第三貯蔵庫を含め、昭和 18(1943)年制作の奥山儀八郎の版画にも描かれており、創業時の景観を伝える上で、貴重な存在の一つである。

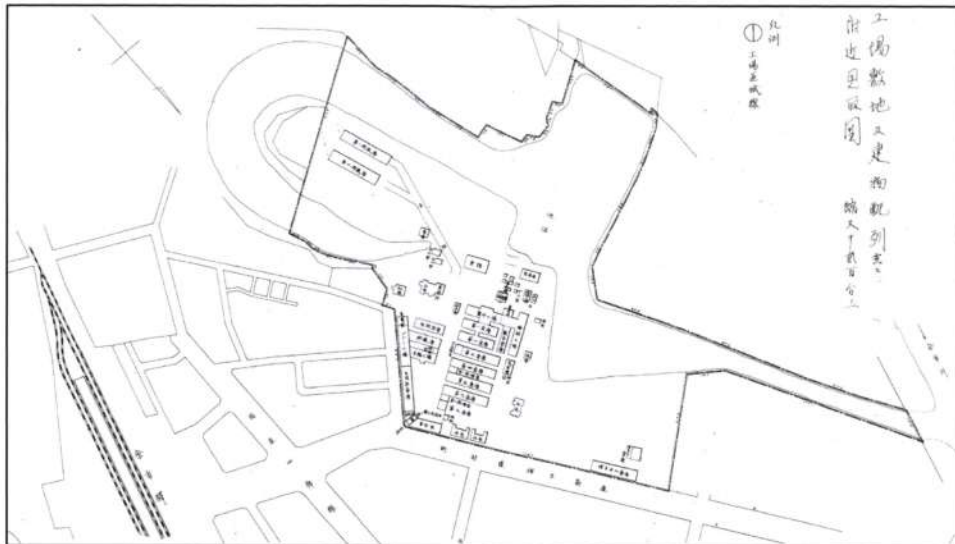


図 2-11-1 創建時ころの第二貯蔵庫配置
（『工場敷地及建物配列並附近見取図』 No.20）(ニッカウキスキー(株)北海道工場所蔵)



図 2-11-2 奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー貯蔵庫嶋 北海道余市町 昭和 18 年 7 月」
（ニッカウキスキー(株)北海道工場所蔵）

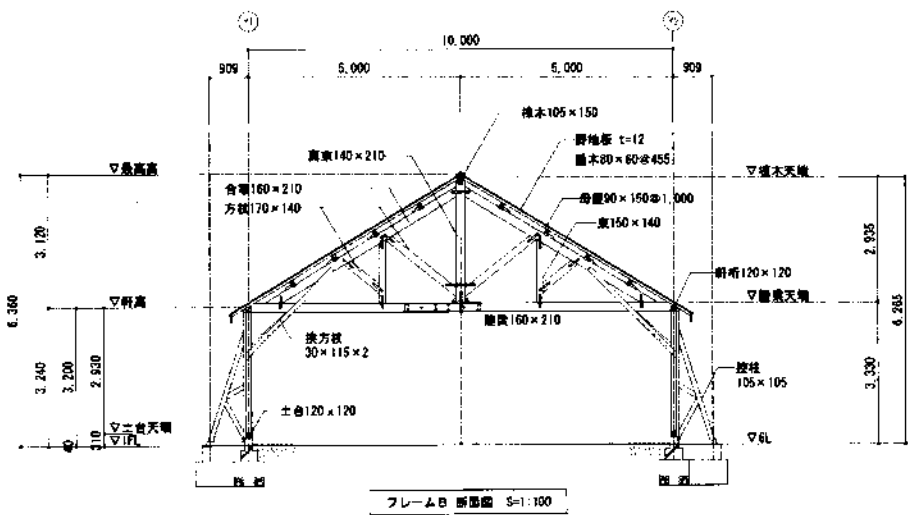
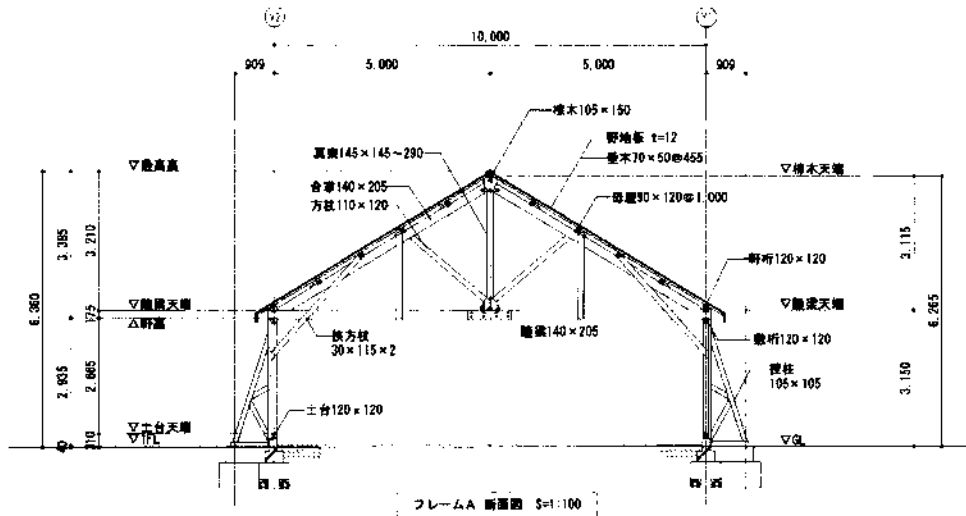
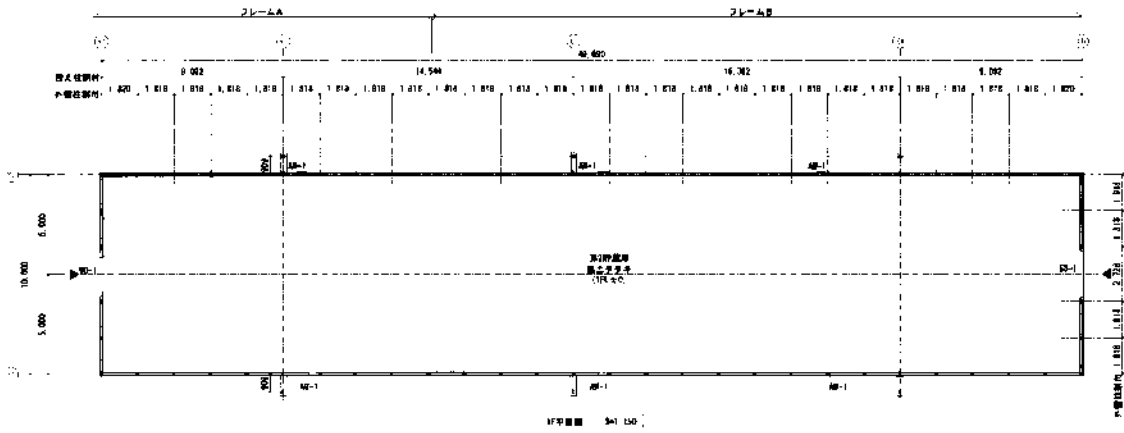




写真 2-11-1 第二貯蔵庫 北側妻面外観



写真 2-11-2 第二貯蔵庫 南側妻面外観



写真 2-11-3 第二貯蔵庫 北側出入口*



写真 2-11-4 第二貯蔵庫 北西側外観



写真 2-11-5 第二貯蔵庫 南東側外観



写真 2-11-6 第二貯蔵庫 北東側外観 (右手建物は第一貯蔵庫)

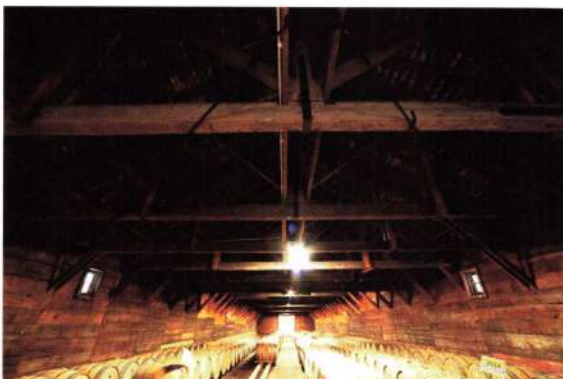


写真 2-11-7 第二貯蔵庫 南側内観



写真 2-11-8 第二貯蔵庫 小屋組(フレーム A) *



写真 2-11-9 第二貯蔵庫 西側壁面と挟方杖 *



写真 2-11-10 第二貯蔵庫 小屋組(フレーム B) *

2-1 2 第三貯蔵庫

創建当初は、中島第三貯蔵庫と呼ばれた貯蔵庫(図 2-12-1、写真 2-12-1~2)で、切妻屋根カラー鉄板葺、木造モルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)の建物で、1949(昭和 24)年 7 月竣工とされているが、1955(昭和 30)年 7 月の稟議書(No. 15)および申請履歴書により、工事着工予定日 1955(昭和 30)年 8 月 28 日、工事完了予定日同年 10 月 31 日との記録がある。稟議書によると、敷地内にあった「埋立第一倉庫幅五間長六間、埋立第二倉庫幅五間半長二三間」の 2 棟を移転改築し、第三貯蔵庫として建築することが記されている。1943(昭和 18)年制作といわれる奥山儀八郎の版画(図 2-11-2 参照)に貯蔵庫 3 棟が描かれており、中島貯蔵庫の建築年の推定の根拠の一つとして考えられたが、本版画の制作年にやや疑問が残るところである。

控柱付きモルタル仕上げの貯蔵庫の標準設計図と考えられる『貯蔵庫建築設計圖』No. 36 には、「二級建築士登録第一四四号 土岐 番」との記載があるので、設計者の可能性は非常に高い。建築士法が施行されるのは 1950(昭和 25)年なので、本図面は 1950(昭和 25)年以降に作成されたものと考えられる。土岐番は、ニッカウキスキー(株)余市場工場工営部職員として、1939(昭和 14)年~1958(同 33)年に在職した人物である。

2017(平成 29)年に耐震診断調査が実施されたが、翌 2018(同 30)年 2 月に北側 163.64 m² が倒壊したため、同年 11 月北側妻壁ほかの改修が行われている。

竣工当初は、梁間 5.5 間、桁行 27 間、建築面積 148.5 坪(490.90 m²)であったが、現在は、桁行 18 間、建築面積 99.0 坪(327.26 m²)である。

北側外観(写真 2-12-3)は、6 寸勾配の切妻屋根の妻面をみせ、モルタル掻き落とし仕上げとし、東寄りに幅 950mm、高さ 2,000mm の片開き戸を建て込んだ出入口とし、軒高 2,325mm、棟高 5,705mm である。南側妻面(写真 2-12-4)は、モルタル塗り仕上げとし、中央に楣と両側柱をモルタル作り出しで縁取られた幅 1,700mm、高さ 2,200mm の開口部内側に、1,800×2,180mm の鉄板張り型引き戸を建て込んでいる。

東側および西側外観(写真 2-12-5~8)は、およそ 33m の長さで、外壁はモルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)とし、北から 11 間の位置に控柱 1 基を外壁面から底部で 3 尺ほど突出させ、北東西とも北から 5 間の中央と、南から 8 間の中央、控柱の北側に採光用小窓を開け、田の字ガラス窓(430×560mm)を建て込んでいる。屋根上には、北から 4.5 間、5 間、5 間の間隔で、ベンチレーターを備えている(写真 2-12-9~10)。

間口 5.5 間、奥行 18 間の平面で、北側 9 間分の基礎部分のみ遺存する(図 2-12-2)。内部は土間床とするが、南側奥行 2m のみ、土間コンクリート直均し仕上とし、内壁は横羽目板張りである(図 2-12-11~12)。

小屋組(図 2-12-3)はキングポストトラスで、転用材の使用が見られるが、構造材寸法は、陸梁 150×210mm、真束 130×155~300mm、梁挟 60×120mm、合掌 135×210mm、棟木 105×150mm、母屋 90×150mm@1,000mm、方杖 110×120mm、挟束 50×135mm×2、挟方杖 25×120mm×2、野地板厚さ 12mm、垂木 55×60mm@455mm、鼻母屋 120×120mm、軒桁 120×120mm、敷桁 120×120mm、土台 120×120mm、柱 120×120mm、間柱 45×120mm@606mm、控柱 100×100mm と実測され、床から陸梁天端まで 2,505mm、棟木天端まで 5,610mm である(図 2-12-13~16)。

本建物は、創建時から北側9間分が倒壊してはいるが、倒壊後の補修にあたっては、他の貯蔵庫の外観意匠と統一を図っており、また埋立前の中島に建設された第一、第二貯蔵庫と同様に、工場創業時の歴史を語る貯蔵庫群の一つとして貴重である。

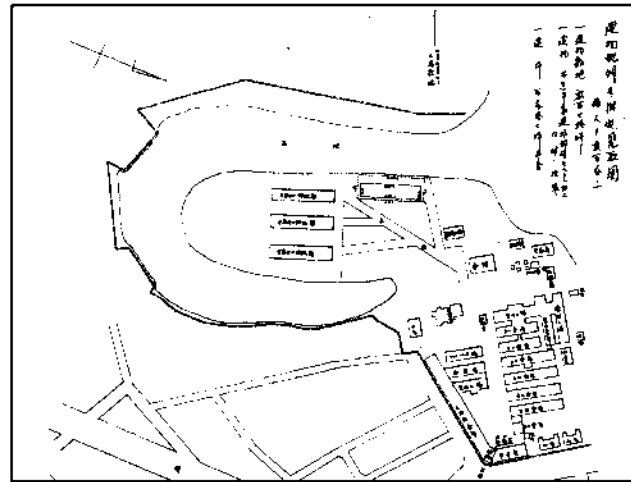


図 2-12-1 中島第三貯蔵庫と呼ばれた時期の配置図（「建物配列並附近見取図」『貯蔵庫建築設計圖』No.34 部分 ニッカウキスキー(株)北海道工場所蔵）

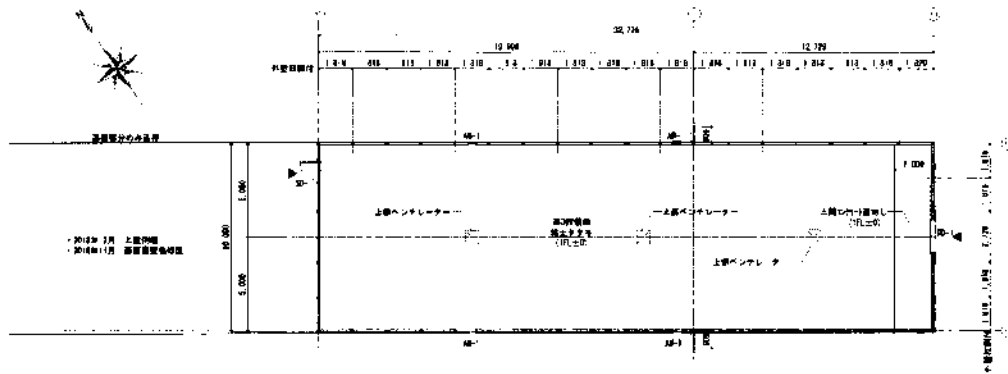


図 2-12-2 第三貯蔵庫 平面図（株式会社シン技術コンサル提供）

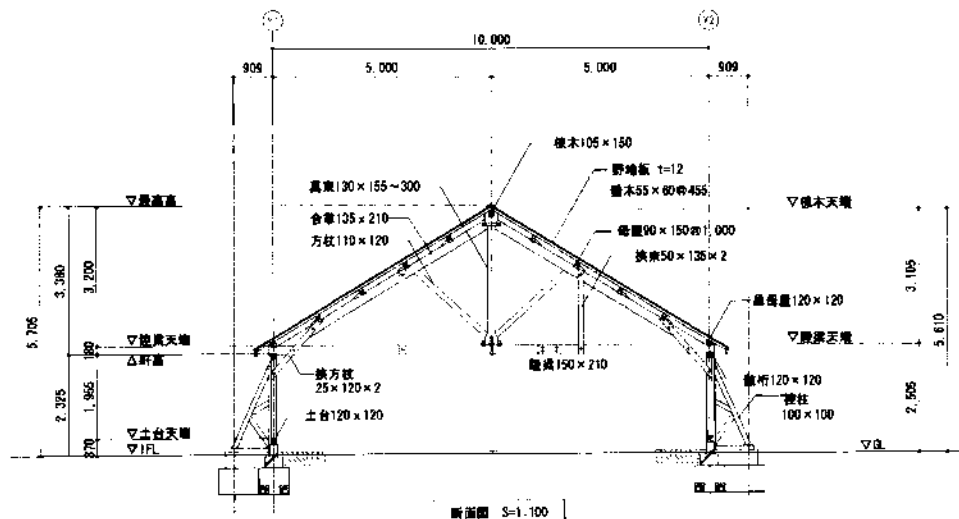


図 2-12-3 第三貯蔵庫 断面図（株式会社シン技術コンサル提供）



写真 2-12-1 中島倉庫群(左が第三貯蔵庫)



写真 2-12-2 中島倉庫群を南側から俯瞰
(いずれもニッカウヰスキー(株)北海道工場所蔵)



写真 2-12-3 第三貯蔵庫 北側外観



写真 2-12-4 第三貯蔵庫 南側外観



写真 2-12-5 第三貯蔵庫 北西側外観



写真 2-12-6 第三貯蔵庫 南東側外観



写真 2-12-7 第三貯蔵庫 南西側外観



写真 2-12-8 第三貯蔵庫 北東側外観



写真 2-12-9 第三貯蔵庫 西側外観



写真 2-12-10 第三貯蔵庫 東側外観



写真 2-12-11 第三貯蔵庫 南側内観



写真 2-12-12 第三貯蔵庫 南側出入口廻り内



写真 2-12-13 第三貯蔵庫 北側内観 *



写真 2-12-14 第三貯蔵庫 トラス小屋組(北方向) *



写真 2-12-15 第三貯蔵庫 トラスとベンチレーター*



写真 2-12-16 第三貯蔵庫 ベンチレーター見上げ*

2-13 機械工場（工務係室）

旧名称は機械修繕工場。現存建物は1949（昭和24）年頃建設された。間口4間半（8.18m）、桁行6間（10.9m）ほどの切妻屋根（5寸勾配）、妻入の主屋とその後方に同じく切妻屋根（5寸勾配）の間口3間（5.45m）、奥行3間半（6.36m）ほどの物置が付属する。さらに主棟のほぼ中央部上部に1階と棟筋を直交する形で、梁間、桁行共に3間（5.45m）ほどの切妻屋根（5寸勾配）の2階会議室がある。

北海道工場所蔵資料中には『機械修繕工場改築設計圖 縮尺六十分ノ一』No.62（図2-13-1）が存在し、平面規模は現存平屋の主屋部分に一致する。立面図を見ると、建具は現存建物の窓では欄間付半紙判9入引違窓であるものがNo.62の立面図では欄間を欠いているが、正面、側面の建具配置や軒先・破風廻りのデザインもほぼ同様であること、矩計に描かれるキングポストトラスの小屋組が現存建物に一致することなどから、この設計図が現存建物の建築にあたって実質的な設計図であったと考えられる。

一方、設計図と現存建物を詳細に比較すると、前記した建具形式の相違、設計図に描かれる正面右端のドアや窓台・楣を欠くこと、現存する物置や2階会議室が描かれていないなどの相違点がある。以上のことから機械修理工場の建設は当初、平屋建の主屋のみが計画され、その後、1959（昭和34）年頃に2階会議室、物置が増築されたものと考えられる。

現存する建物は切妻屋根、カラー鉄板葺（5寸勾配）。当初建設と考えられる工場主屋（軒高約3m）、2階会議室（最高高7.9m）、物置共に、鼻隠を垂直に張り、破風尻もこれに合わせて垂直に切り落とし、軒天井を水平に張る意匠は共通する。一方、工場・2階会議室と後方の物置を比較すると、破風尻の意匠の細部にわずかな違いがみられ、建設時期の違いを反映しているとも考えられる。

外壁は工場・2階会議室は特徴的なモルタル掃付仕上げ（ドイツ壁）であるが、物置はモルタル刷毛引仕上げ。モルタル掃付仕上げ（ドイツ壁）は外壁の仕上げとしてモルタルを彫などで弾き飛ばして壁面に付着させる仕上げ方法で、北海道では大正期から昭和30年代頃までの洋風住宅・官舎や木造駅舎などにその類例が見られる工法で、工場・2階会議室と物置の建築時期の違いを反映していると考えられる。

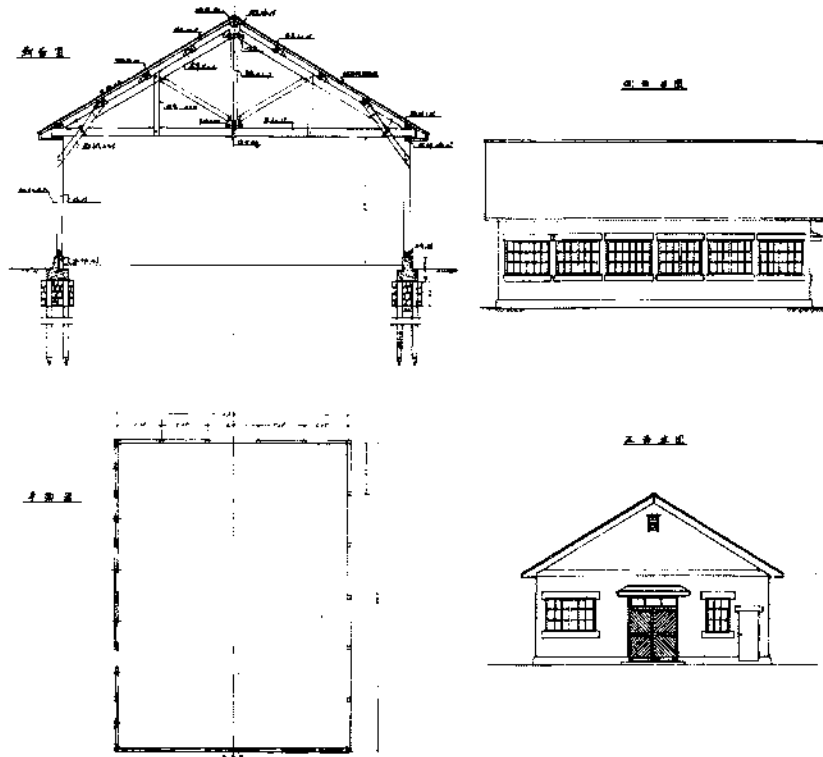
内部の壁は、1階工場は鉄板張ペンキ塗仕上げ。天井は2階床組・野地板現し、床はコンクリート土間。構造は木造軸組であるが、1階工場部分には2階増築部分の外壁位置に後補と考えられる直径10cmの鋼管6本を配置して上部2階会議室を支えている。小屋組はトラス構造が基本であるが、工場平屋部分では方杖、挟束を欠き、2階では挟束を欠いている。物置の小屋組は不明。

基礎は当初設計図によれば、木杭地業の上に割栗石を敷き、コンクリート基礎を設置したと考えられ、設置される工作機械の重量や地盤の軟弱性を考慮したことが考えられる。

建物を特徴づける意匠として、南面のほぼ全面にガラス窓が設けられていることがあげられる。巾1間の欄間付半紙判ガラス9入の引違窓が6連集中して設けられ、工場作業への十分な採光を考慮したものと考えられる。

以上のように当該建物は、外観は工場全体に見られる統一的な意匠を踏まえつつ、機械修理工場としての機能に配慮した建物といえる。同時に、前記した屋根や外壁仕上げの技法は、大正期から昭和30年代頃まで北海道内の木造駅舎や官舎などに用いられた意匠と類似性をもち、北海道の建築の歩みを考える上でも貴重な建物である。延床面積は、154.93

m²である。



機械修繕工場改築設計圖

第六十分一

図 2-13-1 『機械修繕工場改築設計圖』 No.62

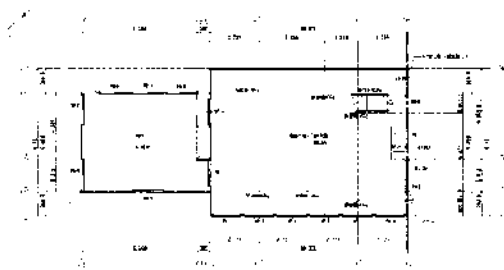


図 2-13-2 機械工場 1階平面図
(株式会社シン技術コンサル提供)

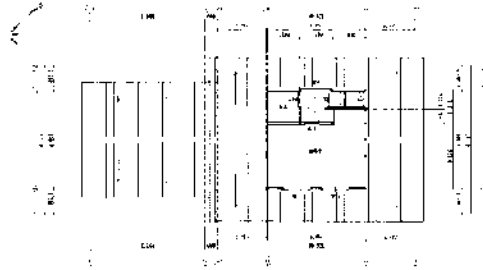


図 2-13-3 機械工場 2階平面図
(株式会社シン技術コンサル提供)

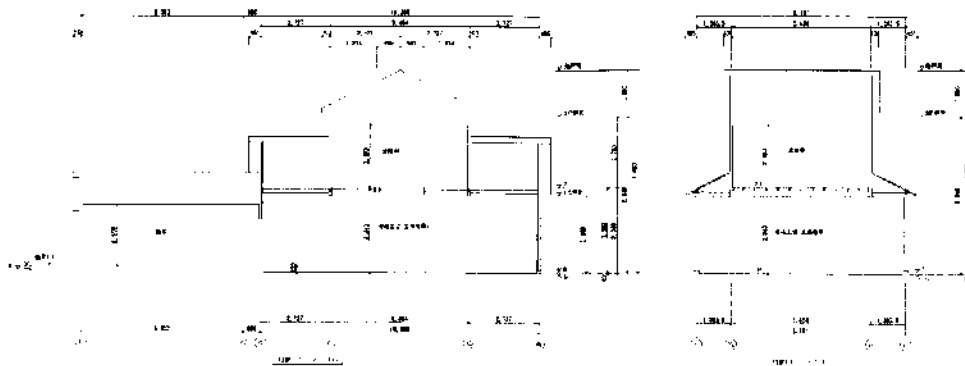


図 2-13-4 機械工場 断面図(株式会社シン技術コンサル提供)



図 2-13-5 機械工場 立面図 上段左:南面、同右:東面、下段左:北面、同右:西面
(株式会社シン技術コンサル提供)



写真 2-13-1 機械工場 東面



写真 2-13-2 機械工場 南面



写真 2-13-3 機械工場 西面



写真 2-13-4 機械工場 北面



写真 2-13-5 機械工場 内部



写真 2-13-6 機械工場 天井、2階を支持するパイプ



写真 2-13-7 2階会議室



写真 2-13-8 物置

2-14 麦芽倉庫・フレコン室

ウイスキーの主要な原料の一つである麦芽の貯蔵庫。現在は主にフレコン（Flexible Container：樹脂製で穀物など粒状の資材を収納、搬出するのに用いられる折り畳み可能な大型の袋）を利用して麦芽を貯蔵している。

奥山儀八郎版画「創立事務所から正門を望む 北海道余市ニッカ工場 昭和18年7月」に描かれ、1942(昭和17)年頃に建設されたものと考えられる。

間口（梁間）4間半(8.18m)。奥行（桁行）22間半(40.9m)の長大な麦芽貯蔵庫である。

切妻屋根カラー鉄板葺（5寸勾配）軒高3.3m、最高高5.3m。当初は両妻の南西面（正面）・北西面に巾1間（1.8m）ほどの搬入口を備えていたものと考えられるが、現在は北西面の開口を巾3.1mほどに拡張、北東側にも巾2.7mほどの開口を新たに設け、それぞれシャッターを設置している。

現状の外壁は南西面（正面）及び正面右側北東面への廻り込みの一部を凝灰岩積としているが、他の壁面はモルタル塗で、正面凝灰岩積の目地に合わせた石積模様目地切仕上としている。これは、主に経年により建物全体の不等沈下が進行し、外壁の傾斜沈下、軸組の変形などが大きくなったため、2005(平成17)年頃、基礎・土間コンクリート改修、一部鉄骨軸組追加、当初の木造軸組・小屋組の補強、内壁のほぼ全面に渡る構造用合板張補強などを行い、凝灰岩積による外壁重量の軽減を考慮してモルタル塗とした上で、桁行両外壁面には5.45m間隔で控柱5対を付加している。

以上のように本建物は、構造上大規模な改修が行われているが、外観は当初の凝灰岩積構造を可能な限り温存し、改修部分についても当初材料とは異なるものの当初外壁の材質感を良好に再現している。

切妻屋根、カラー鉄板葺で軒先の鼻隠を垂直に張り、破風尻もこれに合わせて垂直に切り落とし、軒天井を水平に張る。これは他の貯蔵庫などの施設と共通する意匠で、外観は改修に当たっても工場全体に見られる統一的な意匠を維持し、倉庫としての機能を維持、向上させている貴重な建物である。延床面積は、334.64㎡である。

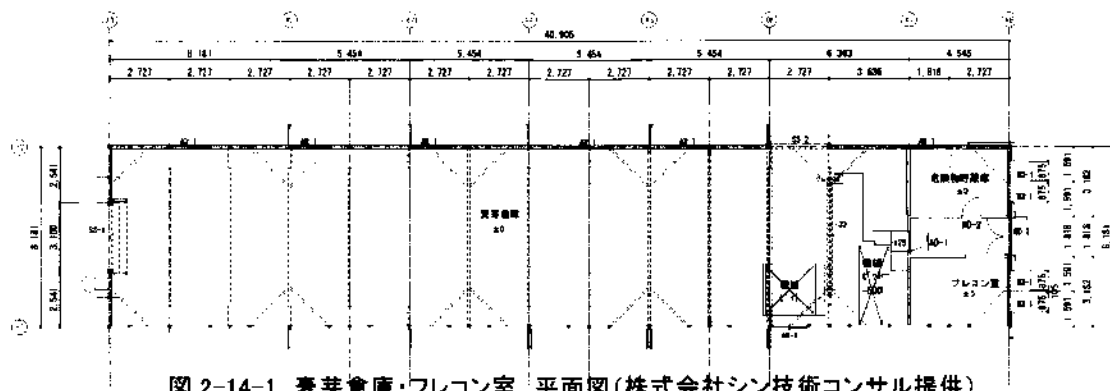


図 2-14-1 麦芽倉庫・フレコン室 平面図(株式会社シン技術コンサル提供)

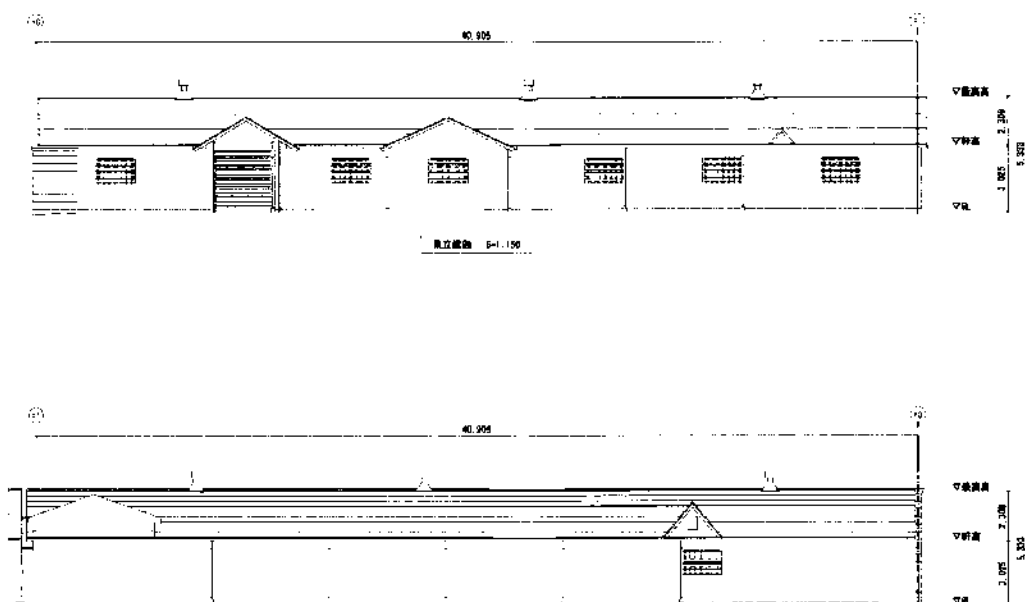


図 2-14-2 麦芽倉庫・フレコン室 立面図 上:東面、下:西面(株式会社シン技術コンサル提供)

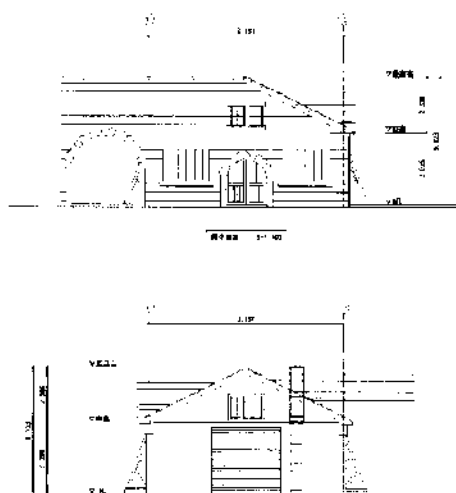


図 2-14-3 麦芽倉庫・フレコン室 立面図
上:南面、下北面 (株式会社シン技術コンサル提供)

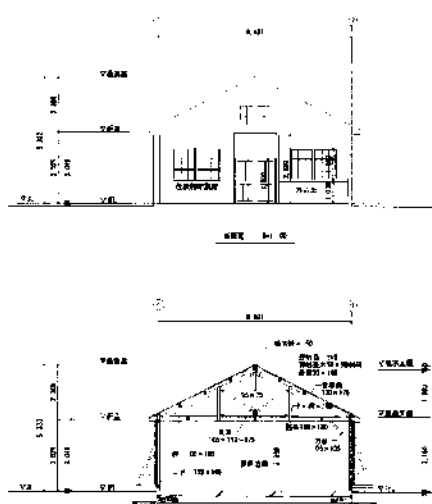


図 2-14-4 麦芽倉庫・フレコン室 断面図
(株式会社シン技術コンサル提供)



写真 2-14-1 麦芽倉庫・フレコン室 南面



写真 2-14-2 麦芽倉庫・フレコン室 東面



写真 2-14-3 麦芽倉庫・フレコン室 南面



写真 2-14-4 麦芽倉庫・フレコン室 北面



写真 2-14-5 麦芽倉庫・フレコン室
内壁構造用合板貼



写真 2-14-6 麦芽倉庫・フレコン室 鉄骨補強

2-15 現場事務所（旧給食室）

当初建物は洋樽工場として1957（昭和32）年建築された（北海道工場資料No.30及び稟議書による）。¹⁹

高さ2尺ほどの玉石基礎・基壇を造成し、その上に間口（梁間）5間（9.09m）、桁行8間（14.54m）。正面（桁行）やや左側に巾1間ほどの出入口を設け右側妻面中央に巾1間ほどの引分戸を設け搬出口とし、外部に傾斜路を設ける（図2-15-1）。

1964（昭和39）年、製樽工場の移転に伴い給食室に用途変更、同年、当初の搬出口側に間口（梁間）4間（7.2m）、奥行（桁行）3間（4.5m）ほどの調理場を設ける（北海道工場所蔵資料 No.59）（図2-15-2）。

洋樽工場時の内装は壁鉄板張、床土間コンクリート、木造軸組、小屋組木造キングポストトラスで天井は小屋組現、外壁モルタル塗り。基礎は当初設計図によれば、木杭地業の上に割栗石を敷き裏込めコンクリート玉石積の上にコンクリート基礎。

現存する給食室は切妻屋根、カラー鉄板葺（6寸勾配）軒高3.1m、最高高5.4m。平入。正面やや左寄りに巾1.81m（1間）ほどの玄関に切妻屋根の小庇を付加する。給食場の内部は壁鉄板張ペンキ塗。天井吸音板張。床はコンクリート土間で、時期は不明であるがビニルタイル張であったと思われる目地跡が確認できる。調理場は、壁・天井はボード張、床はタイル張である。

給食室、調理場と共に、鼻隠を垂直に張り、破風尻もこれに合わせて垂直に切り落とし、軒天井を水平に張る意匠は機械修繕場や他の工場施設・貯蔵庫に共通する意匠である。

外壁は給食室、調理場共にモルタル掃付仕上げ（ドイツ壁）で、機械修繕工場や第二貯蔵庫と共通する意匠である。

当該建物を特徴づける意匠として、先にあげた屋根・外壁のほかに巾1間の半紙判ガラス9入引違窓を外壁全周に一間置きに配置し、室内への採光に配慮している点や欄間付玄関庇などがあげられる。

以上のように、当該建物は、外観は工場全体に見られる統一的な意匠を踏まえつつ、給食室としての機能に配慮した貴重な建造物である。同時に、前記した屋根や外壁仕上の技法は、大正期から昭和30年代頃まで北海道内の洋風住宅・官舎や木造駅舎などに用いられた意匠と類似性をもち、北海道の建築の歩みを考える上でも貴重な建物である。延床面積は、171.86㎡である。

¹⁹ 北海道工場所蔵稟議書 1964（昭和39）年7月10日付、「製樽工場移転工事施工方の件」として、現在の製樽工場は給食室に用途変更なす様とのご指示に付既存の第1樽材乾燥場を移転改築なし製樽工場に用途変更したく度く存じます。とあり、設計書が添えられている。

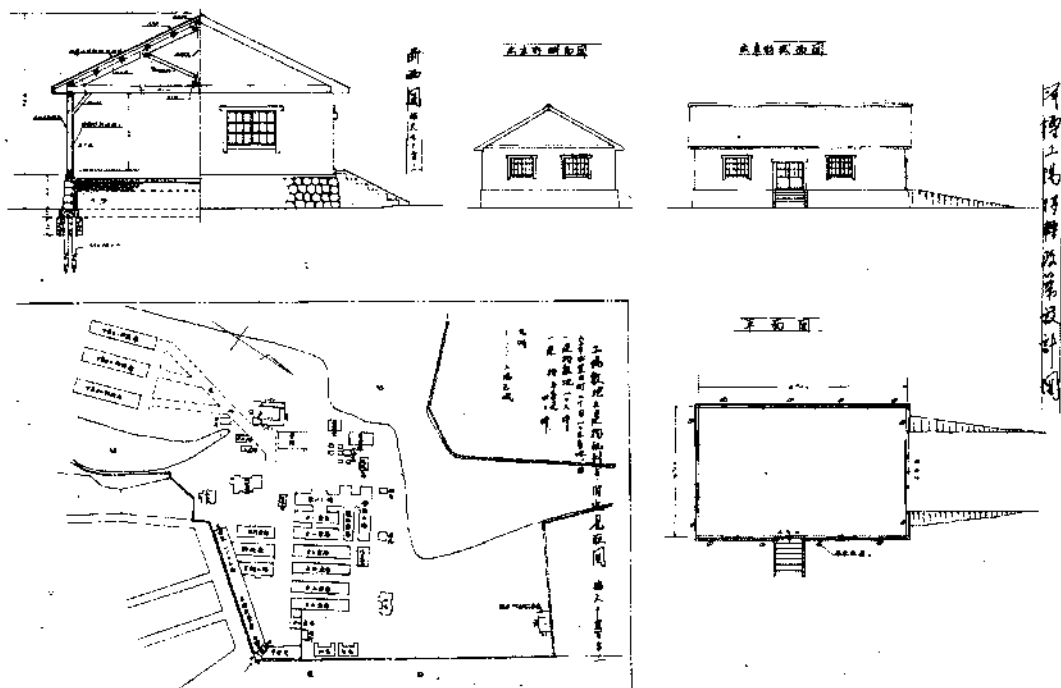


图 2-15-1 『洋樽工場移転改築設計圖』 No.30

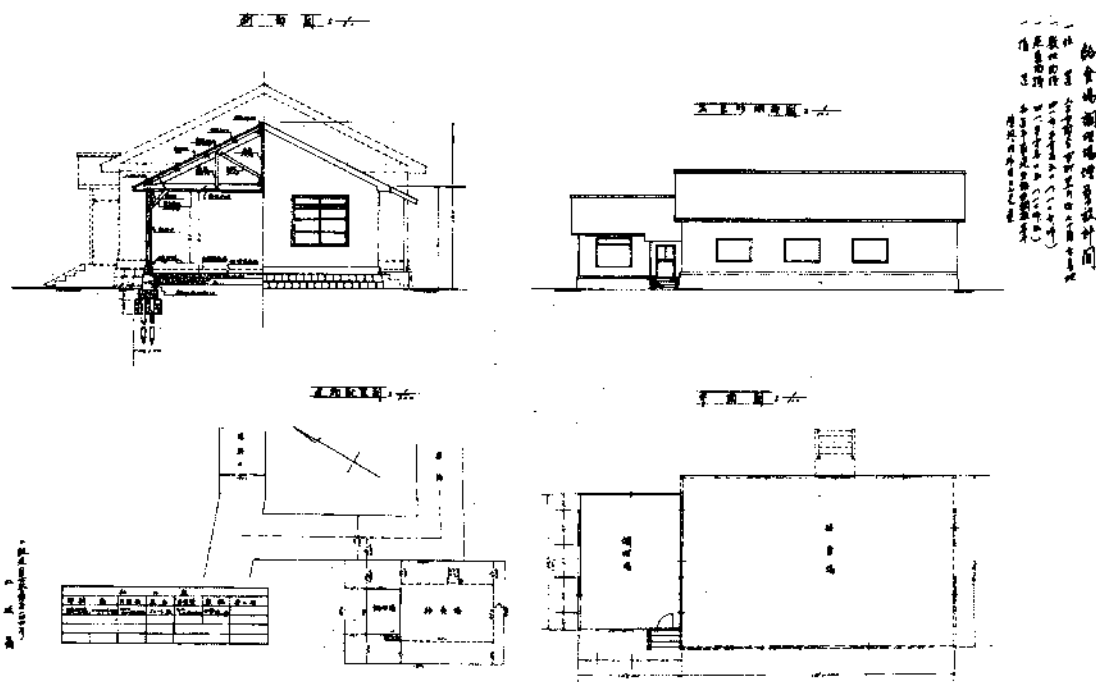


图 2-15-2 『給食場 調理場 増築設計圖』 No.59

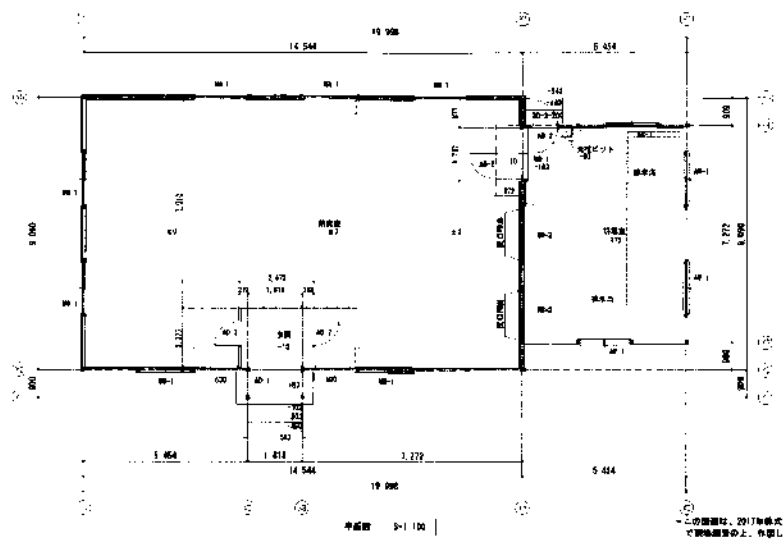


図 2-15-3 給食場 平面図 (株式会社シン技術コンサル提供)

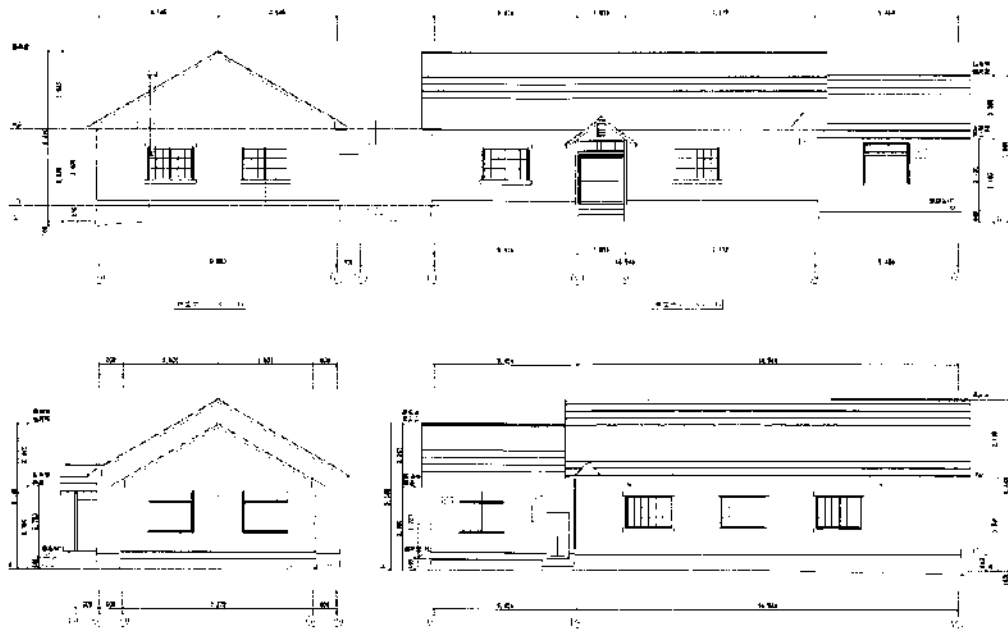


図 2-15-4 給食場 立面図 (株式会社シン技術コンサル提供)

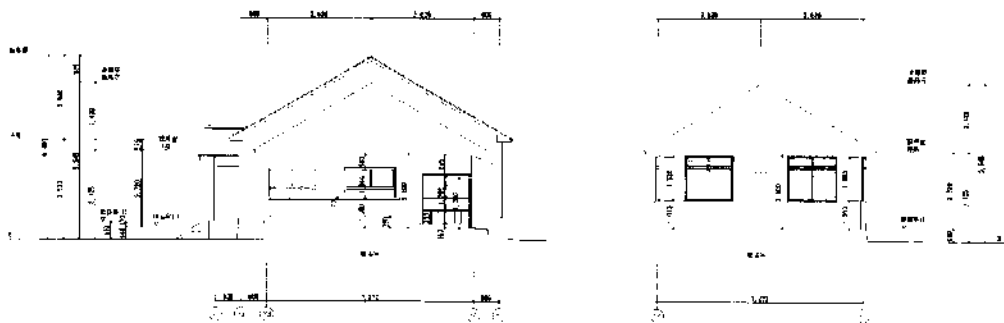


図 2-15-5 給食場 段面図 (株式会社シン技術コンサル提供)



写真 2-15-1 給食場 東面



写真 2-15-2 給食場 西面



写真 2-15-3 給食場 内部



写真 2-15-4 給食場・調理場 内

2-16 連続蒸溜工場

仕込み工場北端に接続する3階建の建物は、間口8.26m、奥行5.63m。1階階高3.62m、2階階高4.04m、3階階高3.43m、軒高11.19m、最高高15.45m。

主体構造は鉄骨造リベット接合。小屋組はL字形鋼を放射状に配置し屋根下地の鋼板を支持している。天井は鋼板張で小屋組現し、床は、1階がコンクリート土間、2階は網目鋼板張、3階はL形鋼枠に鉄筋を小間返の間隔に溶接した簀の子床。

鉄骨をリベットで接合する工法は鉄骨造成立の初期から広く用いられ、1955(昭和30)年代まで鉄骨の接合方法の主流だった工法で、建設年代を知る指標であると同時に貴重な技術遺産といえることができる。

3階建、鉄骨造、方形屋根(1尺4寸勾配)、外壁木片セメント版(ドリゾール板)張の建物で、工場群の中では異質な建物であることは否定できないが、他の工場施設と同系色の外装材を使用し、方形屋根の頂部に小さな尖塔を載せるなど、周囲の工場施設との調和や修景に配慮した建物である。

屋根は方形屋根、カラー鉄板葺。延床面積は、139.75㎡である。

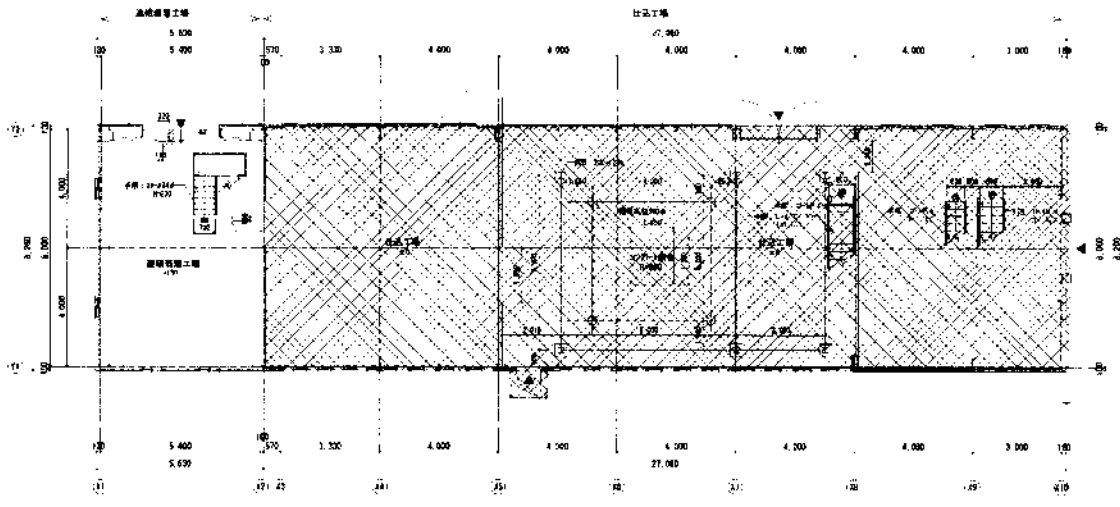


図 2-16-1 連続蒸溜工場 平面図 (株式会社シン技術コンサル提供)

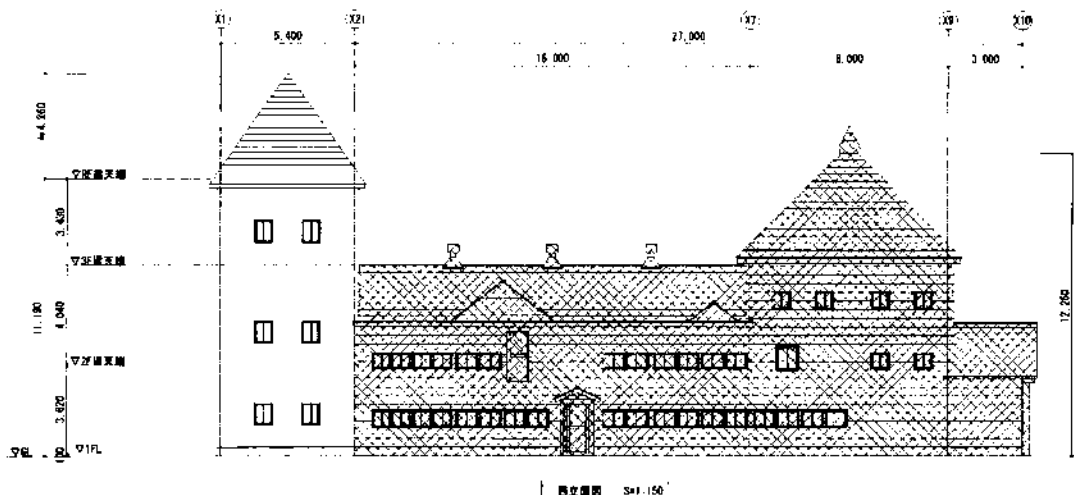


図 2-16-2 連続蒸溜工場 立面図 (株式会社シン技術コンサル提供)

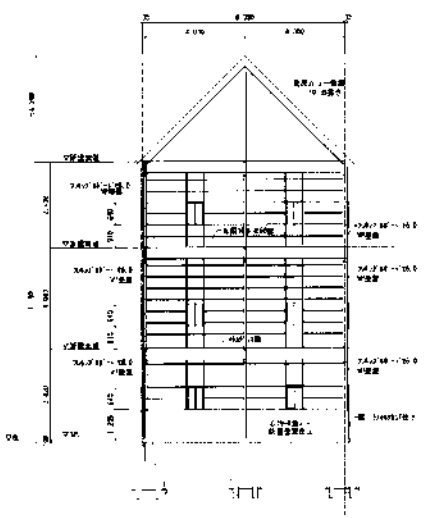


図 2-16-3 連続蒸溜工場 断面図 (株式会社シン技術コンサル提供)



写真 2-16-1 連続蒸溜工場 西面



写真 2-16-2 連続蒸溜工場 北面

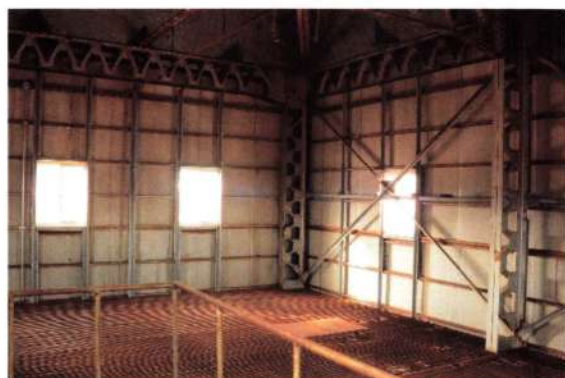


写真 2-16-3 連続蒸溜工場 3階



写真 2-16-4 連続蒸溜工場 屋根小屋組



写真 2-16-5 連続蒸溜工場 屋根小屋組



写真 2-16-6 1階 柱

2-17 醱酵室・濾過室

1960(昭和35)年、(株)日建設計工務北海道事務所の設計で建設。

主要軸組・屋根構造を鉄骨造、外壁廻りを鉄筋コンクリートとする構造で、濾過室と醱酵室の隔壁をコンクリートブロック積としている。基礎は鉄骨柱毎に基礎を設け、地中梁でつなぐ。

鉄骨はリベット接合、外壁は鉄筋コンクリートの外部に凝灰岩張を基本とするが、北西面だけは鉄筋コンクリートの上にモルタル塗で他の外壁に合わせた凝灰岩切石様の目地仕上げとしている。

屋根は切妻屋根カラー鉄板張(4寸勾配)を基本とするが、南東面の妻壁を切り上げる半切妻屋根とし、棟筋に4基の換気塔を設けている。軒高4.4m、最高高8.95m。

内部は、壁はモルタル金鏝仕上げペンキ塗。床はコンクリート土間、タイル張、樹脂塗床。天井はフレキシブルボード張ペンキ塗・鉄骨現し。

当該建物の特徴の一つとして、一見凝灰岩積の石造を思わせる外壁に穿たれた大きな窓の連なりが挙げられ、周辺の工場群の景観への調和を図りつつ、工場内への採光を確保している。

鉄骨をリベットで接合する工法は鉄骨造成立の初期から用いられ、昭和30年代まで鉄骨の接合方法の主流だった工法で、同時に鉄筋コンクリート壁との混構造するなど、建設年代の背景を知る指標となると同時に貴重な技術遺産といえることができる。同時に、昭和30年代における鉄骨とコンクリートさらには凝灰岩が融合した特徴的な建物といえることができる。延床面積は、852.02㎡である。



図 2-17-1 醱酵室・濾過室 設計図 北海道日建設計 1960(昭和35)年

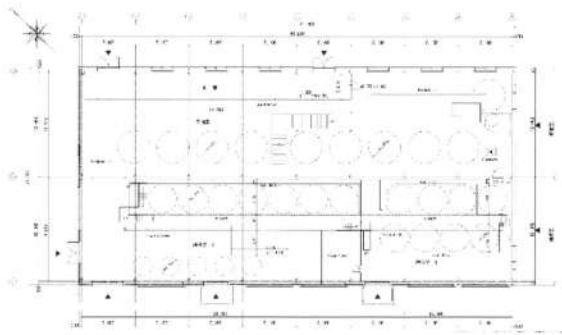


図 2-17-2 醗酵室・濾過室 平面図

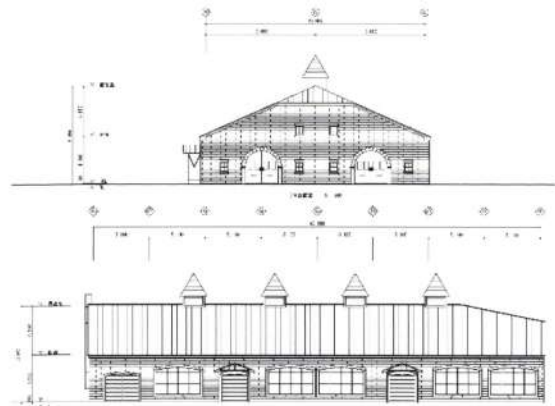


図 2-17-3 立面図 上:南面 下:西面

(株式会社シン技術コンサル提供)

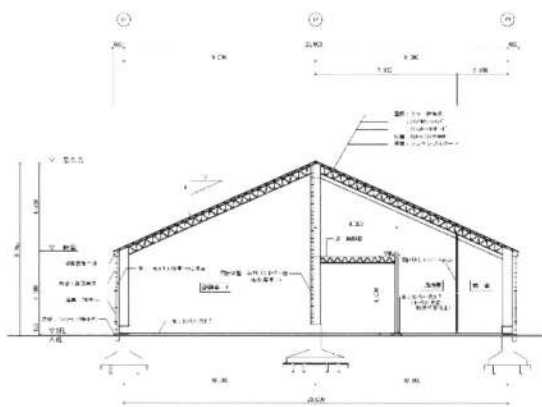


図 2-17-4 醗酵室・濾過室 断面図 (株式会社シン技術コンサル提供)



写真 2-17-1 醗酵室・濾過室 西面



写真 2-17-2 醗酵室・濾過室 北面



写真 2-17-3 醱酵室・濾過室 西面

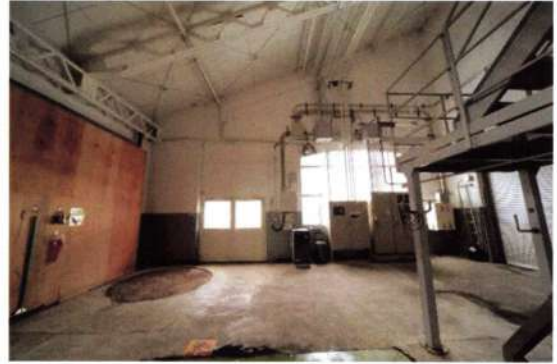


写真 2-17-4 醱酵室・濾過室 室内



写真 2-17-5 醱酵室・濾過室 室内



写真 2-17-6 醱酵室・濾過室 室内

2-18 製樽工場

ウイスキー原酒等の貯蔵用樽の製造、補修を行う施設。

1964(昭和39)年7月の稟議書資料には『製樽工場移転工事施工の件』の件名で完成期日同年8月10日とし、15節で述べた製樽工場の給食室への用途変更と共に既設の第1樽材乾燥場を移築改築し製樽工場へ用途変更する旨の記述があり、設計書(積算書)・配置図が添付される。設計書中には「建物引舞(曳家:筆者註) 建物長十間 巾四間半」の記述が確認でき、北海道工場資料『中島第 貯蔵庫及び樽材乾燥場建築設計図』No.27(図1-18-1)に描かれる樽材乾燥場の規模と一致する。

現状建物は切妻屋根(5寸勾配)・片流屋根(3.5寸勾配)、カラー鉄板葺。軒高3.65m、最高高5.8m、間口(梁間)6.5間(11.83m)、桁行16間(29.12m)の建物で、西側の梁間4間半(8.19m)の小屋組はキングポストトラス(5寸勾配)で、東側に片流れ屋根で梁間2間(3.63m)程の大梁東立の和小屋を付加している。キングポストトラスと和小屋の接続する桁筋には背の高い桁を通し、ほぼ2間(3.63m)間隔で柱が並立しているが、東側桁行の柱配置との同調性は明確でない。

一方、1984(昭和59)年11月付確認通知書の添付平面図(図1-18-2)では、間口6.5間、桁行10間の南側既存建物の北側に同間口で桁行6間の増築建物が描かれ、現状の東側片流れ屋根と同仕様の矩計も描かれている。現状小屋組を観察して、添付設計図において既存建築と記される南側桁行10間と北側桁行6間の小屋組には木部材や金具に明らかな新旧の差異が確認できる。

以上のように、資料や現状調査を踏まえると、現製樽工場は1964(昭和39)年第1樽材乾燥場を現位置に曳家によって移築し、同時期あるいは直後に東側へ片流れ部分を増築。その後、1984(昭和59)年に既設建物の形式に合わせて桁行6間の増築を行ったと考えられる。

さらに1987(昭和62)年には東側に鉄骨造の作業場を増築し、渡り廊下で接続する。開口部の配置などを見ても、南妻面・西面のシャッター廻りなどは改造による柱配置の変更が読み取れ、現状の床はコンクリート金コテ仕上でステンレス製のグレーチングが埋め込まれているなど近年の改修と考えられ、前記した1987(昭和62)年の増築の際の改修とも考えられる。

以上のように、製樽工場は1964(昭和39)年の移築以来、数次の改造・改修を経ていると考えられるが、外壁モルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)、軒先の意匠、欄間付き木製半紙判ガラス窓などは当初のものを保持していると考えられ、他の施設と同様に景観に配慮した意匠を踏襲していること、ウイスキー醸造に欠かすことができない原酒貯蔵樽の製造や補修を担う施設という意味からも貴重な存在である。延床面積は、344.48㎡である。

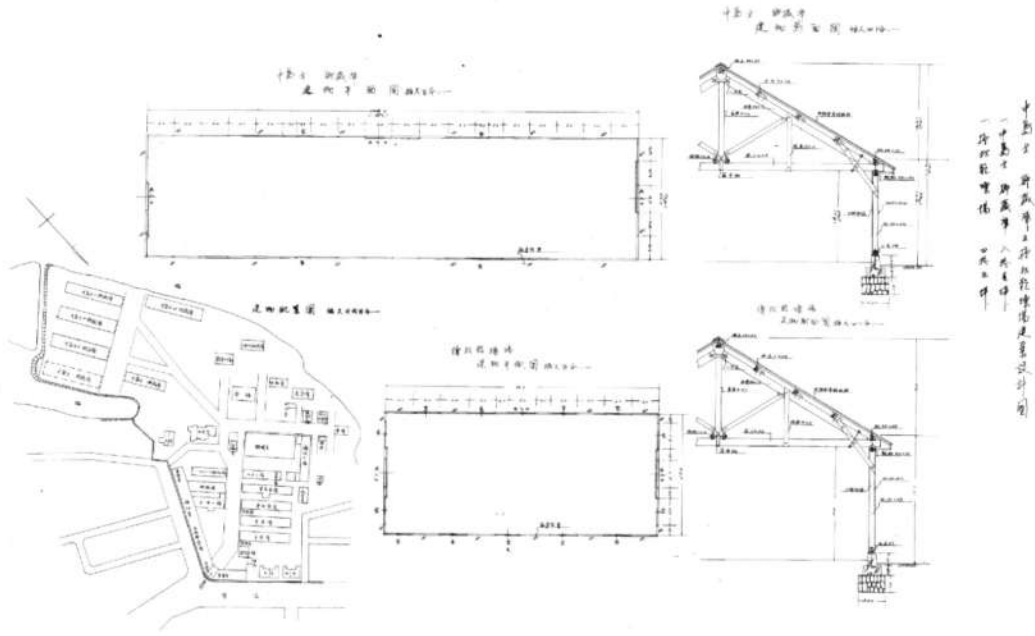


图 2-18-1 『中島第 貯蔵庫及樽材乾燥場建物設計図』 No.27

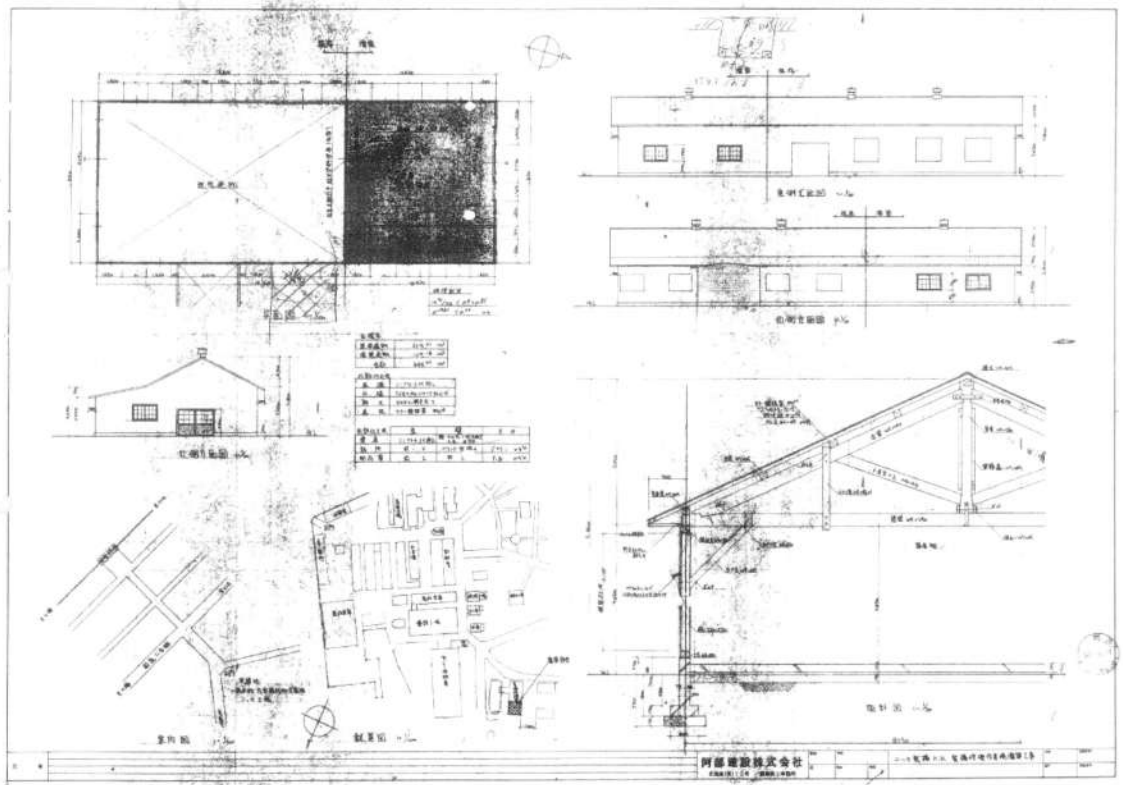


图 2-18-2 製樽工場増築設計図 1989(昭和 61)年

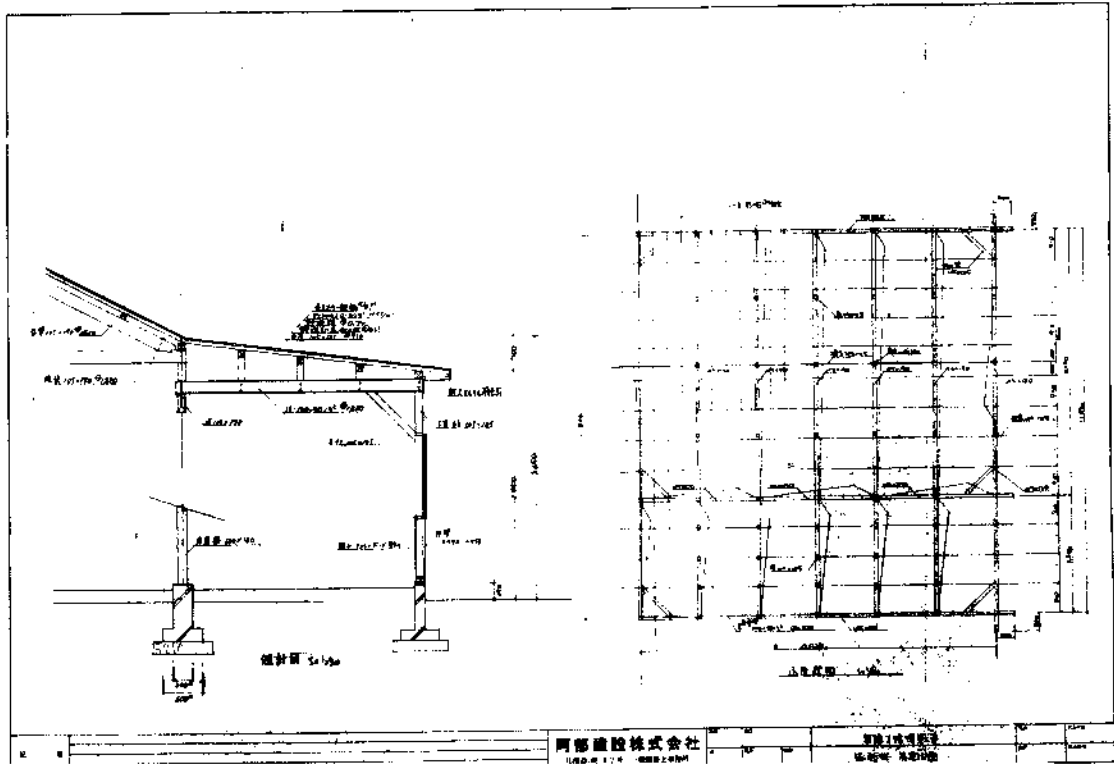


図 2-18-3 製樽工場増築設計図 1989(昭和 61)年

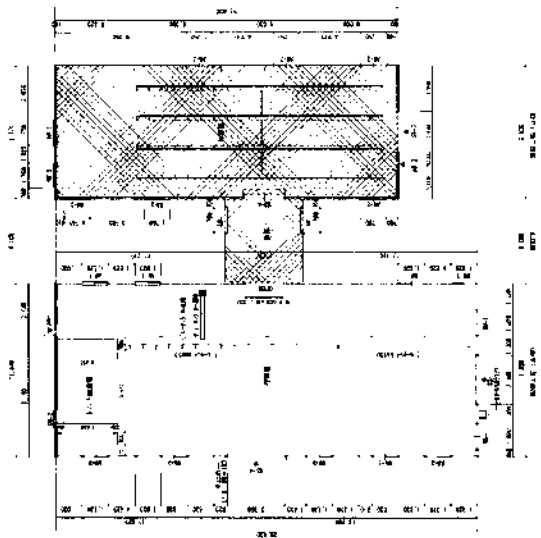


図 2-18-4 製樽工場 平面図

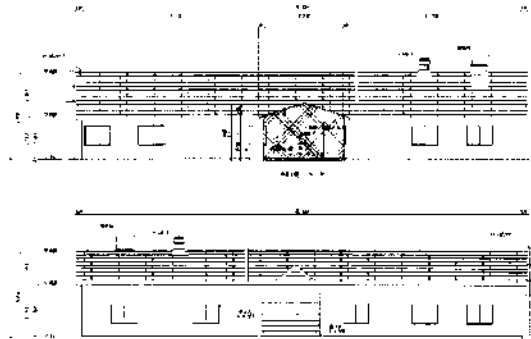


図 2-18-5 製樽工場 立面図

(いずれも株式会社シン技術コンサル提供) (網掛けは対象外)

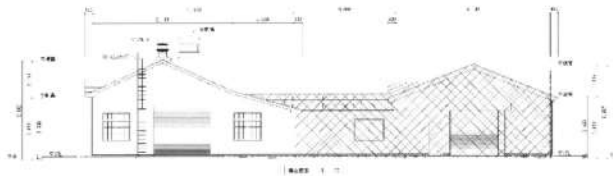


図 2-18-6 製樽工場 立面図



図 2-18-7 製樽工場 断面図

(いずれも株式会社シン技術コンサル提供)



写真 2-18-1 南面



写真 2-18-2 南西面



写真 2-18-3 東面



写真 2-18-4 西面



写真 2-18-5 手前の小屋組が移築部材



写真 2-18-6 奥側の小屋組が増築部分

2-19 アーチ壁

麦芽倉庫・フレコン室～仕込工場間の通路及び仕込工場と醗酵室・濾過室間の通路南面に設けられた凝灰岩積の壁とアーチ。

麦芽倉庫フレコン室と仕込工場間の南面は、通路を含めてあたかも一体の建物であるかのように外壁が連続した凝灰岩積となっている。壁は両建物の棟高から水平に連続して設けられ、外観上、違和感を与えないと同時にバックヤード領域とを穏やかに遮蔽区画し、巾2.81m、最高高2.98mの作業用通路として大きな開口部を確保している。

開口部は胸高まで凝灰岩の石柱を両側に建て、上部に駒形の迫石をアーチ状に積み上げる形式で、両隣の麦芽倉庫・フレコン室や仕込工場の出入口に設けたアーチばかりでなく北海道工場の施設全体の開口部の意匠と共通すると同時に、北海道工場の中でも最大規模のアーチである。

仕込工場と醗酵室・濾過室の南面も同様に景観を損なわない意図を持った凝灰岩積みのアーチ壁になっているが、麦芽倉庫・フレコン室～仕込工場間の一体化した壁とは異なり、仕込工場の軒高を基準に壁を設け、中央のアーチ開口部分を台形上に1mほどかさ上げし、前記した麦芽倉庫・フレコン室と仕込工場間のアーチとほぼ同規模、同意匠のアーチを設けている。この形式の違いは、麦芽倉庫・フレコン室・仕込工場の場合、棟高がほぼ同一であったために一体の壁体とすることが可能だったのに対して、仕込工場と醗酵室・濾過室の棟高が大きく異なり一体の壁体とすることが困難だったことによると考えられるが、麦芽倉庫から醗酵室・濾過室の外観を整えるばかりでなく、正門から続くいわばメインストリートの景観を良質なものに行っているという意味でも重要な存在である。

麦芽倉庫・フレコン室～仕込工場間のアーチ壁は、奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー大麦乾燥工場右と蒸溜工場左 北海道余市町 昭和18年7月」に描かれていることから1942(昭和17)年頃には建設されていたと考えられる。一方、仕込工場と醗酵室・濾過室間のアーチ壁は描かれておらず他に建設時期を示唆する資料も見いだせないが、石材や工法を検討すると前記した建設年に余り遅れない1949(昭和24)年頃の建設と考えられる。

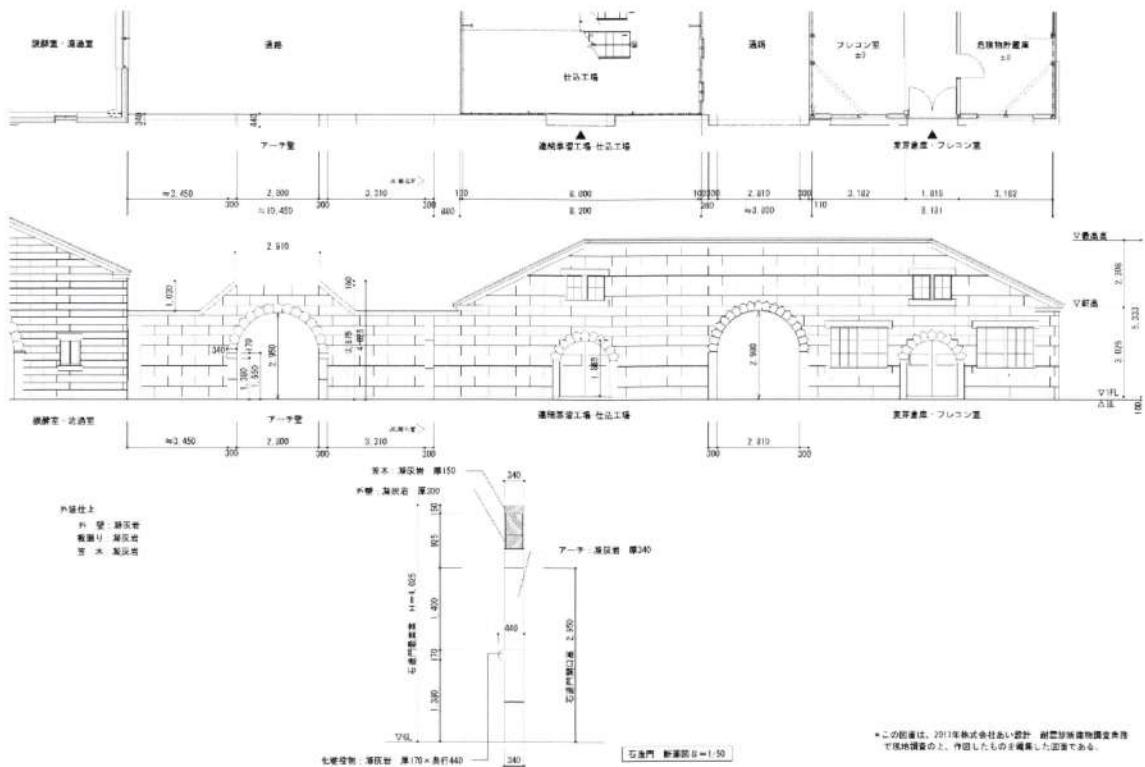


図 2-19-1 アーチ壁 立面図・平面図 (株式会社シン技術コンサル提供)



写真 2-19-1 濾過室・仕込工場と醱酵室間のアーチ*



写真 2-19-2 同左 裏面*



写真 2-19-3 麦芽倉庫～仕込工場間のアーチ*



写真 2-19-4 同左*



写真 2-19-5 アーチ壁全景* 右:麦芽倉庫～仕込工場のアーチ 左:醱酵室・濾過室～仕込工場のアーチ



写真 2-19-6 醱酵室・濾過室～仕込工場のアーチ*

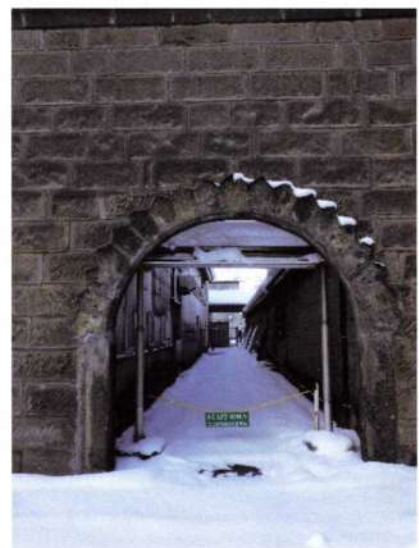


写真 2-19-7 麦芽倉庫～仕込工場のアーチ*

2-20 石造裏門

建設年代を示す資料は少ないが、奥山儀八郎版画「大日本果汁株式会社正門 北海道余市 昭和18年7月」では、ニッカウキスキー(株)北海道工場の正門外観の左端に特徴的なアーチと門柱を持った裏門が描かれ、1942(昭和17)年頃の建設と考えられる。

裏門には凝灰岩積の2つの門が設けられ、南面(工場敷地外の道路側)から見て、左側にアーチ門、右側には両袖に門柱を持った門が設けられている。

左側のアーチ門は巾1.85m、アーチ高1.7mほどで工場内施設に設けられるアーチ開口部と類似する形式で、胸高ほどまで石柱を建て上部に迫受石を置きその上にアーチを置くが、工場内施設のそれと比べてアーチのカーブは扁平で迫石は台形、アーチの上部に二重の笠木を載せている。アーチのカーブ全体が扁平で、頂点付近のカーブがとりわけ緩いことが特徴的で、3中心アーチ(basket arch)あるいは上部の笠木と合わせて観察すると中国の庭園や伝統的な邸宅建築に見られる石積門や社寺建築の向拝などに見られる唐破風屋根の曲線を想起させる意匠である。

向かって右側の門は、門柱の幅90cm角、高さ1.8mほどで1対で建つ。石幅が不規則な切石乱積で積まれ、鉄製の両開扉を設けている。

石造裏門の建設経緯については不明な点も多いが、建設当時には旧研究室、役員社宅などが石造裏門近傍の工場敷地内に所在していたことなどから、職員の通用門及び資材搬入口として利用されたものと考えられる。

工場全体に残る施設の中でも創建初期の建設と考えられ、ニッカウキスキー(株)北海道工場の初期の姿を伝える貴重な建造物といえる。

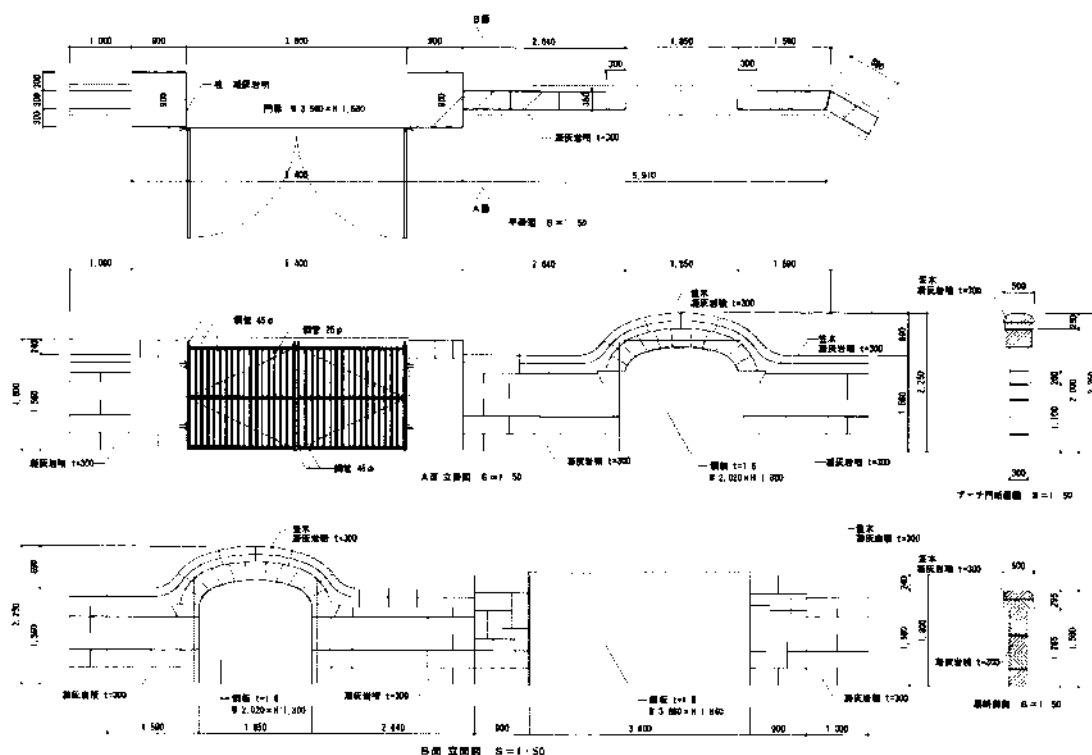


図 2-20-1 石造裏門 立面図・平面図 (株式会社シン技術コンサル提供)



写真 2-20-1 裏門 アーチ門*



写真 2-20-2 裏門 アーチ門*



写真 2-20-3 裏門*



写真 2-20-4 裏門*

2-2 1 調査記録票

物件番号	1-1	
現名称・建物用途	事務所棟：北棟	
旧名称・建物用途	表事務所	
竣工年	<ul style="list-style-type: none"> ・1942(昭和17)年頃(北海道工場所蔵稟議書No.87・91から推定)(登録有形文化財記載は、1940(昭和15)年頃)。 ・1943(昭和18)年3月(旧固定資産台帳記載)。 ・1949(昭和24)年7月(建物管理台帳記載)。 ・奥山儀八郎版画「大日本果汁株式会社正門 北海道余市 昭和18年7月」で描写。 	
竣工時の設計者	土岐喬(元ニッカ職員、1925(昭和14)～1958(同33)年)・工営部	
施工者	ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部	
増改築年	<ul style="list-style-type: none"> ・増築Ⅰ期：1963(昭和38)年。Ⅱ期：1968(昭和43)年。 ・耐震改修Ⅰ期：2011(平成23)年。Ⅱ期：2012(平成24)年 	
増改築の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・増築：Ⅰ・Ⅱ期通して外壁軸組・小屋組などは当初構造を踏襲。内部はⅠ期では更衣室、便所などの増築。Ⅱ期ではホールなどの増築。(Ⅰ期：設計、土岐建築士事務所。施工、阿部建設。Ⅱ期、設計施工、阿部建設) ・耐震改修：当初の木骨の軸組・軸組、外壁石積を踏襲しつつ、木骨軸組・小屋組の補強。外壁石積内面の炭素繊維シート貼、鉄骨柱・梁、地中梁などによる耐震補強を実施。耐震補強に合わせて内装の改修実施(床：塩ビシート他、壁：石膏ボードの上ビニールクロス張。天井：吸音板等。耐震改修については、設計、施工共大林組) 	
当初設計図書の有無		
建物概要	建築面積	471.02 m ² (当初：226.05 m ² 。増築Ⅰ期：70.34 m ² 。Ⅱ期：174.62 m ² (事務所棟合計：1,339.44 m ²)
	延床面積	471.02 m ² (事務所棟合計：1,418.78 m ²)
	階数	1
	構造	当初：木骨石造(外壁凝灰岩積)。小屋組：当初小屋組はキングポストラス。

	増築：Ⅰ期・Ⅱ期増築時の妻側（北側）端部は和小屋（梁、束建）。 耐震改修：前記「増改築の内容」による。
外部仕上	屋根：切妻屋根（一部越屋根設置）、カラー鉄板葺。 外壁：凝灰岩石積（木骨石造）
内部仕上	改修後：床、長尺ビニールシート貼、パイル状床材等。壁、石膏ボードの上ビニールクロス貼。天井、吸音板貼、他
その他	
総合的な建築的・ 歴史的評価	<p>切妻屋根（当初は北端は寄棟屋根、カラー鉄板葺を基本とし、正門から約 30mに渡って外観上明り採り窓に見える小屋根を設ける。</p> <p>2期にわたる増築や耐震改修により内装はほぼ全面的に改修されているが、当初の木造軸組・小屋組は良好に保存されている。</p> <p>外壁は、増築・耐震改修にあっても当初の状態が良好に保存されている。外壁は基本的に凝灰岩積であるが、根石（土台石）や窓楣（まぐさ）、窓台などにはより良質な凝灰岩を使用し、外観を引き締めている。</p> <p>耐震改修時に凝灰岩積の事務所主玄関を設けている。</p> <p>当該建物は、工場施設の建設初期の遺構であると同時に、工場敷地内全体に見られる統一的な意匠の規範となる建物である。同時に数度の増築、改修においてもその基本的意匠を堅持しているという意味でも貴重な存在である。</p>

物件番号	1-2	
現名称・建物用途	事務所棟：正門・貴賓室	
旧名称・建物用途	正門・貴賓室	
竣工年	<ul style="list-style-type: none"> ・1942(昭和17)年頃(北海道工場所蔵稟議書No.87・91から推定) (登録有形文化財記載は、1940(昭和15)年頃)。 ・1943(昭和18)年3月(旧固定資産台帳記載)。 ・奥山儀八郎版画「大日本果汁株式会社正門 北海道余市 昭和18年7月」で描写。 	
竣工時の設計者	土岐喬(元ニッカ職員、1925(昭和14)～1958(同33)年)・工営部	
施工者	ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部	
増改築年	耐震改修：2007(平成19)年。	
増改築の内容	<p>耐震改修：地盤改良の上、鉄筋コンクリート基礎を新設。</p> <p>1階正門部分については既設の凝灰岩柱型の一部を撤去し、鉄筋コンクリート柱を新設後、外観を凝灰岩貼に復旧。</p> <p>2階貴賓室は鉄筋コンクリート柱の新設後、内装を当初仕様に復旧。</p>	
当初設計図書の有無		
建物概要	建築面積	70.50 m ²
	延床面積	149.84 m ²
	階数	2
	構造	<p>正門・貴賓室：積石造(凝灰岩積)</p> <p>階段室：木骨石造(凝灰岩積)</p> <p>小屋組：木造キングポストトラス鉄骨梁補強。和小屋鉄骨梁補強。</p>
	外部仕上	<p>屋根：カラー鉄板葺</p> <p>外壁：凝灰岩積</p> <p>基礎：凝灰岩積</p>
内部仕上	<ul style="list-style-type: none"> ・正門：壁、凝灰岩積。天井、羽目板張。 ・貴賓室：床、板張、壁・天井、漆喰仕上、化粧梁等 	

	その他	
	総合的な建築的・ 歴史的評価	<p>当該施設を象徴する建物で、外観的には1階の大きなアーチとヨーロッパ中世の城に見られる屋上の狭間胸壁が特徴的である。2007(平成 19)年に耐震改修を行ったが当初の外観、内装も良好に維持されている。</p> <p>当該建物は、工場施設の建設初期の遺構であると同時に、施設群の中心を成す建築であると同時に工場敷地内全体に見られる統一的な意匠の規範となり、工場群の景観を守るうえでも重要な建物である。</p>

物件番号	1-3	
現名称・建物用途	事務所棟：南棟（受付、見学者待合室、トイレ、石炭倉庫、蒸溜棟A棟、アルコールタンク室、倉庫）	
旧名称・建物用途	守衛室・玄関新倉庫・ブドー倉庫	
竣工年	<ul style="list-style-type: none"> ・1942(昭和17)年頃（北海道工場所蔵稟議書No.87・91 から推定）（登録有形文化財記載は昭和15年頃）。 ・1943(昭和18)年3月（旧固定資産台帳記載）。 ・奥山儀八郎版画「大日本果汁株式会社正門 北海道余市 昭和18年7月」で描写 	
竣工時の設計者	土岐喬（元ニッカ職員、1925(昭和14)～1958(同33)年）・工営部	
施工者	ニッカウヰスキー(株)北海道工場工営部	
増改築年	耐震改修・改築：Ⅰ期、平成21年、Ⅱ期、平成22年	
増改築の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・現在の守衛室、控室、見学者待合室、トイレ、倉庫、蒸溜棟A棟、アルコールタンク室、倉庫部分。 ・初期の配置図では、正門側から南へ守衛室、玄関新倉庫、ブドー工場或いは混和室・変電室と表記する図面がある。 <p>改修の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1961(昭和36)年、ブドー工場の一部を蒸溜棟A棟に改築。 ・Ⅰ期：当初の守衛室部分を守衛室・控室・受付などに改修。当初の玄関新倉庫などの一部分を見学者待合室に改修等。 ・Ⅱ期：残余の倉庫等の部分をトイレ、倉庫に改修。 ・耐震改修 <p>当初の木骨の軸組・軸組、外壁石積を踏襲しつつ、木骨軸組・小屋組の補強。外壁石積内面の炭素繊維シート貼、鉄骨柱・梁、地中梁などによる耐震補強を実施。耐震補強に合わせて内装の改修実施。（耐震改修については、設計、施工共大林組）</p>	
当初設計図書の有無	有	
建物概	建築面積	797.92 m ²
	延床面積	797.92 m ²

	階数	1
	構造	木骨石造（凝灰岩積）、鉄骨造 小屋組：キングポストトラス、鉄骨梁補強。和小屋、鉄骨梁補強。
	外部仕上	屋根：切妻屋根、カラー鉄板葺 外壁：凝灰岩積 基礎：凝灰岩積
	内部仕上	耐震改修に伴い石膏ボード下地、ビニールクロス張り等に変更。
	その他	
総合的な建築的・ 歴史的評価	<p>切妻屋根、カラー鉄板葺を基本とし、正門寄り約6mほどの位置から蒸溜棟A棟に渡って外観上明り採り窓の小屋根を設ける。この内、正門側11m程は、事務所棟・北棟の小屋根と同様の外観とし、以降は一段低い小屋根になっている。改築や耐震改修により内装はほぼ全面的に改修されているが、当初の木造軸組・小屋組は良好に保存されている。</p> <p>外壁は、増築・耐震改修にあっても当初の状態が良好に保存されている。外壁は基本的に凝灰岩積であるが、根石（土台石）や窓楣（まぐさ）、窓台などにはより良質な凝灰岩を使用し、外観を引き締めている。</p> <p>耐震改修時に凝灰岩石積の出入口3か所を設けている。</p> <p>当該建物は、工場施設の建設初期の遺構であると同時に、工場敷地内全体に見られる統一的な意匠の規範となる建物である。同時に数度の増築、改修においてもその基本的意匠を堅持しているという意味でも貴重な存在である。</p>	

物件番号	2	
現名称・建物用途	工場（蒸溜工場B・C棟）	
旧名称・建物用途	蒸溜棟	
竣工年	<ul style="list-style-type: none"> ・1935(昭和10)年頃。 ・1936(昭和11)年3月（旧固定資産台帳記載）。 ・奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー大麦乾燥工場右と蒸溜工場左 北海道余市町 昭和18年7月」で描写。 	
竣工時の設計者	土岐喬(元ニッカ職員、1925(昭和14)～1958(同33)年)・工営部	
施工者	ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部	
増改築年	1961(昭和36)、1964(昭和39)、1966(昭和41)年増改築。	
増改築の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・1964(昭和39)年、現蒸溜工場C棟部分を改修増築。1966(昭和41)年、現蒸溜工場B棟部分を改修増築。 ・改修の概要：当初の木骨軸組・小屋組みを鉄骨造、一部鉄筋コンクリート壁などに改修、地中梁などによる補強 	
当初設計図書の有無		
建物概要	建築面積	269.12 m ²
	延床面積	269.12 m ²
	階数	1
	構造	当初：木骨石造（凝灰岩積）小屋組：キングポストトラス、改修：木造軸組・小屋組補強、鉄骨梁補強。外壁凝灰岩積。
	外部仕上	屋根：B棟、切妻屋根、C棟、寄棟屋根、明り取り屋根付。カラ一鉄板葺 外壁：凝灰岩積 基礎：凝灰岩積
	内部仕上	床：コンクリート金コテ仕上げ、壁コンクリートペンキ塗り。天井：小屋組現
その他		

<p>総合的な建築的・ 歴史的評価</p>	<p>正門から続く広場の南に位置し、石炭焚きの蒸溜器 5 基を設置する。外壁は江戸切仕上げの凝灰岩で、アーチ状の戸口と楣付の回転窓を開く。カラー鉄板葺屋根の棟上に明かり塔を設ける。改修に当たっては蒸溜器を大型化するために軒高を高くし、小屋組みを鉄骨造としている。</p> <p>工場の中核施設であり、外観も当初の凝灰岩積の外壁が残り、見学者棟及び貯蔵庫との統一性を保っている。</p> <p>当該建物は、工場敷地内全体に見られる統一的な意匠を踏襲する建物である。</p>
---------------------------	---

物件番号	3	
現名称・建物用途	蒸溜液受タンク室	
旧名称・建物用途	貯蔵棟	
竣工年	<ul style="list-style-type: none"> ・1935(昭和10)年頃。 ・1936(昭和11)年3月(旧固定資産台帳記載)。 ・奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー大麦乾燥工場右と蒸溜工場左 北海道余市町 昭和18年7月」で描写。 	
竣工時の設計者	土岐喬(元ニッカ職員、1925(昭和14)～1958(同33)年)・工営部	
施工者	ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部	
増改築年	1966(昭和41)年改修。	
増改築の内容	当初からの木造軸組、小屋組トラスの梁等を方杖、補強金物などで補強	
当初設計図書の有無	有	
建物概要	建築面積	250.01 m ²
	延床面積	250.01 m ²
	階数	1
	構造	当初：木骨石造(凝灰岩積) 小屋組：キングポストトラス、 改修：木造軸組・小屋組補強、鉄骨梁補強。
	外部仕上	切妻屋根、一部寄棟屋根、カラー鉄板葺 外壁：凝灰岩積 基礎：凝灰岩積
	内部仕上	床：モルタルコテ仕上、壁：モルタルペンキ塗。天井：小屋組現
	その他	

<p>総合的な建築的・ 歴史的評価</p>	<p>蒸溜棟の西に並ぶ。木骨石造の平屋建倉庫として建設され、現在は蒸溜液受タンク室となっている。屋根は切妻屋根一部寄棟) カラー鉄板葺で、西妻面にアーチ形戸口を開け、妻壁北側を立ち上げて蒸溜棟と連続させることで一体の景観をつくる。当該建物は、工場構内全体に見られる統一的な意匠を踏襲する建物である。</p>
---------------------------	---

物件番号	4	
現名称・建物用途	展示室・混和室	
旧名称・建物用途	リキュール工場	
竣工年	<ul style="list-style-type: none"> ・1939(昭和14)年頃。 ・1940(昭和15)年3月(旧固定資産台帳記載) 	
竣工時の設計者	土岐喬(元ニッカ職員、1925(昭和14)～1958(同33)年)・工営部	
施工者	ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部	
増改築年	1967(昭和42)年改修、増築	
増改築の内容	当初からの木骨石造平屋建(間口4.5間、奥行15間)の南側に鉄骨造の混和工場棟を増築	
当初設計図書の有無		
建 物 概 要	建築面積	225.36 m ² (※1967(昭和42)年、増築分含まず)
	延床面積	225.36 m ²
	階数	1
	構造	当初：木骨石造(凝灰岩積)小屋組：キングポストトラス、 改修：木造軸組・小屋組補強、鉄骨梁補強。
	外部仕上	切妻屋根、棟頂部に明り取り屋根、カラー鉄板葺 外壁：凝灰岩積 基礎：凝灰岩積
	内部仕上	床：モルタルコテ仕上、壁：羽目板張。天井：小屋組現
	その他	

<p>総合的な建築的・ 歴史的評価</p>	<p>貯蔵棟の西に並ぶ木骨石造の平屋建で、間口4間半、奥行15間。屋根は切妻造、カラー鉄板葺で、明り取り屋根を設ける。小屋組は木造トラスである。外壁は江戸切の凝灰岩で、軒蛇腹は妻に廻った位置で止める。アーチ型の出入口には引分の木製扉を立て込む。</p> <p>当該建物は、工場敷地内全体に見られる統一的な意匠を踏襲する建物である。</p>
---------------------------	---

物件番号	5	
現名称・建物用途	工場（第1麦芽乾燥室）、書庫（第1麦芽倉庫）、第2製品倉庫	
旧名称・建物用途	第一乾燥塔	
竣工年	<ul style="list-style-type: none"> ・1940(昭和15)年頃。 ・1941(昭和16)年3月（旧固定資産台帳記載）。 ・奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー大麦乾燥工場右と蒸溜工場左 北海道余市町 昭和18年7月」で描写。 	
竣工時の設計者	土岐喬(元ニッカ職員、1925(昭和14)～1958(同33)年)・工営部	
施工者	ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部	
増改築年	2012(平成24)年、耐震改修（設計施工：大林組）	
増改築の内容	乾燥塔を中心に外壁炭素繊維シート貼、鉄骨軸組・梁、鉄筋コンクリート地中梁等により補強。第2製品倉庫については、一部鉄骨補強、木造軸組・小屋組補強、壁構造用合板貼。	
当初設計図書の有無		
建物概要	建築面積	434.31 m ²
	延床面積	477.71 m ²
	階数	2
	構造	当初：木骨石造（凝灰岩積）小屋組：キングポストトラス、改修：木造軸組・小屋組補強、鉄骨梁等補強。
	外部仕上	寄棟屋根、方形屋根、葺降屋根、切妻屋根、カラー鉄板葺 外壁：凝灰岩積 基礎：凝灰岩積
	内部仕上	床：モルタルコテ仕上、天井：小屋組現
	その他	

<p>総合的な建築的・ 歴史的評価</p>	<p>第二乾燥塔とともに正門広場における景観の核となっている建物。第二乾燥塔と同形式で、正面に3箇所のアーチ形開口を見せる。中央部が乾燥塔で、寄棟屋根の中央を立ち上げ、換気塔とする。乾燥塔の東西は倉庫で、西側倉庫は北背後に延び、第二乾燥塔と対称形を成している。小屋組は当初は木造トラス。</p> <p>昭和10年代後半の工場の趣を現在によく伝えていると同時に、本工場施設のランドマークとしてシンボリックな存在でもあり、さらに製品製造ラインの重要な役割を担う施設として貴重である。</p>
---------------------------	---

物件番号	6	
現名称・建物用途	工場（第2 麦芽乾燥室）、倉庫（資材倉庫）、第3 製品倉庫	
旧名称・建物用途	第二乾燥塔	
竣工年	<ul style="list-style-type: none"> ・1940(昭和15)年頃。 ・1941(昭和16)年3月（旧固定資産台帳記載） ・奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー大麦乾燥工場右と蒸溜工場左 北海道余市町 昭和18年7月」で描写・ 	
竣工時の設計者	土岐喬(元ニッカ職員、1925(昭和14)～1958(同33)年)・工営部	
施工者	ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部	
増改築年	2012(平成24)年、耐震改修（設計施工：大林組）	
増改築の内容	乾燥塔を中心に外壁炭素繊維シート貼、鉄骨軸組・梁、鉄筋コンクリート地中梁等により補強。第2 製品倉庫については、一部鉄骨補強、木造軸組・小屋組補強、壁構造用合板貼。	
当初設計図書の有無	有	
建 物 概 要	建築面積	437.10 m ²
	延床面積	481.26 m ²
	階数	2
	構造	当初：木骨石造（凝灰岩積）小屋組：キングポストトラス、 改修：木造軸組・小屋組補強、鉄骨梁等補強。
	外部仕上	寄棟屋根、方形屋根、葺降屋根、切妻屋根、カラー鉄板葺 外壁：凝灰岩積 基礎：凝灰岩積
	内部仕上	床：モルタルコテ仕上、天井：小屋組現
	その他	

<p>総合的な建築的・ 歴史的評価</p>	<p>第一乾燥塔とともに正門広場における景観の核となっている建物。第一乾燥塔と同形式で、正面に3箇所のアーチ形開口を見せる。中央部が乾燥塔で、寄棟屋根の中央を立ち上げ、換気塔とする。乾燥塔の南北は倉庫で、北側は西背後に延び、第一乾燥塔と対称形を成している。小屋組は当初は木造トラス。</p> <p>第一乾燥塔とともに、昭和10年代後半の工場の趣を現在によく伝えており、本工場施設のランドマークとしてシンボリックな存在でもあり、さらに製品製造ラインの重要な役割を担う施設としても貴重である。</p>
---------------------------	--

物件番号	7	
現名称・建物用途	リタハウス	
旧名称・建物用途	研究室・居宅現在の北棟と南棟ホール2部分までを研究室として使用された	
竣工年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1931(昭和6)年頃。 ・ 1942(昭和17)年3月1日(旧固定資産台帳記載) ・ 1932(昭和7)年頃、但馬家住宅として建築、同家より購入 	
竣工時の設計者		
施工者		
増改築年	1964(昭和39)年住宅部まで拡張。	
増改築の内容	基礎、床の改修工事。2階ホール天井裏に火災跡、小屋組改修	
当初設計図書の有無	有	
建 物 概 要	建築面積	209.03 m ²
	延床面積	330.15 m ² (1階床面積 204.06 m ² 、2階床面積 126.08 m ²)
	階数	2
	構造	木造
	外部仕上	切妻屋根、腰折屋根、カラー鉄板葺 外壁：モルタル掃付仕上(通称：ドイツ壁)、モルタル洗出など 基礎：コンクリート布基礎の上玉石積
	内部仕上	床：板張り、壁：漆喰塗、天井：漆喰塗など
	その他	

総合的な建築的・
歴史的評価

工場敷地の旧地主但馬八十次の住宅を購入し、事務所と研究所とする。購入後、北棟部分は大幅に改造されたようで、最初経理事務所として、次にウイスキー製造工程の研究、ブレンド、成分分析などを行う研究室として、現在の北棟と南棟ホール2部分までを研究室として使用され、1964（昭和39）年に研究室が拡張された。

1984（昭和59）年から1997（平成9）年まで竹鶴資料館として利用され、同年8月から2007（平成19）年9月までリタハウスとして利用された。

木造2階建、切妻屋根の主棟に棟を直交させた切妻屋根の従棟が続き、腰折屋根窓などで飾る。基礎は玉石積、外壁はモルタル掃付仕上（通称ドイツ壁）とモルタル洗出仕上げに塗分け、開口部の多い開放的なつくりが特徴である。

多くの改修を受けている建物であるが、黒川町の広大な湿地を1920（大正9）年ころから埋め立て工事を開始し、またウイスキー工場を現在地に誘致したといわれる但馬八十次の旧邸を引き継ぐ建物で、工場構内の施設の建設以前から存在する建物であり、さらに本工場の製品の質の向上や開発を支えてきた研究室という重要な役割を担った貴重な存在といえることができる。

物件番号	8	
現名称・建物用途	旧竹鶴邸	
旧名称・建物用途	竹鶴邸	
竣工年	<ul style="list-style-type: none"> ・1934(昭和9)年頃。(旧固定資産台帳記載なし) ・1946(昭和21)年頃山田町389に移築。 ・2002(平成14)年、工場内の現在位置に再移築。 	
竣工時の設計者	土岐喬(元ニッカ職員、1925(昭和14)～1958(同33)年)・工営部	
施工者	ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部 移築復元工事：阿部建設株式会社	
増改築年	1942(昭和17)、1946(昭和21)、2002(平成14)年。	
増改築の内容	<p>1942(昭和17)年に専務住宅(32坪)の南側に事務所部分14坪24を増築。1943(昭和18)年に屏の改修工事。その後屏は取り払われ、増改築が実施されたようで、移築間近の規模は62.18坪であった。</p> <p>1946(昭和21)年、山田町に移築の際に改築された(詳細不明)。2002(平成14)年工場内に再移築の際、木造軸組、小屋組を含め改造、当初の2階部分は復元されていない。</p>	
当初設計図書の有無	有	
建物概要	建築面積	191.73 m ²
	延床面積	191.73 m ² (玄関棟45.70 m ² 、渡り廊下9.36 m ² 、母屋棟136.67 m ²)
	階数	1(当初は2階建て)
	構造	木造
	外部仕上	切妻屋根、腰折屋根、カラー鉄板葺 外壁：妻壁、モルタル掃付仕上(通称：ドイツ壁)。下見板張ペンキ塗 基礎：鉄筋コンクリート造布基礎 玄関アーチ：緑色凝灰岩(笏谷石か)積

	内部仕上	床：板張り、壁：漆喰塗、天井：漆喰塗等
	その他	
総合的な建築的・ 歴史的評価	<p>当初専務社宅として工場敷地内に建設。敷地内に板塀で囲まれた住宅で、北東側の門扉から敷地内に入り、南東側に2.5×1間の玄関を突出させたほぼ矩形(4.5×7間)の母屋で、32坪(105.78㎡)の住宅であった。昭和18年に塀の改修工事。</p> <p>その後塀は取り払われ、増改築が実施されたようで、移築間近の規模は62.18坪であった。のち町内の山田町に移築され、平成14年、現在地に再移築された。南側玄関棟と北側母屋とを渡り廊下でつないでいるが、建築当初からの母屋を山田町に移築後、母屋部分の再構成と玄関棟の増築が実施されたと思われる。</p> <p>創業者竹鶴政孝・リタ夫妻の住宅である。木造モルタル掃付仕上げの玄関部に木造下見板張の主屋が続く。</p> <p>洋風の外観だが和室を配し、内装には和風意匠が多く採り入れられている。</p> <p>主要構造材は新材にとって替われ、2階内部は復元されなかったものの、山田町時代の姿を内外ともに忠実に踏襲し、内部の建具や調度品なども移築前の状況に極力復元され、創設者竹鶴政孝、リタ夫妻の西欧風日常生活を伝える遺構として貴重である。</p>	

物件番号	9	
現名称・建物用途	旧大日本果汁株式会社余市工場創立事務所	
旧名称・建物用途	旧社長室・会長室	
竣工年	・1934(昭和9)年7月頃 ・1935(昭和10)年3月(旧固定資産台帳記載)	
竣工時の設計者	ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部	
施工者	ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部 2001(平成13)年改修：阿部建設株式会社	
増改築年	1946(昭和21)年、昭和30年代、2001(平成13)年。	
増改築の内容	当初：3間四方(29.75㎡)の西側に0.2×0.8間突出した9.16坪(30.28㎡)。1946(昭和21)年、桁行を2間増築。昭和30年代に平面の拡張や、腰部分の石積みと上部のモルタル仕上げの改修や、玄関ポーチの重厚な意匠への変更。2001(平成13)年、木摺漆喰下地の上にラス下地の追加、床根太や床材の取替え、前室間仕切りの造作など、既存の空間を維持しつつ、観覧用の現状に改修	
当初設計図書の有無	有	
建物概要	建築面積	52.89㎡(当初：30.28㎡)
	延床面積	52.89㎡(当初：30.28㎡)
	階数	1
	構造	木造 小屋組：垂木小屋組
	外部仕上	屋根：切妻屋根、カラー鉄板葺 外壁：腰、凝灰岩積、腰上、モルタル掃付仕上(通称：ドイツ壁) 基礎：凝灰岩積
	内部仕上	床：板張、壁：漆喰塗
	その他	

<p>総合的な建築的・ 歴史的評価</p>	<p>創建当初は、3×3間の正方形平面の西側に1.2×4.8尺を突出した9.16坪の木造平家の事務所。1946(昭和21)年頃桁行2間ほどを増築し、桁行5間。</p> <p>1955(昭和30)年以降作成と考えられる図面には「木造平家建坪 一六坪 小屋組西洋合掌 床板張り 高さ三・五米 内部シクイ壁仕上 外部腰石積其ノ他モルタル仕上 家根垂鉛引鋼板葺」(工場建物圖)とあるので、この時期に平面の拡張や、腰部分の石積みと上部のモルタル仕上げの改修や、玄関ポーチの重厚な意匠への変更がなされたと思われる。</p> <p>正門に対面するように位置する小さな建物で、正面を北東に向け、3×5間の矩形平面の母屋の正面側に幅7尺、奥行5.4尺の風除室を突出させ、本体正面左右壁面に縦長上げ下げ窓を建て込んでいる。外壁は下見板張から腰壁を凝灰岩5段積とし、上部をモルタル掃付仕上げとする。</p> <p>改修を受けているとはいえ、工場施設最古の記念建築物であり、1980(昭和55)年「余市の工業発達の足跡を示す文化的資産」として余市町文化財に指定された。企業内建物としては、北海道初の文化財指定でもあった。</p>
---------------------------	--

物件番号	10	
現名称・建物用途	倉庫（第1貯蔵庫）	
旧名称・建物用途	第一貯蔵庫	
竣工年	・1939(昭和14)年頃 ・1940(昭和15)年3月1日（旧固定資産台帳記載）	
竣工時の設計者	土岐喬(元ニッカ職員、1925(昭和14)～1958(同33)年)・工営部	
施工者	ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部	
増改築年		
増改築の内容		
当初設計図書の有無		
建物概要	建築面積	401.65 m ² (121.5 坪)
	延床面積	401.65 m ² (121.5 坪)
	階数	1
	構造	木骨石造（凝灰岩積）。 小屋組：キングポストトラス
	外部仕上	屋根：切妻屋根、カラー鉄板葺 外壁：凝灰岩積 基礎：凝灰岩積 妻面入口は両袖柱を緑色凝灰岩（笏谷石か）、柱上部を灰色凝灰岩でアーチ構造としている。
	内部仕上	横板張
その他		

総合的な建築的・
歴史的評価

旧竹鶴邸の南側に位置する最初に建設された原酒貯蔵庫。木骨石造の平屋である。原酒貯蔵庫の第1号にあたる貯蔵庫で、構内で最初の木骨石造建築として建設された。創建時は中島倉庫と呼ばれた。以降、構内の施設には石材が採用されるようになったという。創建時は、余市川の中州にあたる埋め立て前の中島の敷地で、貴重なウイスキー原酒を火災から守るために配置された。中島周辺は、1940(昭和15)年以降に埋め立てられた。

梁間4間半桁行27間の切妻造、鉄板葺で、軒蛇腹は妻壁に廻った位置で止める。妻面にアーチ型の戸口を開き、上部に小窓を設ける。小屋組はキングポストトラスである。

建物を特徴づける意匠として妻面中央に設けられた入口があり、両袖柱に緑色凝灰岩(笏谷石か)を立て、柱上部に灰色凝灰岩の切石によるアーチを設けていることがあげられる。このアーチは、工場内の他施設でも多用されている意匠でもある。

本建物は、原酒貯蔵庫の第1号にあたる貯蔵庫で、構内で最初の木骨石造建築として建設され、また構内の建物に採用される石材採用の端緒を開いた建物であり、構内の敷地の変遷を示す記念碑として貴重である。

物件番号	11	
現名称・建物用途	原酒貯蔵庫（第2貯蔵庫）	
旧名称・建物用途	中島第二貯蔵庫	
竣工年	<ul style="list-style-type: none"> ・1942(昭和17)年頃か ・奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー貯蔵庫嶋 北海道余市町 昭和18年7月」に描写。 ・1946(昭和21)年3月1日（旧固定資産台帳記載）。 	
竣工時の設計者	土岐喬(元ニッカ職員、1925(昭和14)～1958(同33)年)・工営部	
施工者	ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部	
増改築年	2017(平成29)年耐震診断調査実施。 2018(平成30)年頃耐震補強工事	
増改築の内容	桁行柱と小屋組を挟み方杖、合掌と陸梁を挟束で補強。補強金物の付加や、小屋組下端に鉄筋の水平ブレース（筋交い）設置。	
当初設計図書の有無		
建物概要	建築面積	490.90 m ² (148.5 坪)
	延床面積	490.90 m ² (148.5 坪)
	階数	1
	構造	木造。 小屋組：キングポストトラス（桁行柱と小屋組を方杖、合掌と陸梁を挟束で補強。小屋組下端に鉄筋の水平ブレース（筋交い）設置。補強金物付加）。
	外部仕上	屋根：切妻屋根、カラー鉄板葺 外壁：モルタル掃付仕上（通称：ドイツ壁） 基礎：コンクリートモルタル刷毛引仕上 妻面入口は両袖柱を緑色凝灰岩、柱上部を灰色凝灰岩でアーチ構造としている。
	内部仕上	横羽目板張

	その他	基礎：不同沈下有。全体に凍害による劣化有。
総合的な建築的・歴史的評価		<p>切妻屋根、カラー鉄板葺。破風尻を垂直に切り落とし、軒天井を水平に張る。これは他の貯蔵庫施設と共通する意匠で、外壁も特徴的なモルタル掃付仕上げ（ドイツ壁）として、他の凝灰岩積施設との外観の統一を意識した意匠とも考えられる。</p> <p>内部の壁は横板張り。天井は小屋組・野地板現、床は土間。</p> <p>構造は木造軸組。小屋組はキングポストトラスで、桁行柱と小屋組を挟方杖で、合掌と陸梁を挟束で補強している。また、外壁には桁行壁の補強として控壁を両面にそれぞれ3基設置している。基礎の詳細は未調査であるが、外観観察からはコンクリート、モルタル刷毛引仕上げと考えられる。</p> <p>建物を特徴づける意匠として北妻面中央に設けられた入口があり、両袖柱に緑色凝灰岩(笏谷石か)を立て、柱上部に灰色凝灰岩の切石によるアーチを設けていることがあげられる。このアーチは、工場内の他施設でも多用されている意匠でもある。</p> <p>切妻屋根の外観は、他の貯蔵庫とも共通する意匠で、外壁の特徴的なモルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)は、第一貯蔵庫などに採用された凝灰岩積みとの統一性を意識した意匠とも考えられ、また第一、第三貯蔵庫を含め、1943(昭和18)年制作の奥山儀八郎の版面にも描かれており、創業時の景観を伝える上で、貴重な存在の一つである。</p>

物件番号	12	
現名称・建物用途	原酒貯蔵庫（第3貯蔵庫）	
旧名称・建物用途	中島第三貯蔵庫	
竣工年	<ul style="list-style-type: none"> ・1955(昭和30)年。 ・1955(昭和30)年8月28日着工。 ・1946(昭和21)年3月1日(旧固定資産台帳記載)。 	
竣工時の設計者	土岐喬(元ニッカ職員、1925(昭和14)～1958(同33)年)・工営部	
施工者	ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部	
増改築年	2017(平成29)年耐震診断調査実施。 2018(平成30)年2月北側一部(163.64㎡)倒壊、11月改修工事	
増改築の内容	桁行柱と小屋組を挟方杖、合掌と陸梁を挟束で補強。小屋組下端に鉄筋の水平ブレース(筋交)設置。 建物の北側桁行約16m(163.64㎡)が2018(平成30)年2月に倒壊。北側妻壁などを2018(平成30)年11月に修復	
当初設計図書の有無		
建 物 概 要	建築面積	327.26㎡(99.0坪)。竣工当初490.90㎡(148.5坪)
	延床面積	327.26㎡(99.0坪)。竣工当初490.90㎡(148.5坪)
	階数	1
	構造	木造。 小屋組：キングポストトラス(桁行柱と小屋組に挟方杖で補強。補強金物付加)
	外部仕上	屋根：切妻屋根、カラー鉄板葺 外壁：モルタル塗掃付仕上(通称：ドイツ壁) 基礎：コンクリートモルタル仕上 妻面入口はモルタル造出。
	内部仕上	横板張

	その他	2018(平成30)年2月に、当該建物の北側桁行16m(9間)程163.64㎡が倒壊。同年11月、北面妻壁を中心に補修。床：土間。基礎：不同沈下有。全体に凍害による劣化有。
総合的な建築的・歴史的評価	<p>創建当初は、中島第三貯蔵庫と呼ばれた貯蔵庫。近年の建物北側倒壊により当初面積から163.64㎡減じているが、北面妻壁を中心に補修がなされ当初に近い形態が残されている。</p> <p>切妻屋根、カラー鉄板葺。当初の外壁は、特徴的なモルタル掃付仕上げ（ドイツ壁）（改修時に北面妻壁はモルタル搔落仕上）として、他の貯蔵庫同様、外観の統一を意識している。</p> <p>内部の壁は横羽目板張り。天井は小屋組・野地板現し、床は土間、一部コンクリート土間である。</p> <p>構造は木造軸組。小屋組はキングポストトラスで、桁行柱と小屋組を挟方杖で補強し、補強金物も付加している。また、外壁には桁行壁の補強として控壁を両面にそれぞれ1基設置している。</p> <p>基礎の詳細は未調査であるが、外観観察からはコンクリート、モルタル刷毛引き仕上げと考えられる。</p> <p>北妻面中央に設けられた入口は一部倒壊後の補修であることから、袖柱と楣をモルタル作出としている。</p> <p>本建物は、創建時から北側9間分が倒壊してはいるが、倒壊後の補修にあたって、他の貯蔵庫の外観意匠との統一を図っており、また埋立前の中島に建設された第一、第二貯蔵庫と同様に、工場創業時の歴史を語る貯蔵庫群の一つとして貴重である。</p>	

物件番号	13	
現名称・建物用途	機械工場	
旧名称・建物用途	機械修繕工場	
竣工年	<ul style="list-style-type: none"> ・1949(昭和24)年7月(建物管理台帳) ・1959(昭和34)年12月(旧固定資産台帳記載) 	
竣工時の設計者	土岐喬(元ニッカ職員、1925(昭和14)～1958(同33)年)・工営部	
施工者	ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部	
増改築年	<ul style="list-style-type: none"> ・1959(昭和34)年頃、2階増築 ・2017(平成29)年耐震診断調査実施 	
増改築の内容	物置・2階 耐震改修	
当初設計図書の有無		
建物概要	建築面積	125.18 m ² 。当初：89.24 m ² (機械修繕工場)。増築：物置 35.94 m ²
	延床面積	154.93 m ² 、(2階 29.75 m ²)
	階数	2
	構造	<p>木造、但し2階増築範囲の下部を鋼管柱、鉄骨梁で補強。 小屋組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・工場棟：キングポストトラス、但し方杖・挟束を欠く。 ・物置棟：不明。 ・2階：キングポストトラス
	外部仕上	<p>屋根：切妻屋根、カラー鉄板葺 外壁</p> <ul style="list-style-type: none"> ・工場棟・2階：モルタル掃付仕上げ(ドイツ壁) ・物置棟：モルタル刷毛引仕上 <p>基礎：コンクリートモルタル仕上</p>
内部仕上	<p>工場棟</p> <ul style="list-style-type: none"> ・壁：鉄板張ペンキ塗仕上 ・床：コンクリート土間 ・天井：二階床下現 <p>物置棟</p>	

		<ul style="list-style-type: none"> ・壁：漆喰塗 ・床：板張 ・天井：漆喰塗 <p>2階 不明</p>
総合的な建築的・歴史的評価	その他	<p>外廻り建具：木製。半紙判ガラス使用。 基礎工事：木杭打の上、割栗石地業の上、コンクリート基礎</p> <p>当初、梁間4.5間・桁行6間ほどの器械修繕工場として建設されたものと考えられ（現存設計図による）、建設時期は不明であるが、その後、工場後側に物置を、工場のほぼ中央部分に2階を増築したものと考えられる。</p> <p>切妻屋根、カラ一鉄板葺き。当初建設の工場、2階、物置共に、鼻隠を垂直に張り、破風尻もこれに合わせて垂直に切り落とし、軒天井を水平に張る意匠は共通する。一方、破風尻の意匠の細部にわずかな違いがみられ、建設時期の違いを反映しているとも考えられる。</p> <p>外壁は工場、2階が特徴的なモルタル掃付仕上げ（ドイツ壁）であるが、物置はモルタル刷毛引仕上で、工場2階と物置の増築時期の違いを反映しているのかもしれない。</p> <p>内部の壁は鉄板張ペンキ仕上げ。天井は2階床組・野地板現、床はコンクリート土間である。</p> <p>構造は木造軸組であるが、工場部分には2階増築部分の外周位置に直径10cmの鋼管を配置している。小屋組はトラス構造が基本であるが、工場平屋部分では方杖、挟束を欠き、2階では挟束を欠いている。物置の小屋組は不明。</p> <p>基礎は当初設計図によれば、木杭地業の上に割栗石を敷き、コンクリート基礎を設置したと考えられ、設置される工作機械の重量や地盤の軟弱性を考慮した可能性が考えられる。</p> <p>当該建物を特徴づける意匠として南面のほぼ全面にガラス窓が設けられていることが挙げられる。巾1間の欄間付半紙判ガラス9入の引違窓が6連集中して設けられ、工場作業への十分な採光を考慮したものと考えられる。</p> <p>以上のように、当該建物は、外観は工場全体に見られる統一的な意匠を踏まえつつ、機械修理工場としての機能に配慮した貴重な建造物である。同時に、前記した屋根や外壁仕上げの技法は、大正期から昭和30年代頃まで北海道内の木造駅舎や官舎などに用いられた意匠と類似性をもち、北海道の建築の歩みを考える上でも貴重な建物である。</p>

物件番号	14	
現名称・建物用途	麦芽倉庫・フレコン室	
旧名称・建物用途	麦芽倉庫	
竣工年	・1934(昭和9)年頃(旧固定資産台帳記載) ・奥山儀八郎版画「創立事務所から正門を望む 北海道余市ニッカ工場 昭和18年7月」で描写	
竣工時の設計者	土岐喬(元ニッカ職員、1925(昭和14)～1958(同33)年)・工営部	
施工者	ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部	
増改築年	2017(平成29)年耐震診断調査実施。	
増改築の内容	小屋組改造、間仕切壁新設	
当初設計図書の有無		
建物概要	建築面積	334.64 m ²
	延床面積	334.64 m ²
	階数	1
	構造	木骨石造。 小屋組：キングポストトラス(改修時一部陸梁・合掌を鉄骨で補強。陸梁・合掌など新規木材・ボルトで補強、方杖による補強。内壁ほぼ全面を構造用合板張りに改修) ※建物全体が東側に傾斜している
	外部仕上	屋根：切妻屋根、カラー鉄板葺 外壁：南面：凝灰岩積。東・西・北面：モルタル石積様目地切仕上 基礎：コンクリートモルタル仕上。(基礎根入18cm)
	内部仕上	壁：当初不明、現状は構造用合板張 天井：小屋組現 床：コンクリート土間
	その他	

<p>総合的な建築的・ 歴史的評価</p>	<p>切妻屋根、カラー鉄板葺。鼻隠を垂直に張り、破風尻もこれに合わせて垂直に切り落とし、軒天井を水平に張る。これは他の貯蔵庫などの施設と共通する意匠である。</p> <p>外壁は凝灰岩積。</p> <p>内部の壁ほぼ全面と陸梁下の方杖を構造用合板張りに改修し構造補強を行っている。天井は小屋組・野地板現、床はコンクリート土間である。</p> <p>構造は木骨石造。小屋組はキングポストトラスで、改修時（改修時期不明）に一部の陸梁・合掌を鉄骨で補強し、そのほかの小屋組も新規木材と新規ボルトにより補強している。また、外壁には桁行壁の補強として控え壁を両面にそれぞれ 5 基設置している。</p> <p>基礎の詳細は未調査であるが、耐震診断時の資料からコンクリートモルタル刷毛引き仕上げと考えられる。</p> <p>以上のように、当該建物は、外観は工場全体に見られる統一的な意匠を踏まえつつ、構内中央通りの統一された景観の構成要素として貴重である。</p>
---------------------------	--

物件番号	15	
現名称・建物用途	現場事務所	
旧名称・建物用途	給食室	
竣工年	<ul style="list-style-type: none"> ・1957(昭和32)年9月(旧固定資産台帳記載)、「洋樽工場」として建築。 ・1949(昭和24)年7月(建物管理台帳記載) 	
竣工時の設計者	土岐喬(元ニッカ職員、1925(昭和14)～1958(同33)年)・工営部	
施工者	ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部	
増改築年	<ul style="list-style-type: none"> ・1964(昭和39)年、給食室に用途変更、同年、調理場増築。 ・2017(平成29)年耐震診断調査実施。 	
増改築の内容	調理場増築。	
当初設計図書の有無		
建物概要	建築面積	当初：132.20 m ² 。調理場：39.66 m ² 。合計(現状)：171.86 m ² 。
	延床面積	171.86 m ²
	階数	1
	構造	<p>木造。</p> <p>小屋組：キングポストトラス(給食室、調理場共)</p> <p>基礎：木杭打深1.7m、砂利地業厚60cmの上玉石積の上コンクリート</p>
	外部仕上	<p>屋根：切妻屋根、カラー鉄板葺</p> <p>外壁：モルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)</p> <p>基礎：コンクリートモルタル刷毛引仕上</p>
内部仕上	<p>給食場</p> <p>壁：鉄板張、ペンキ塗。天井：岩綿吸音板張。床：コンクリート土間(当初は塩ビ系タイル張：タイル目地跡あり)</p> <p>調理場</p> <p>壁：ボード張。床：タイル張。天井：ボード張</p>	

	その他	
総合的な建築的・ 歴史的評価		<p>当初、梁間5間・桁行8間ほどの洋樽工場として建設。1964(昭和39)年給食室へ用途変更、同年、調理室を増築したものと考えられるが、物置は現存しない。</p> <p>切妻屋根、カラー鉄板葺。給食室、増築の調理場共に、鼻隠を垂直に張り、破風尻もこれに合わせて垂直に切り落とし、軒天井を水平に張る意匠は共通する。</p> <p>外壁は給食場、調理上共にモルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)で、機械修繕工場や第二貯蔵庫と共通する意匠である。</p> <p>給食場部分の内部は、壁は鉄板張ペンキ塗。天井は吸音板張。床はコンクリート土間である(ビニールタイル張であったと思われる目地跡が確認できる)。</p> <p>調理場は、壁・天井はボード張、床はタイル張である。</p> <p>構造は木造軸組。小屋組は給食場、調理上ともにキングポストトラス。</p> <p>基礎は当初設計図によれば、木杭地業の上に割栗石を敷き裏込めコンクリート玉石積の上にコンクリート基礎となっている。</p> <p>当該建物を特徴づける意匠として、先にあげた屋根・外壁のほか、巾1間の半紙判ガラス9入引違窓を外壁全周に一間置きに配置し室内への採光に配慮している点や欄間付玄関庇などがあげられる。</p> <p>以上のように、当該建物は、当初は洋樽工場として建設されたもので、外観は工場全体に見られる統一的な意匠を踏まえつつ、給食場としての機能を長年果たした建造物である。同時に、屋根や外壁仕上の技法は、大正期から昭和30年代頃まで北海道内の木造駅舎や官舎などに用いられた意匠と類似性をもち、北海道の建築技術の歩みを考える上でも貴重である。</p>

物件番号	16	
現名称・建物用途	連続蒸溜工場	
旧名称・建物用途	連続蒸溜工場	
竣工年	・1949(昭和24)年7月(建物管理台帳記載) ・1958(昭和33)年12月(旧固定資産台帳記載)	
竣工時の設計者	土岐喬(元ニッカ職員、1925(昭和14)～1958(同33)年)・工営部	
施工者		
増改築年		
増改築の内容		
当初設計図書の有無		
建物概要	建築面積	46.5 m ²
	延床面積	139.75 m ²
	階数	3
	構造	鉄骨造、リベット留 小屋組：L形鋼による放射状構造、リベット留
	外部仕上	屋根：切妻屋根、カラー鉄板葺 外壁：木片セメント板 基礎：コンクリートモルタル仕上
	内部仕上	壁：木片セメント板 天井：鋼板張 床 1階：コンクリート土間 2階：網目鋼板張 3階：L形鋼枠に鉄筋をすのこ状に溶接
	その他	

<p>総合的な建築的・ 歴史的評価</p>	<p>方形屋根、カラー鉄板葺。 外壁はコンクリート成型版張。 天井は鋼板張小屋組現、床は、1階がコンクリート土間、2階は網目鋼板張、3階はL形鋼枠に鉄筋を小間返の間隔に溶接したすのこ床。 構造は鉄骨造でリベット留。小屋組はL字形鋼を放射状に配置し屋根下地の鋼板を支持している。 鉄骨をリベットで接合する工法は鉄骨造成立の初期から用いられ、昭和30年代まで鉄骨の接合方法の主流だった工法で、建設年代を知る指標であると同時に貴重な技術遺産といえる。 工場群の中では異質な建物ではあるが、同系色の外装材の使用や方形屋根の頂部に小さな尖塔を乗せるなど、周囲の景観に配慮した努力がうかがえる建物である。</p>
---------------------------	--

物件番号	17	
現名称・建物用途	醗酵室・濾過室	
旧名称・建物用途	醗酵室・濾過室	
竣工年	1960(昭和35)年11月(旧固定資産台帳記載)。	
竣工時の設計者	(株)日建設計北海道事務所	
施工者		
増改築年		
増改築の内容		
当初設計図書の有無	平面図、立面図、断面図、配置図、仕上表、矩計図、鉄骨矩計図	
建 物 概 要	建築面積	852.02 m ²
	延床面積	852.02 m ²
	階数	1
	構造	鉄骨造リベット留。外壁：鉄筋コンクリート凝灰岩張（江戸切仕上）。一部鉄筋コンクリート、モルタル塗凝灰岩様目地仕上。
	外部仕上	屋根：切妻屋根、カラー鉄板葺 外壁：鉄筋コンクリート凝灰岩張 基礎：コンクリート束基礎（鉄骨柱基礎）
	内部仕上	壁：モルタル、ペンキ塗 床：土間コンクリート、一部タイル張、一部樹脂塗床 天井：鉄骨現、ボード張
	その他	

<p>総合的な建築的・ 歴史的評価</p>	<p>切妻屋根、カラー鉄板葺。 外壁はコンクリート壁に凝灰岩張。 主体構造は鉄骨造でリベット留。 基礎は、鉄骨柱部分は束基礎。 内部については、壁はモルタル金縷仕上ペンキ塗。床はコンクリート土間、タイル張、樹脂塗床。天井はフレキシブルボード張ペンキ塗・鉄骨現。 当該建物の特徴の一つとして、一見凝灰岩造を思わせる外壁に穿たれた大きな窓の連なりが挙げられる。 鉄骨をリベットで接合する工法は鉄骨造成立の初期から用いられ、昭和 30 年代まで鉄骨の接合方法の主流だった工法で、建設年代を知る指標であると同時に貴重な技術遺産といえる。同時に、昭和 30 年代における鉄骨とコンクリートさらには凝灰岩を融合した初期の特徴的な建物といえる。</p>
---------------------------	---

物件番号	18	
現名称・建物用途	製樽工場	
旧名称・建物用途	製樽工場	
竣工年	1964(昭和39)年(北海道工場所蔵稟議書No.66 第1樽材乾燥場建築工事施工の件:既存の第1樽材乾燥場を移転改築し請託工場に用途変更)	
竣工時の設計者		
施工者		
増改築年	1987(昭和62)年9月	
増改築の内容	当初の第1樽材乾燥場を移築し、同時に東側に下屋増築。 1987(昭和62)年、東側に鉄骨造の渡り廊下・作業場を増築	
当初設計図書の有無		
建 物 概 要	建築面積	344.48 m ²
	延床面積	344.48 m ²
	階数	1
	構造	木造。 小屋組：キングポストトラス。下屋：和小屋
	外部仕上	屋根：切妻屋根、カラー鉄板葺 外壁：モルタル掃付仕上げ（ドイツ壁） 基礎：コンクリートモルタル刷毛引仕上
	内部仕上	床：コンクリート土間。
	その他	

総合的な建築的・
歴史的評価

1964(昭和 39)年第 1 樽材乾燥場を現位置に曳家によって移築し、同時期あるいは直後に東側へ片流れ部分を増築。その後、1984(昭和 59)年に既設建物の形式に合わせて、桁行 6 間の増築を行ったと考えられる。

さらに 1987(昭和 62)年には東側に鉄骨造の作業場を増築し、渡り廊下で接続する。開口部の配置などを見ても、南妻面・西面のシャッター廻りなどは改造による柱配置の変更が読み取れる。

1964(昭和 39)年の移築以来、数次の改造・改修を経ていると考えられるが、外壁仕上げ、軒先の意匠、欄間付き木製半紙判ガラス窓などは当初のものを保持していると考えられ、他の施設と同様に景観に配慮した意匠を踏襲していること、ウイスキー醸造に欠かすことができない原酒貯蔵樽の製造や補修・メンテナンスを担う製品製造ラインを支える施設として重要である。

切妻屋根平家のシンプルな外観であるが、外壁をモルタル掃付仕上げとし、軒先の意匠、欄間付木製 9 枚入窓を用いるなど、他の施設と同様に景観に配慮したデザインを踏襲している。

ウイスキー原酒の貯蔵に欠かせない原酒貯蔵樽の製造やメンテナンスを担う製品製造ラインを支える施設として重要である。

物件番号	19	
現名称・建物用途	アーチ壁	
旧名称・建物用途	麦芽倉庫・フレコン室～連続蒸溜室、連続蒸溜室～発酵・濾過室 間石積壁	
竣工年	<ul style="list-style-type: none"> ・1942(昭和17)年頃(麦芽倉庫・フレコン室～連続蒸溜室間) ・奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー大麦乾燥工場右と蒸溜工場左 北海道余市町 昭和18年7月」で描写。 ・1949(昭和24)年頃(建物管理台帳) ・1958(昭和33)年(固定資産台帳):連続蒸溜室～発酵・濾過室 間石積壁 	
竣工時の設計者		
施工者		
増改築年		
増改築の内容		
当初設計図書の有無		
建 物 概 要	建築面積	全長:10.45m。高さ4.025m
	延床面積	
	階数	
	構造	組積造(凝灰岩積)
	外部仕上	
	内部仕上	
	その他	

<p>総合的な建築的・ 歴史的評価</p>	<p>麦芽倉庫・フレコン室～仕込工場間の通路及び仕込工場と醗酵室、濾過室間の通路南面に設けられた凝灰岩積の壁とアーチ。</p> <p>麦芽倉庫・フレコン室と仕込工場間の南面は、通路を含めてあたかも一体の建物であるかのように外壁が連続した凝灰岩積となっている。壁は両建物の棟高から水平に連続して設けられ、外観上、違和感を与えないと同時にバックヤード領域とを穏やかに遮蔽区画し、巾 2.81m、最高高 2.98mの作業用通路として大きな開口部を確保している。</p> <p>麦芽倉庫・フレコン室や仕込工場の出入口に設けたアーチばかりでなく、北海道工場の施設全体の開口部の意匠と共通すると同時に、北海道工場の中でも最大規模のアーチである。</p> <p>仕込工場と醗酵室・濾過室の南面も同様に景観を損なわない意図を持った凝灰岩積みアーチ壁になっているが、仕込工場の軒高を基準に壁を設け、中央のアーチ開口部分を台形上に1mほどかさ上げし、前記した麦芽倉庫・フレコン室と仕込工場間のアーチとほぼ同規模、同意匠のアーチを設けている。</p> <p>工場構内の正門に通じる中央道路は、創業当初に見られた電柱を工場施設充実期に地下埋設にしたり、植栽も社員自らが行うなど景観への配慮が実践されており、当該アーチ壁も工場景観の統一を意識した造形と考えられる。</p>
---------------------------	---

物件番号	No.20	
現名称・建物用途	裏門石積塀	
旧名称・建物用途	裏門石積塀	
竣工年	・1942(昭和17)年頃 ・奥山儀八郎版画「大日本果汁株式会社正門 北海道余市 昭和18年7月」で描写	
竣工時の設計者		
施工者		
増改築年		
増改築の内容		
当初設計図書の有無		
建 物 概 要	建築面積	全長：12.19m。 高さ2.25m
	延床面積	
	階数	
	構造	組積造（凝灰岩積）
	外部仕上	
	内部仕上	
	その他	

<p>総合的な建築的・ 歴史的評価</p>	<p>裏門には凝灰岩積の2つの門が設けられ、東面（工場敷地外の道路側）から見て、左側にアーチ門、右側に門柱を立てた門が設けられている。左側のアーチ門は巾1.85m、アーチ高1.7mほどで工場内施設に設けられるアーチ開口部と類似する形式で、胸高ほどまで石柱を建て上部に迫受石を置きその上にアーチを置くが、工場内施設のそれと比べてアーチのカーブは扁平で迫石は台形、アーチの上部に二重の笠木を載せている。</p> <p>向かって右側の門は、幅90cm角、高さ1.8mほど。石幅が不規則な切石乱積で積まれ、鉄製の両開き扉を設けている。</p> <p>石造裏門の建設経緯については不明な点も多いが、工場全体に残る施設の中でも創建初期に建設されたもので、北海道工場の初期の姿や歴史を伝える貴重な建造物といえる。</p>
---------------------------	---

第3章 ニッカウキスキー(株)北海道工場の歴史的建造物の評価

ニッカウキスキーの創業者竹鶴政孝(1896-1979)は、1934(昭和9)年7月大日本果汁株式会社を設立し、専務取締役役に就任した。余市は、政孝が注目していた土地で、リタ夫人(1901-1961)の故郷であるスコットランドに気候や風景がよく似ている事も理由であった。

余市町黒川町に工場用地を取得し、ただちに製汁工場、塩詰工場、汁液貯蔵庫、原料倉庫、包装資材倉、事務所、社宅などの建設を開始した。

ウイスキーづくりは、よい原酒を時間をかけて熟成させる時間のかかる事業であるため、リンゴジュースの生産、販売を本業の支えとした。創立当初の会社名は、このような背景を反映している。

工場進出は、大火(1932、33年)によって町民たちがうちひしがれていた時期とも重なり、町を挙げて歓迎された。また、工場敷地は、1920年以来埋め立てが開始された沼地を含み、また埋め立て推進者の一人で、本工場誘致に尽力した但馬八十次の住宅(現リタハウス)などがあつた地所を内包するなど、工場設立以前からの地域の歴史を伝える場所でもあつた。ちなみにウイスキーの製品化までの間生産していたリンゴジュースの原料である余市リンゴは、1875(明治8)年開拓使がアメリカから移入した苗木を旧会津藩士団体移住農家に配り、やっと1879(明治12)年に実を結んだものであつた。

1935(昭和10)年2月にブランデー蒸溜用ポットスチルを設置、1939(昭和14)年ウイスキーの醸造を開始。1940(昭和15)年冬には蒸溜機1基を増設し、同年6月、ニッカウキスキー第一号となる「ニッカウキスキー」と「ニッカブランデー」を発売した。創業からの赤字を一掃させることになったといい、工場施設の拡充も製品化の成功と無縁ではないと思われる。

1943(昭和18)年、竹鶴政孝は社長に就任。1945(昭和20)年秋には余市農業会による林檎果汁の製造開始に伴い、林檎果汁類の製造を終了。1952(昭和27)年、社名を「大日本果汁株式会社」から「ニッカウキスキー株式会社」に変更した。

1961(昭和36)年、竹鶴リタ夫人逝去。1970(昭和45)年に竹鶴政孝は会長に就任。1979(昭和54)年、創業者であり会長を務めていた竹鶴政孝逝去。

1980(昭和55)年、創立旧事務所が余市町文化財に指定。2003(平成15)年、北海道工場は「自然環境功労者」として環境大臣賞受賞。2004年には北海道遺産に、2007年には「近代化産業遺産群33」の「7.北海道における近代農業、食品加工業などの発展の歩みを物語る近代化産業遺産群」の一つとして認定された。また、工場内の9施設は、2005年に登録有形文化財に登録されている。

ニッカウキスキー(株)北海道工場の文化史的・建築史的価値を挙げるとすれば以下の点である。

1) 地域の歴史を伝える

本工場の敷地の一部は、1920(大正9)年以来埋め立てが開始された沼地を包含しており、また埋め立てを促進し、本工場誘致に尽力し、さらに酒造業にも関わっていた但馬八十次の住宅(現リタハウス)や倉庫があつた地所も内包するなど、大日本果汁株式会社設立以前からの地域の歴史をも伝えている。また、ウイスキー製品化まで生産していたリンゴジュースの原料となる余市リンゴは、1875(明治8)年開拓使がアメリカから移入した苗木を余

市の農家に配り、やっとなら 1879(同 12)年に実を結んだもので、工場設置以前にはこのあたりにはリンゴ問屋や倉庫などもあったという歴史も付随している。

2) 創建当初の産業施設群の景観をよく維持している。

創業者竹鶴政孝の留学先でありリタ夫人の故郷であるスコットランドの古城をイメージした事務所棟(1942(昭和 17)年頃、一部蒸溜工場は 1935(昭和 10)年頃)と、赤いとんがり屋根(換気塔)と石造外壁の取り合わせが特徴的な第一乾燥塔(1940(昭和 15)年頃)や第二乾燥塔(同)などの正門前道路に並ぶ施設群や、木骨石造倉庫の第一貯蔵庫(1939(昭和 14)年頃)、旧創立事務所(1934(昭和 9)年)、リタハウス(旧事務所兼居宅)(1931(昭和 6)年頃竣工、1934(同 9)年頃購入)などは、1934(昭和 9)年頃から 1934(同 18)年頃の工場創業期の面影をよく伝えている。また、創建当初から電線の地下埋設など、景観への配慮もなされていた点も特筆される。

3) 工場施設の設計図書類が保存されている。

ニッカウキスキー(株)北海道工場には、工場敷地および配置図類が 110 点遺存している。その多くには年代記載がないが、「北海道工場建物一覧表」と照合することによって、おおよその年代を知ることができ、また工場施設の変革を詳細に追うことができ、近代建築関連資料としても貴重である。さらに、本社には多くの稟議書が保存されており、工場内施設の建設経緯などを知る上で貴重な資料である。

以下に工場内の主要な歴史的建造物の評価を概説する。建物名の()内は第 2 章の項番号である。

事務所棟(2-1)は、ニッカウキスキー(株)北海道工場の正面(東側)に位置し、巾 6m(外形寸法)ほどの正門を中心に右(北棟)・左(南棟)に連続する長大な木骨石造の建物で、ニッカウキスキー(株)北海道工場を象徴する建物といえることができる。

正門棟は、1942(昭和 17)年頃竣工の建物で、階上に貴賓室を収容する工場施設を象徴する建物である。凝灰岩を積み上げた重厚な石造建築(2階床組・小屋組は木造)で、1階の大きなアーチとヨーロッパ中世の城に見られるような屋上の狭間胸壁(バトルメント)が強い印象を与える建物である。2007(平成 19)年に耐震改修を行ったが、当初の外観、内装も良好に維持されている。本建物は、工場施設の建設初期の遺構であり、施設群の顔として中心をなす建築であり、また工場敷地内全体に見られる統一的な意匠の規範となっており、工場群の景観を維持するうえでも重要な建物といえる。また、北海道工場所蔵資料中例外的に外観設計図・スケッチが多数残っており、その後の増改築、耐震改修にあたっては当初の方針を維持する指針になったものと考えられる。

北棟は、1942(昭和 17)年頃竣工の建物で、1963(昭和 38)年、1968(同 43)年の 2 期にわたる増築や 2011(平成 23)年、2012(同 24)年の耐震改修により内装はほぼ全面的に改修されているが、当初の木造軸組・小屋組は良好に保存されている。外壁は、増築・耐震改修にあっても当初の凝灰岩積みの状態が良好に保存されている。耐震改修時に凝灰岩積みの事務所主玄関を設けている。本建物は、工場施設の建設初期の遺構であると同時に、工場敷地内全体に見られる統一的な意匠の規範となる建物である。同時に数度の増築、改修においてもその基本的意匠を堅持しているという点で貴重な存在である。

南棟(来館者棟・蒸溜棟 A 棟・アルコールタンク室・倉庫)は、1942(昭和 17)年頃竣工

の建物で、奥山儀八郎版画「大日本果汁株式会社正門 北海道余市 昭和 18 年 7 月」でも描写されている施設である。1961(昭和 36)年ブドー工場であった一部を蒸溜棟 A 棟に改築し、2009(平成 21)年と 2010(同 22)年に耐震改修を受け、内装はほぼ全面的に改修されているが、当初の木造軸組・小屋組は良好に保存されている。耐震改修時に凝灰岩石積の出入口が 3 か所増設されたが、外壁は、増築・耐震改修を経ても当初の状態が良好に保存されている。本建物は、工場施設の建設初期の遺構であり、敷地形状に沿って工場施設群を外界と明確に区切る役割を果たし、また工場敷地内全体に見られる統一的な意匠の規範となっている。同時に増築や耐震改修工事を受けつつも、その基本的意匠を堅持しており貴重である。

蒸溜工場 B・C 棟(2-2)は、ニッカウキスキー(株)北海道工場の歴史を象徴する蒸溜器(ポットスチル)を設置する蒸溜工場施設である。当初は木骨石造平家で、1935(昭和 10)年頃竣工、1936(昭和 11)年 3 月に旧固定資産台帳に記載されている。奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー大麦乾燥工場右と蒸溜工場左 北海道余市町 昭和 18 年 7 月」にも描かれており、工営部技師の土岐喬(1939(昭和 14)～1958(同 33)年在職)の設計、工営部施工で完成した。

1961(昭和 36)年に増改築され、1964(同 39)年現蒸溜工場 C 棟部分を改修増築、1966(同 41)年現蒸溜工場 B 棟部分を改修増築し、当初の木骨軸組と小屋組を鉄骨造リベット接合、鉄筋コンクリート造凝灰岩張り(一部モルタル仕上げ)などに改修、地中梁などによる補強が実施された。正門から続く広場の南に位置し、石炭焚きの蒸溜器 5 基を設置し、最奥部には創設当初のものとする小型の蒸溜器が遺る。外壁は江戸切仕上げの凝灰岩で、アーチ状の出入口と楣付の回転窓を開き、カラー鉄板葺屋根の棟上に明かり塔を設ける。改修に当たっては蒸溜器を大型化するために軒高を高くし、小屋組を鉄骨造としている。工場におけるウイスキーづくりの重要な役割を担う中核施設であり、外観も当初の凝灰岩積の外壁が残り、見学者棟及び貯蔵庫との統一性を保ち、対面する乾燥塔などを含めて工場敷地内の統一的な景観を形成している。

蒸溜工場の西に並ぶ**蒸溜液受タンク室(2-3)**は、1935(昭和 10)年頃竣工の建物で、1936(昭和 11)年 3 月に旧固定資産台帳に記載されている。竣工当初は、木骨石造(凝灰岩積)の平家建て倉庫として建設された。奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー大麦乾燥工場右と蒸溜工場左 北海道余市町 昭和 18 年 7 月」にも描かれており、工営部技師の土岐喬(1939(昭和 14)～1958(同 33)年在職)の設計、工営部施工で完成したと考えられる。1966(昭和 41)年の改修で、当初からの木造軸組やトラス小屋組の梁等を方杖、補強金物で補強している。北妻面にアーチ形戸口を開け、妻壁北側を立ち上げて蒸溜棟と連続させることで一体の景観をつくりあげており、工場構内の統一的意匠を踏襲する建物である。

旧貯蔵棟(蒸溜液受タンク室)の西側に並ぶ**展示室・混和室(旧リキュール工場、2-4)**は、1939(昭和 14)年頃竣工、1940(昭和 15)年 3 月に旧固定資産台帳に記載されている。工営部技師の土岐喬(1939(昭和 14)～1958(同 33)年在職)の設計、工営部施工と考えられる。木骨石造平家建てで、間口 4 間半、奥行 15 間。切妻屋根(5 寸勾配)の棟筋に明り取り越屋根を設けている。小屋組はキングポストトラスである。外壁は江戸切の凝灰岩で、軒蛇腹は他の木骨石造建築と同様に妻壁に折り曲げて止める「コーニス・リターン」とし、工場内の木骨石造建築に共通の意匠である。1967(昭和 42)年に、木骨石造平家(間口 4.5 間、奥

行 9 間)の南側に鉄骨造の混和工場棟を増築しているが、工場構内の統一的な意匠を踏襲して、一体的な景観を創出している。

正門に近い**第一乾燥塔(2-5)**は、控柱をみせる乾燥塔を中心に、左右に 30 度勾配で大屋根を葺き下ろしており、乾燥室の大屋根中央に立ち上がる換気塔がシンボルともなっている。竣工は 1940(昭和 15)年頃で、1941(昭和 16)年 3 月 1 日に旧固定資産台帳に記載がある。石造の一体の建物のように見えるが、中央の第 1 麦芽乾燥室と東側の書庫、西側の第 2 製品倉庫が L 形に接続した 3 棟の建物で構成され、第二乾燥塔とともに正門広場における景観の核となっている建物である。第二乾燥塔と同形式で、正面に 3 箇所のアーチ形開口を見せる。昭和 10 年代後半の工場の趣を現在によく伝えていると同時に、本工場施設のランドマークとしてシンボリックな存在でもあり、さらに製品製造ラインの重要な役割を担う施設として貴重である。

第一乾燥塔の西に並ぶ**第二乾燥塔(2-6)**も、3 棟の建物から構成され、東側から第 3 製品倉庫、第 2 乾燥室、資材倉庫が逆 L 字形に並んでいる。換気塔を掲げる中央棟の左右に約 30 度勾配で屋根を葺き下ろし、正面右は第 3 製品倉庫、左は資材倉庫である。

竣工は 1940(昭和 15)年頃で、1941(昭和 16)年 3 月 1 日に旧固定資産台帳に記載がある。設計は、工営部技師の土岐喬(1939(昭和 14)～1958(同 33)年在職)、施工は工営部と考えられる。また、奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー大麦乾燥工場右と蒸溜工場左 北海道余市町 昭和 18 年 7 月」の作品が残されている。

中央棟中央に要石を見せるアーチ開口とし、左右の棟の開口は要石を強調しないアーチ開口とするが、アーチを支える迫り元柱に緑色凝灰岩(笏谷石か)を使用している。壁体で使用されている石材は第一乾燥塔と同じく、やや黄色味を帯びた凝灰岩である。中央棟は、両端に幅 2 尺、奥行 1 尺ほどの控柱を立ち上げ、左右両棟との分節をはかっている。第 1 乾燥室と同様の仕様で建設されており、乾燥室上部はキングポストトラス、その上部に換気塔を立ち上げている。

第一乾燥塔とともに、正門広場における景観の核となっている存在で、昭和 10 年代後半の工場の趣を現在によく伝えており、本工場施設のランドマークとしてシンボリックな存在でもあり、さらに製品製造ラインの重要な役割を担う施設として貴重である。

リタハウス(旧研究室兼居宅、2-7)は、1931(昭和 6)年頃建設といわれる旧地主但馬八十次郎を購入したもので、1942(昭和 17)年 3 月 1 日固定資産に編入されている。購入後北棟部分は大幅に改造されたようで、最初経理事務所として、次にウイスキー製造工程の研究、ブレンド、成分分析などを行う研究室として、現在の北棟と南棟ホール 2 部分までを研究室として使用され、1964(昭和 39)年に研究室が拡張された。1984(昭和 59)年から 1997(平成 9)年まで竹鶴資料館として利用され、同年 8 月から 2007(平成 19)年 9 月までリタハウスとして利用された。

木造 2 階建、切妻屋根の主棟に棟を直交させた切妻屋根の従棟が続き、腰折れ屋根窓などで飾る。基礎は玉石積、外壁はモルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)とモルタル洗出仕上に塗分け、開口部の多い開放的なつくりが特徴である。

多くの改修を受けている建物であるが、黒川町の広大な湿地を 1920(大正 9)年頃から埋め立て工事を開始し、またウイスキー工場を現在地に誘致したといわれる但馬八十次の旧邸を引き継ぐ建物で、工場構内の施設の建設以前から存在する建物であり、さらに工場製

品の質の向上や開発を支えてきた研究室という重要な役割を担った貴重な存在ということができる。

旧竹鶴邸(2-8)は、旧専務社宅として1934(昭和9)年頃建築されたもので、1942(昭和17)年に専務住宅(32坪)の南側に事務所部分14坪24を増築。1943(昭和18)年に塀の改修工事。その後塀は取り払われ、増改築が実施されたようで、移築間近の規模は62.18坪であった。設計は、工営部技師の土岐喬(1939(昭和14)～1958(同33)年在職)、施工は工営部と考えられる。1946(昭和21)年頃に山田町389番地に移築された。南側玄関棟と北側母屋とを渡り廊下でつないでいるが、建築当初からの母屋を山田町に移築後、母屋部分の再構成と玄関棟の増築が行われたと思われる。1994(平成6)年に有限会社本間組建工により、移築復元工事業務で図面が作成され、2002(平成14)年8月から11月末にかけて、阿部建設株式会社によって現在地に解体・再移築された。移築の際に、主要構造材は新材によって替われ、2階内部は復元されなかったものの、山田町時代の姿を内外ともに忠実に踏襲し、内部の建具や調度品なども移築前の状況に極力復元されており、創設者竹鶴政孝、リタ夫妻の西欧風日常生活を伝える遺構として貴重である。

旧大日本果汁株式会社余市工場創立事務所(旧社長室・会長室、2-9)は、正門に対面するように位置する小さな建物で、会社創設時の1934(昭和9)年7月頃竣工の旧事務所であり、1935(昭和10)年3月に旧固定資産台帳に編入されている。創建当初は、3×3間の正方形平面の西側に1.2×4.8尺を突出した9.16坪の木造平家の事務所であった。1946(昭和21)年頃桁行2間ほどを増築し、桁行5間とした。1955(昭和30)年以降作成と考えられる図面には「木造平家建 建坪 一六坪 小屋組西洋合掌 床板張り 高さ三・五米 内部シックイ壁仕上 外部腰石積其ノ他モルタル仕上 家根亜鉛引鋼板葺」(工場建物圖)とあるので、この時期に平面の拡張や、腰部分の石積みと上部のモルタル仕上げの改修や、玄関ポーチの重厚な意匠への変更などがなされたと思われる。2001(平成13)年に、木摺漆喰下地の上にラス下地の追加、床根太や床材の取替え、前室間仕切りの造作など、既存の空間を維持しつつ、観覧用の現状に改修された。改修を受けているとはいえ、工場施設最古の記念建築物であり、1980(昭和55)年「余市の工業発達の足跡を示す文化的資産」として余市町文化財に指定された。企業内建物としては、北海道初の文化財指定でもあった。

第一貯蔵庫(2-10)は、創建時は中島倉庫と呼ばれ、構内の原酒貯蔵庫の第1号にあたる貯蔵庫で、構内で最初の木骨石造建築として建設された。以降、構内の施設には石材が採用されるようになったという。創建時は、余市川の中州にあたる埋め立て前の中島の敷地で、貴重なウイスキー原酒を火災から守るために配置されたもので、固定資産編入日が1940(昭和15)年3月1日なので、1939(昭和14)年頃建設と考えられる。中島周辺は、1940(昭和15)年以降に埋め立てられていった。梁間4間半桁行27間の切妻造、鉄板葺で、軒蛇腹は妻壁に廻った位置で止める。妻面にアーチ型の戸口を開き、上部に小窓を設ける。小屋組はキングポストトラスである。本建物の特徴づける意匠として妻面中央に設けられた入口があり、両袖柱に緑色凝灰岩(笏谷石か)を立て、柱上部に灰色凝灰岩の切石によるアーチを設けていることがあげられる。このアーチは、工場内の他施設でも多用されている意匠でもある。

本建物は、原酒貯蔵庫の第1号にあたる貯蔵庫で、構内で最初の木骨石造建築として建設され、また構内の建物に採用される石材採用の端緒を開いた建物であり、構内の敷地の

変遷を示す記念碑としても貴重である。

第二貯蔵庫(2-1 1)は、中島第二貯蔵庫と呼ばれた貯蔵庫で、1946(昭和 21)年 3 月の旧固定資産台帳には記載があるが、1943(昭和 18)年制作の奥山儀八郎の版画には描かれているので、1943(昭和 18)年以前の竣工とも考えられる。ただ本版画には、1955(昭和 30)年竣工の第三貯蔵庫も描かれており、制作年には疑問の残るところでもある。2017(平成 29)年に耐震診断調査が実施され、2018(平成 30)年頃に鉄筋水平ブレースや補強金物の付加など、耐震補強工事が実施されている。建物を特徴づける意匠として北妻面中央に設けられた入口があり、両袖柱に緑色凝灰岩(笏谷石か)を立て、柱上部に灰色凝灰岩の切石によるアーチを設けていることがあげられる。このアーチは、工場内の他施設でも多用されている意匠でもある。切妻屋根の外観は、他の貯蔵庫とも共通する意匠で、外壁の特徴的なモルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)は、第一貯蔵庫などに採用された凝灰岩積みとの統一性を意識した意匠とも考えられ、また第一、第三貯蔵庫を含め、1943(昭和 18)年制作の奥山儀八郎の版画にも描かれており、創業時の景観を伝える上で、貴重な存在の一つである。

第三貯蔵庫(2-1 2)は、中島第三貯蔵庫と呼ばれた貯蔵庫で、1955(昭和 30)年に竣工した。控柱付きモルタル仕上げの貯蔵庫の標準設計図と考えられる『貯蔵庫建築設計圖』には、「二級建築士登録第一四四号 土岐 喬」との記載があるので、設計者の可能性が非常に高い。土岐喬は、ニッカウキスキー(株)北海道工場工営部職員として、1939(昭和 14)年～1958(同 33)年に在職した人物である。2017(平成 29)年に耐震診断調査が実施されたが、翌 2018(同 30)年 2 月に北側 163.64 m²が倒壊したため、同年 11 月北側妻壁ほかの改修が行われている。竣工当初は、梁間 5.5 間、桁行 27 間、建築面積 148.5 坪(490.90 m²)であったが、現在は、桁行 18 間、建築面積 99.0 坪(327.26 m²)である。本建物は、創建時から北側 9 間分が倒壊してはいるが、倒壊後の補修にあたっては、他の貯蔵庫の外観意匠との統一を図っており、また埋立て前の中島に建設された第一、第二貯蔵庫と同様に、工場創業時の歴史を語る貯蔵庫群の一つとして貴重である。

機械工場(2-1 3)は、建物管理台帳では 1949(昭和 24)年 7 月竣工、旧固定資産台帳では 1959(昭和 34)年 12 月に編入されている。当初、梁間 4.5 間・桁行 6 間ほどの機械修繕工場として建設されたものと考えられ、その後、工場後側に物置を、1959(昭和 34)年頃に建物のほぼ中央部分に 2 階(3 間四方)を増築したものと考えられる。2017(平成 29)年耐震診断調査を実施した。

外壁は工場部が特徴的なモルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)であるが、物置はモルタル刷毛引仕上で、工場 2 階と物置の増築時期の違いを反映しているのかもしれない。カラー鉄板葺きの切妻屋根で、当初建設の工場、増築の 2 階、物置共に、鼻隠を垂直に張り、破風尻もこれに合わせて垂直に切り落とし、軒天井を水平に張る意匠は共通する。本建物の特徴的な意匠として、南面のほぼ全面のガラス窓開口が挙げられる。巾 1 間の欄間付半紙判ガラス 9 入の引違窓が 6 連集中して設けられ、工場作業への十分な採光を考慮したものと考えられる。本建物は、工場内の機械の保全・維持のために機械修理工場としての機能を果たした建造物であるが、屋根や外壁仕上げの技法は、大正期から昭和 30 年代頃まで北海道内の木造駅舎や官舎などに用いられた意匠とも類似性を持ち、北海道における建築意匠や技法の歩みを考える上でも貴重な建物といえる。

麦芽倉庫・フレコン室(旧麦芽倉庫、2-1 4)は、旧固定資産台帳では 1934(昭和 9)年頃

竣工とあり、奥山儀八郎版画「創立事務所から正門を望む 北海道余市ニッカ工場 昭和18年7月」に描かれている。ウイスキーの原料の一つである麦芽の貯蔵庫で、梁間4.5間、桁行22.5間の長大な木骨石造(凝灰岩)貯蔵庫である。2017(平成29)年に耐震診断が行われ、その後耐震改修工事が実施され、一部陸梁・合掌を鉄骨で補強。陸梁・合掌など新規木材・ボルトで補強、方杖による補強、内壁ほぼ全面を構造用合板張りに改修されているが、建物全体が東側に傾斜している。本建物は構造上大規模な改修が行われているものの、外観は当初の凝灰岩積構造を可能な限り温存し、改修部分についても当初材料とは異なるものの当初外壁の材質感を良好に再現しており、構内中央通りの統一された景観の構成要素として貴重である。

現場事務所(旧給食場、2-15)は、梁間5間・桁行8間ほどの洋樽工場として1957(昭和32)年建設。1964(昭和39)年製樽工場移転に伴い給食室へ用途変更、同年調理室を増築したものと考えられる。2017(平成29)年頃耐震改修工事を実施。外壁は給食場、調理上共にモルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)で、機械修繕工場や第二貯蔵庫と共通する意匠である。また、巾1間の半紙判ガラス9入引違窓を外壁全周に一間置きに配置し室内への採光に配慮している点や欄間付玄関庇などが特徴としてあげられる。また、鼻隠を垂直に張り、破風尻もこれに合わせて垂直に切り落とし、軒天井を水平に張る技法は、機械修繕場や他の工場施設・貯蔵庫に共通する意匠である。

本建物は、当初は洋樽工場として建設されたもので、外観は工場全体に見られる統一的な意匠を踏まえつつ、給食場としての機能を長年果たした建造物である。同時に、屋根や外壁仕上の技法は、大正期から昭和30年代頃まで北海道内の木造駅舎や官舎などに用いられた意匠と類似性をもち、北海道の建築技術の歩みを考える上で貴重である。

連続蒸溜工場(2-16)は、建物管理台帳から1949(昭和24)年7月竣工、旧固定資産台帳には1958(昭和33)年12月編入された。外壁はコンクリート成形板張りで、鉄骨造3階建て。天井は鋼板張小屋組現しとし、小屋組はL字形鋼を放射状に配置し屋根下地の鋼板を支持している。床は、1階コンクリート土間、2階網目鋼板張、3階L形鋼枠に鉄筋を小間返の間隔に溶接した質の子床とする。鉄骨はリベット留である。鉄骨のリベット接合工法は、鉄骨造成立の初期から用いられ、昭和30年代まで鉄骨の接合方法の主流だった工法で、建設年代を知る指標であると同時に貴重な技術遺産といえることができる。工場群の中では異質な建物ではあるが、他施設と同系色の外装材の使用や方形屋根の頂部に小さな尖塔を載せるなど、周囲の景観に配慮した努力がうかがえる建物である。

発酵室・濾過室(2-17)は、(株)日建設計北海道事務所設計で、1960(昭和35)年11月竣工した。主要構造を鉄骨造、外壁廻りを鉄筋コンクリート造とする混構造で、濾過室と醗酵室の隔壁はコンクリートブロック積としている。基礎は鉄骨柱毎に基礎を設け、地中梁でつなぐ。鉄骨はリベット接合、外壁は鉄筋コンクリート造の外部に凝灰岩張を基本とするが、北面だけは鉄筋コンクリートの上にモルタル塗で他の外壁に合わせた凝灰岩切石様の目地仕上としている。西面は、楕形アーチ状の大きな窓を連続し、周辺施設群の景観への調和を図りつつ、工場内への採光を確保している。屋根は切妻屋根を基本とするが、南面は半切妻屋根とし、棟筋に4基の換気塔を設けている。内部は、壁はモルタル金鍍仕上ペンキ塗。床はコンクリート土間、タイル張、樹脂塗床。天井はフレキシブルボード張ペンキ塗・鉄骨現しとする。鉄骨をリベットで接合する工法は、連続蒸溜工場でもみられ

た工法で、鉄骨造成立の初期から昭和 30 年代までは鉄骨接合の主流であった。と同時に鉄筋コンクリート造壁との混構造など、技術遺産としても興味深い。

製樽工場(2-18)は、1964(昭和 39)年に既設の第 1 樽材乾燥場を現位置に曳家し、同時期あるいは直後に東側へ片流れ部分を増築。その後、1984(昭和 59)年に既設建物の形式に合わせて桁行 6 間の増築を行ったと考えられる。さらに 1987(昭和 62)年には東側に鉄骨造の作業場を増築し、渡り廊下で接続する。開口部の配置などを見ても、南妻面・西面のシャッター廻りなどは改造による柱配置の変更が読み取れる。1964(昭和 39)年の移築以来、数次の改造・改修を経ているが、外壁仕上げ、軒先の意匠、欄間付き木製半紙判ガラス窓などは当初のものを保持していると考えられる。切妻屋根平家のシンプルな施設であるが、外壁をモルタル掃付仕上げ(ドイツ壁)とし、軒先の意匠、欄間付木製 9 入窓を用いるなど、他の施設と同様に景観に配慮した意匠を踏襲していること、ウイスキー醸造に欠かすことができない原酒貯蔵樽の製造や補修・メンテナンスを担う製品製造ラインを支える施設として重要である。

アーチ壁(2-19)は、麦芽倉庫・フレコン室と連続蒸溜工場間および連続蒸溜工場と発酵室・濾過室間の通路南面に設けられた凝灰岩積みの壁とアーチ。麦芽倉庫・フレコン室と仕込工場間の南面は、通路を含めて一体の建物であるかのように外壁を連続している。麦芽倉庫・フレコン室～連続蒸溜室間は、1942(昭和 17)年頃竣工。奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー大麦乾燥工場右と蒸溜工場左 北海道余市町 昭和 18 年 7 月」にも描かれる。連続蒸溜工場～醗酵室・濾過室間は、建物管理台帳では 1949(昭和 24)年頃、固定資産台帳では 1958(昭和 33)年竣工とある。

麦芽倉庫フレコン室と連続蒸溜工場間の壁は両建物の棟高から水平に連続して設けられ、外観上、違和感を与えないと同時にバックヤードの領域とを穏やかに区画し、巾 2.81m、最高アーチ高 2.98m の作業用通路として大きな開口部を確保している。開口部は胸高まで緑色凝灰岩(笏谷石か)石柱を両側に建て、上部に幅広の迫受石を置き、その上に駒形の迫石をアーチ状に積み上げる形式で、両隣の麦芽倉庫・フレコン室や仕込工場の出入口に設けたアーチばかりでなく北海道工場の施設全体の開口部の意匠と共通すると同時に最大規模のアーチでもある。

連続蒸溜工場と醗酵室・濾過室の南面も景観を損なわないように凝灰岩積みアーチ壁となっているが、麦芽倉庫・フレコン室～連続蒸溜工場間の一体化した壁とは異なり、仕込工場の軒下高を基準に壁を設け、中央のアーチ開口部分を台形上に 1m 程かさ上げし、前記したアーチとほぼ同規模、同意匠のアーチを設けている。この形式の違いは、麦芽倉庫・フレコン室～連続蒸溜工場の場合、棟高がほぼ同一であったために一体の壁体にすることが可能だったのに対し、連続蒸溜工場と醗酵室・濾過室の棟高が大きく異なり一体の壁体とすることが困難だったことによると考えられるが、麦芽倉庫から醗酵室・濾過室の外観を整えたばかりでなく、正門から続く中央通りの景観を良質に維持した意味でも重要な存在である。

石造裏門(2-20)の建設年代を示す資料は少ないが、奥山儀八郎版画「大日本果汁株式会社正門 北海道余市 昭和 18 年 7 月」では、ニッカウキスキー(株)北海道工場の正門外観の左端に特徴的なアーチと門柱を持った裏門が描かれ、1942(昭和 17)年頃の建設と考えられる。裏門には凝灰岩積の 2 つの門が設けられ、南面(工場敷地外の道路側)から見て、

左側にアーチ門、右側には両袖に門柱を立てた門が設けられている。左側のアーチ門は巾 1.85m、アーチ高 1.7mほどで工場内施設に設けられるアーチ開口部と類似する形式で、胸高ほどまで石柱を建て上部に迫受石を置きその上にアーチを置くが、工場内施設のそれと比べてアーチのカーブは扁平で迫石は台形、アーチの上部に二重の笠木を載せている。アーチのカーブ全体が扁平で、頂点付近のカーブがとりわけ緩いことが特徴的で、3点アーチあるいは上部の笠木と合わせて観察すると中国の庭園や伝統的な邸宅建築に見られる石積門や社寺建築の向拝などに見られる唐破風屋根の曲線を想起させる意匠でもある。向かって右側の門は、幅 90 cm角、高さ 1.8mほどで1対に立つ。石幅が不規則な切石乱積で積まれ、鉄製の両開き扉を設けている。石造裏門の建設経緯については不明な点も多いが、建設当時には旧研究室、役員社宅などが石造裏門近傍の工場敷地内に所在していたことから、職員の通用門及び資材搬入口として利用されたものと考えられる。工場全体に残る施設の中でも創建初期に建設されたもので、ニッカウヰスキー(株)北海道工場の初期の姿や歴史を伝える上で貴重な建造物といえる。

以上 20 件の構内の歴史的建造物について概説した。現在も稼働し続けている北海道工場内では、明記されたデザインコードは残らないものの、正門前広場から中央通りの景観を維持しつつ、工場内施設の外観意匠の統一を意識的に継続してきた姿勢は大いに評価されるべきものである。と同時に、建造物の意匠のみならず、製品製造過程を視覚的に捉えることのできる施設群がこれほどまでに良質な状態で維持されてきたことは、ともすると合理的なサイクルで再整備されることの多い産業施設群にあつては、非常に貴重な存在とすることができる。

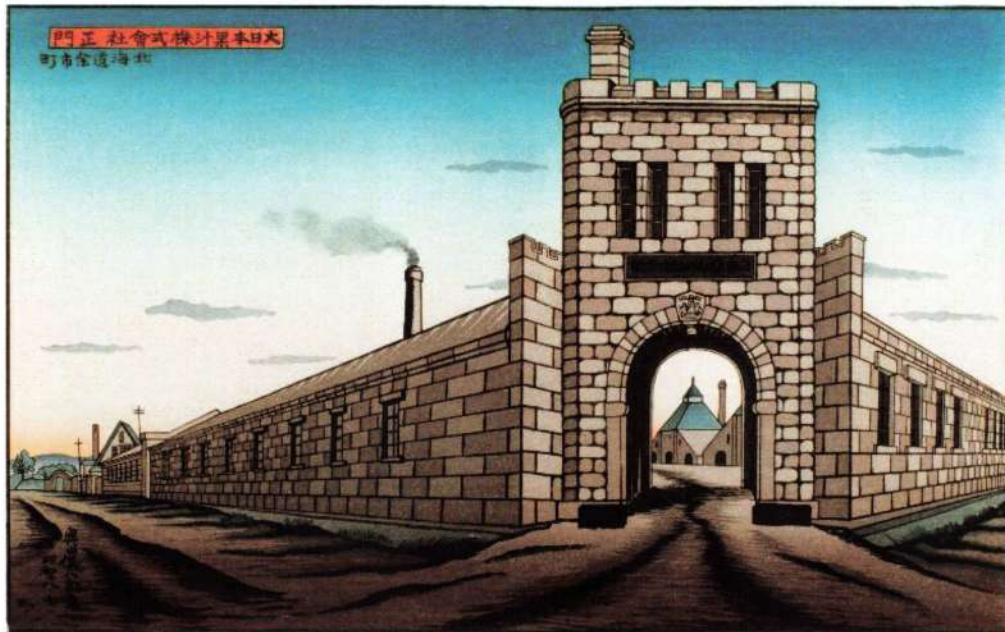
資料

ニッカウヰスキー(株)北海道工場所蔵 古図面名称一覧
奥山儀八郎 版画

No.	図面名称	縮尺
1	工場敷地及建物配列圖	1/1200
2	無題（社員住宅地区）	
3	工場敷地及建物配列圖	1/1200
4	工場建物平面圖	1/300
5	大日本果汁株式會社工場敷地及建物配列圖	1/300
6	無題（河川流域図）	
7	小屋組断面図	1/40
8	倉庫増築設計圖 断面詳細図	1/10
9	社長室設計圖	
10	倉庫増築設計圖	
11	無題（正門敷地外側より）	
12	倉庫増築設計圖 防火壁詳細図	1/40
13	第一、第二、第三倉庫設計図	
14	葡萄工場、材料倉庫、守衛室、事務所及び休憩室設計圖	
15	大日本果汁株式會社工場正面建物設計圖	1/40
16	大日本果汁株式會社工場正面建物設計圖	1/50
17	倉庫増築設計圖	1/40
18	倉庫増築及乾燥室新築設計圖	
19	乾燥室設計圖	
20	工場敷地及建物配列圖附近見取図	1/1200
21	ニッカウキスキー株式會社北海道工場圖	1/1200
22	工場敷地及建物配列並ニ附近見取圖	1/1200
23	大日本果汁株式會社余市工場建物配列圖	1/300
24	工場敷地及建物配列圖	1/1200
25	大日本果汁株式會社余市工場敷地及各建物配列圖	1/300
26	大日本果汁株式會社余市工場敷地及各建物配列圖	1/300
27	中島第 貯蔵庫及樽材乾燥場建築設計図	
28	汽罐室設計圖	
29	汽罐室設計圖	
30	洋樽工場移轉改築設計図	
31	出来形正面圖	1/40
32	蒸餾工場及貯蔵庫設計圖	
33	無題（正門敷地内部より）	
34	貯蔵庫建築設計圖	
35	倉庫増築及乾燥室改築設計圖	
36	貯蔵庫建築設計圖	
37	貯蔵庫建築設計圖	

No.	図面名称	縮尺
38	貯蔵庫建築設計圖	
39	貯蔵庫建築設計圖	
40	樽材乾燥場建築設計図	
41	製樽工場及砂糖倉庫設計図	
42	倉庫移転設計図	
43	研究室設計圖	
44	倉庫増築設計圖	
45	貯蔵庫建築設計圖	
46	倉庫増築平面圖	1/200
47	工場物置改築設計圖	
48	大日本果汁株式會社社員用浴室設計圖	
49	現場従業員便所設計圖	
50	現場事務所設計圖	
51	倉庫増築設計圖	
52	製汁工場設計圖	
53	壩詰工場設計圖	
54	倉庫増築及乾燥室新築設計圖	
55	倉庫増築及乾燥室新築設計圖	
56	苞倉庫設計圖	
57	倉庫増築設計圖	
58	壩詰工場附属壩置場増築設計圖	
59	給食場調理場増築設計図	
60	樽材乾燥場仮建築設計図	
61	中島第五貯蔵庫建築設計図	
62	機械修繕工場改築設計圖	1/60
63	機械工場設計圖	
64	事務所増築設計図	
65	倉庫改築設計圖	
66	無題（第七倉庫増設図）	
67	貴賓室家根見取図	1/60
68	平面図	1/50
69	倉庫増築設計圖	
70	無題（事務所棟）	
71	倉庫増築設計圖	
72	無題（集合住宅か）	
73	平面図	1/120
74	無題（会館立面図か）	

No.	図面名称	縮尺
75	野球バックネット新設圖	
76	無題（事務所棟か）	1/100
77	無題（事務所棟か）	1/50
78	壘詰工場附属荷解場増築設計図	
79	無題（事務所棟か）	
80	無題（正門敷地外側から）	
81	洋樽工場建築設計図	
82	土地及建物配列圖	1/1200
83	橋梁架設平面圖	1/600
84	工場敷地並ニ建物配列実測圖	1/600
85	工場敷地及建造物配置圖	1/1200
86	工場敷地及建物配列並ニ附近見取図	1/1200
87	汚水排水用土管布設平面図	1/1200
88	河川工作物並ニ工場汚水処理一般平面図	1/1200
89	工場建物圖	1/300
90	工場敷地及建造物配置圖	1/1200
91	工場敷地異動区域図	1/1200
92	橋梁設計圖	
93	附近見取図	1/1200
94	建物配置図	1/600
95	工場敷地及建造物配置図	1/1200
96	湿地よりの樋門設置位置調	1/1200
97	無題（排水用土管布設工事平面図）	
98	工場建物配置図	1/1200
99	無題（醗酵室並瓶詰工場増築図面か）	
100	排水用土管布設工事設計圖	
101	無題（蒸溜工場改築図面）	
102	壘詰工場機械設備配置図	1/100
103	ダムウエーター	
104	蒸溜工場初溜再溜配管図	
105	余市驛賣店及看板灯位置図	
106	余市驛ホーム賣店及看板灯配線圖	
107	無題（余市駅第二ホーム出店予定の図案か）	
108	無題（ニッカボトルデザイン）	
109	余市驛ホーム賣店及両面電気サイン看板設計図	1/100
110	余市驛ホーム賣店及電気サイン看板設置設計図	

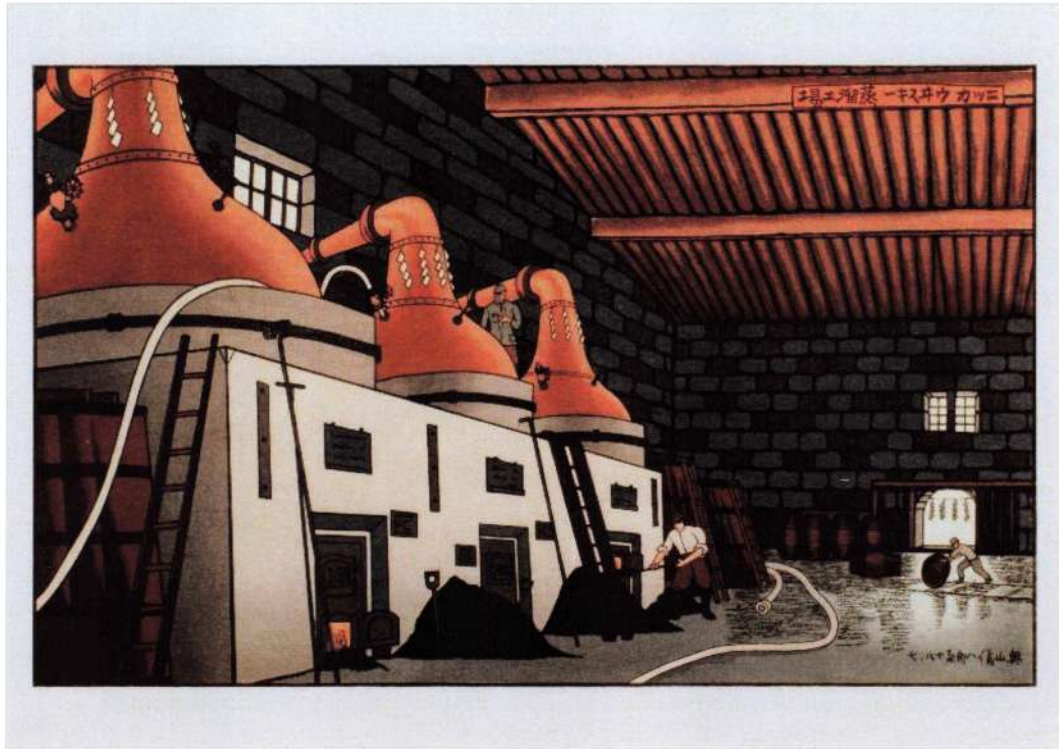


奥山儀八郎版画「大日本果汁株式会社正門 北海道余市 昭和18年7月」

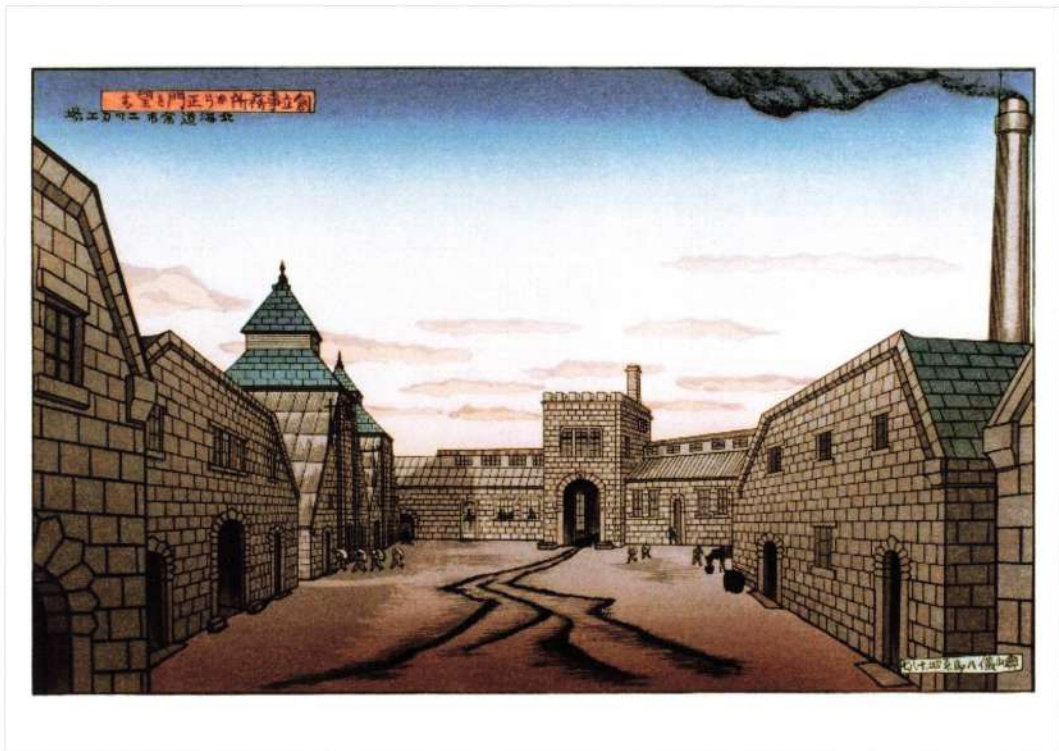


奥山儀八郎版画

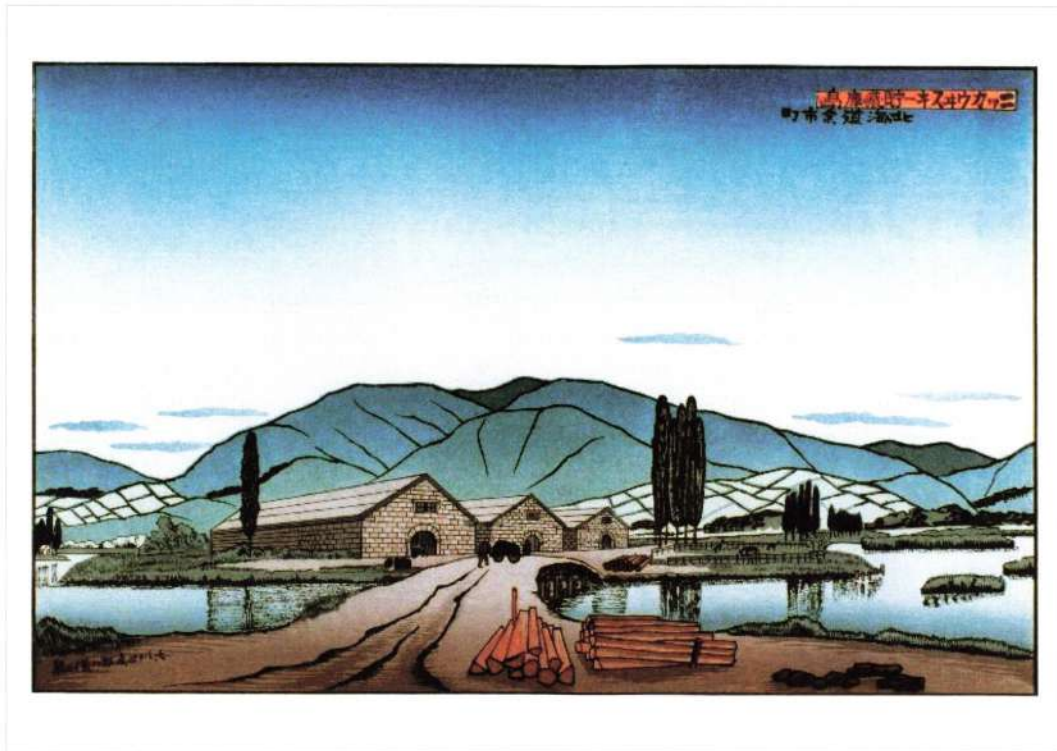
「ニッカウキスキー大麦乾燥工場右と蒸溜工場左 北海道余市町 昭和18年7月」



奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー蒸溜工場 昭和18年7月」



奥山儀八郎版画
「創立事務所から正門を望む 北海道余市ニッカ工場 昭和18年7月」



奥山儀八郎版画「ニッカウキスキー貯蔵庫鳴 北海道余市町 昭和18年7月」

<参考文献一覧>

- ・80年史編纂委員会 『ニッカウキスキー80年史 1934-2014』（ニッカウキスキー株式会社 2015(平成27)年)
- ・余市町史編纂室編 『余市郷土史 第6巻 余市商工鉦業発達史(史料二)』（余市町 1995(平成7)年)
- ・米本健他 『ニッカウキスキー株式会社北海道工場余市蒸留所の施設と配置計画について』（日本建築学会北海道支部研究報告集No.83 2010(平成22)年)
- ・浅野敏昭 『ニッカウキスキー(株)北海道工場の土地利用について 余市川河岸の埋立に伴う敷地拡大の変遷を中心に』（余市水産博物館研究報告第8号 2002(平成17)年)
- ・西野精 「余市町の酒造り」(『ひびけ 1985.10.21 第16号』)

**令和2年度
ニッカウヰスキー(株)北海道工場 建造物調査報告書**

発行日 令和3年3月
編集 特定非営利活動法人 歴史的地域資産研究機構
発行 余市町教育委員会